

## 一 遺跡の位置と歴史的環境

奄美大島は、琉球列島の北半中央部に位置する島で、列島内では沖縄本島に次いで二番目の面積をもつ。その最北端の笠利半島は、島内でもとくに砂丘とサンゴ礁の発達する地域である。

奄美大島は、地帯構造的には、堆積岩や火成岩からなる中帯に属し、地形・地質学的には、トカラ海峡と宮古凹地の断層地形で区分される中琉球に属する<sup>(1)</sup>。第3図に見られるように笠利半島は、おもに泥岩や砂岩を基盤としており、これを笠利石灰岩、土盛砂丘（旧期砂丘）砂が覆い、さらにこれを新期砂丘砂が覆っている。現在の砂丘はこの上に堆積している。笠利半島において、遺跡は旧石器時代以来、砂丘地に発見されることがほとんどで、現在の集落も砂丘上にある。砂丘が、昔から人々の生活の場だったことがわかる。またこれらは共通して、サンゴ礁の発達した海に面している。サンゴ礁はリーフ内に魚類や貝類を育み、外洋の荒波を穏やかにし、生活するのに適した環境を作り出している。笠利半島に遺跡が集中しているのは、安定した食資源を与えるサンゴ礁の海と、砂丘地形によるところが大きいといえよう。我々の調査した用見崎遺跡も、このような条件を備えた笠利半島北端に位置している。

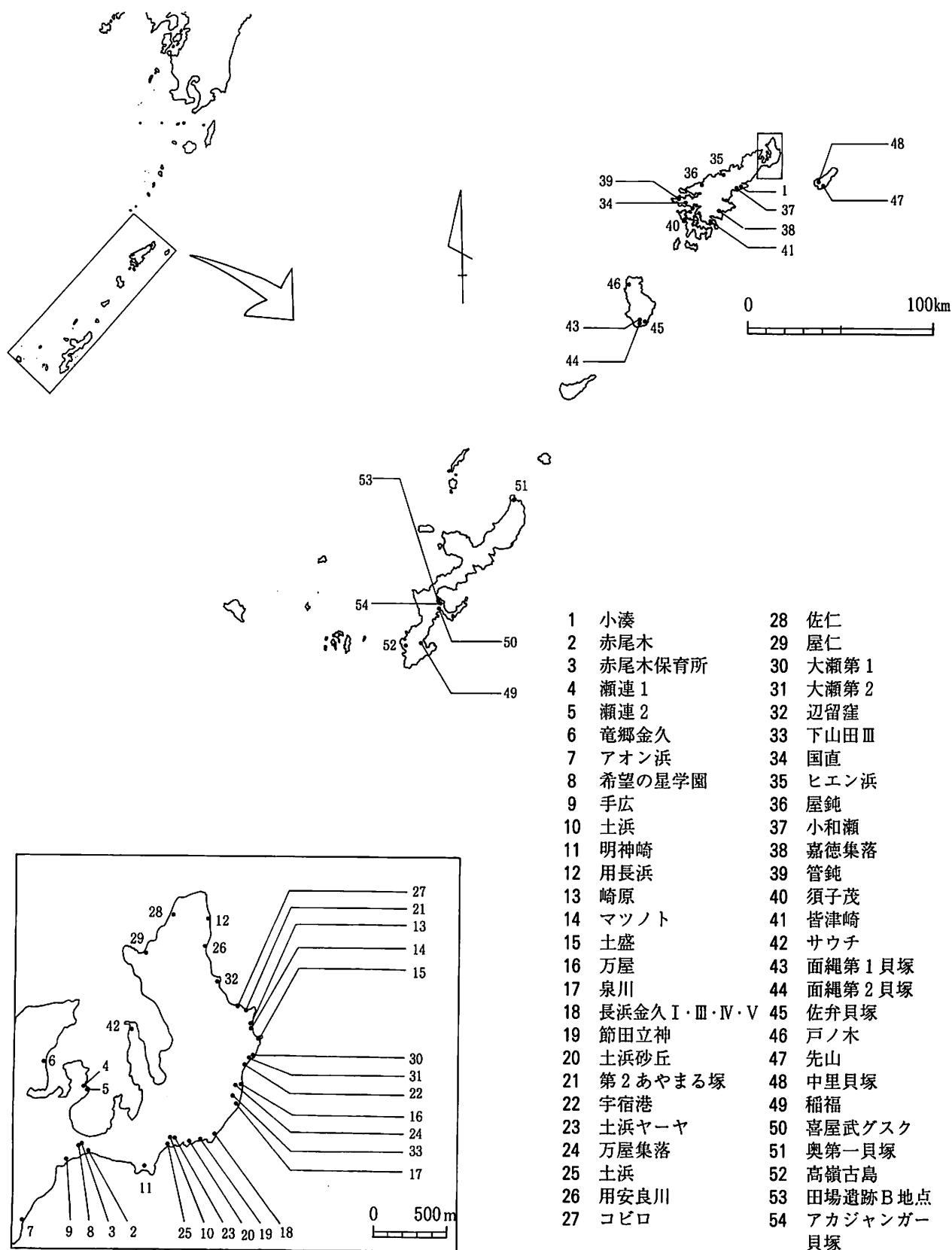
ところで歴史的・文化的に見ると、奄美大島は南島中部文化圏に属し、南九州の強い文化的影響下にありながらも、独自の文化を生んだ地域とされている<sup>(2)</sup>。笠利半島では、土浜ヤヤ遺跡の遺物において旧石器時代の人の生活が証明され、続く各時期の遺跡の確認によって、人間の生活活動が絶えることなく現在まで続いていることがわかってきている。その間、縄文・弥生時代相当期においては、九州の曾畑系土器や市来式土器、松山式土器、夜臼系土器、亀ノ甲系の土器など、南九州から北部九州に至るまでの土器型式が奄美大島にも認められ、奄美大島には産出しない黒曜石も認められる。一方、ヤブチ式土器、カヤウチバンタ式土器など沖縄の土器型式も認められる。12～15世紀のグスク時代には、大陸や朝鮮半島、九州との交渉を示す白磁、青磁、類須恵器などがこれに加わる。これらの他地域からの影響のもとに、奄美系土器にみるような文化が展開してきたのである。

用見崎遺跡は、兼久式土器の単純遺跡であることがわかってきた。兼久式土器は奄美大島独自の型式の土器とされ、本土の時代区分に対応してみると、弥生時代後期から平安時代という長い時間幅をもって捉えられている。これは沖縄地域でいうと、貝塚時代後期に対応し、南島において具体的な文化内容のほとんど把握されていない時期に相当する。続くグスク時代の展開に兼久式期がどのような意味をもち、グスク時代の文化がどのようにして成立したのかは、南島の古代史研究の大事なテーマである。それはまた、我々が、当遺跡を継続調査する所以でもある。

（濱田）

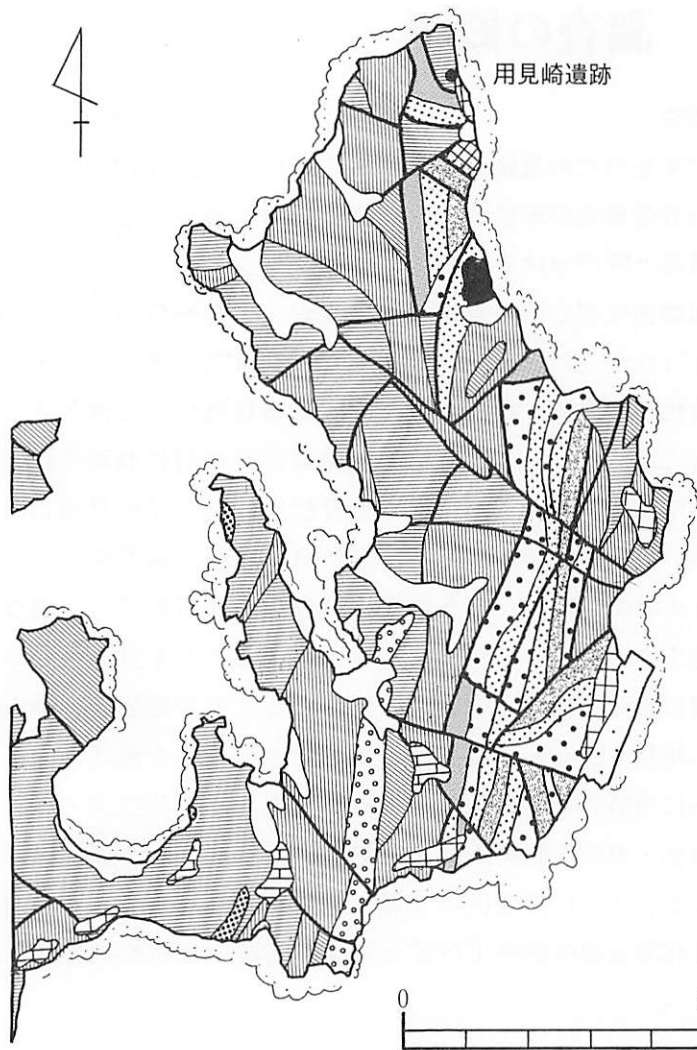
註 (1) 木崎甲子郎編著『琉球弧の地質誌』 沖縄タイムス社、1985年。

(2) 国分直一著『南島先史時代の研究』 慶友社、1972年。



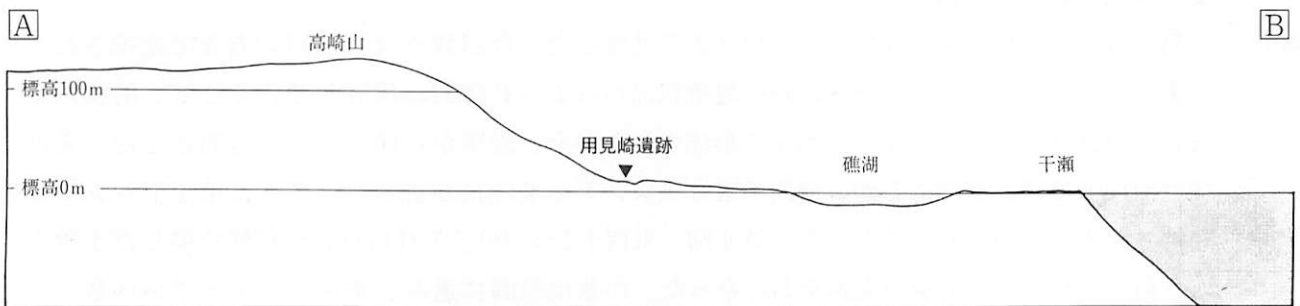
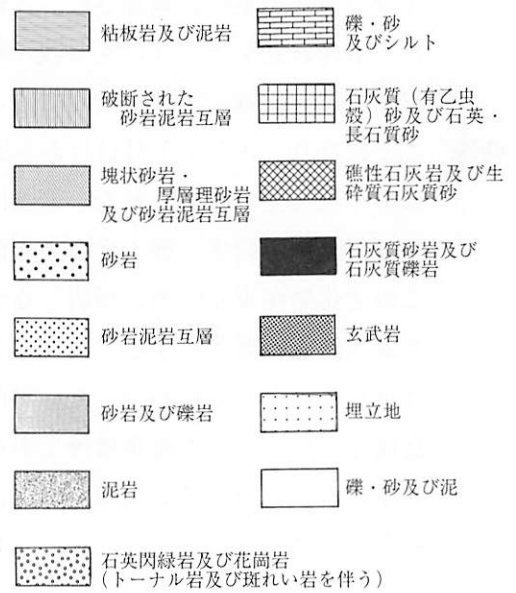
第1図 南島中部圏における兼久武士器および併行期土器出土分布図

(沖縄についてはアカジャンガー式土器・フェンサ下層式土器とした)



第2図 笠利半島地質地図

(奥村公男編『日本地質図大系 九州地方』朝倉書店、1995出典、一部改変)



第3図 遺跡周辺地勢図

## 二 調査の概要

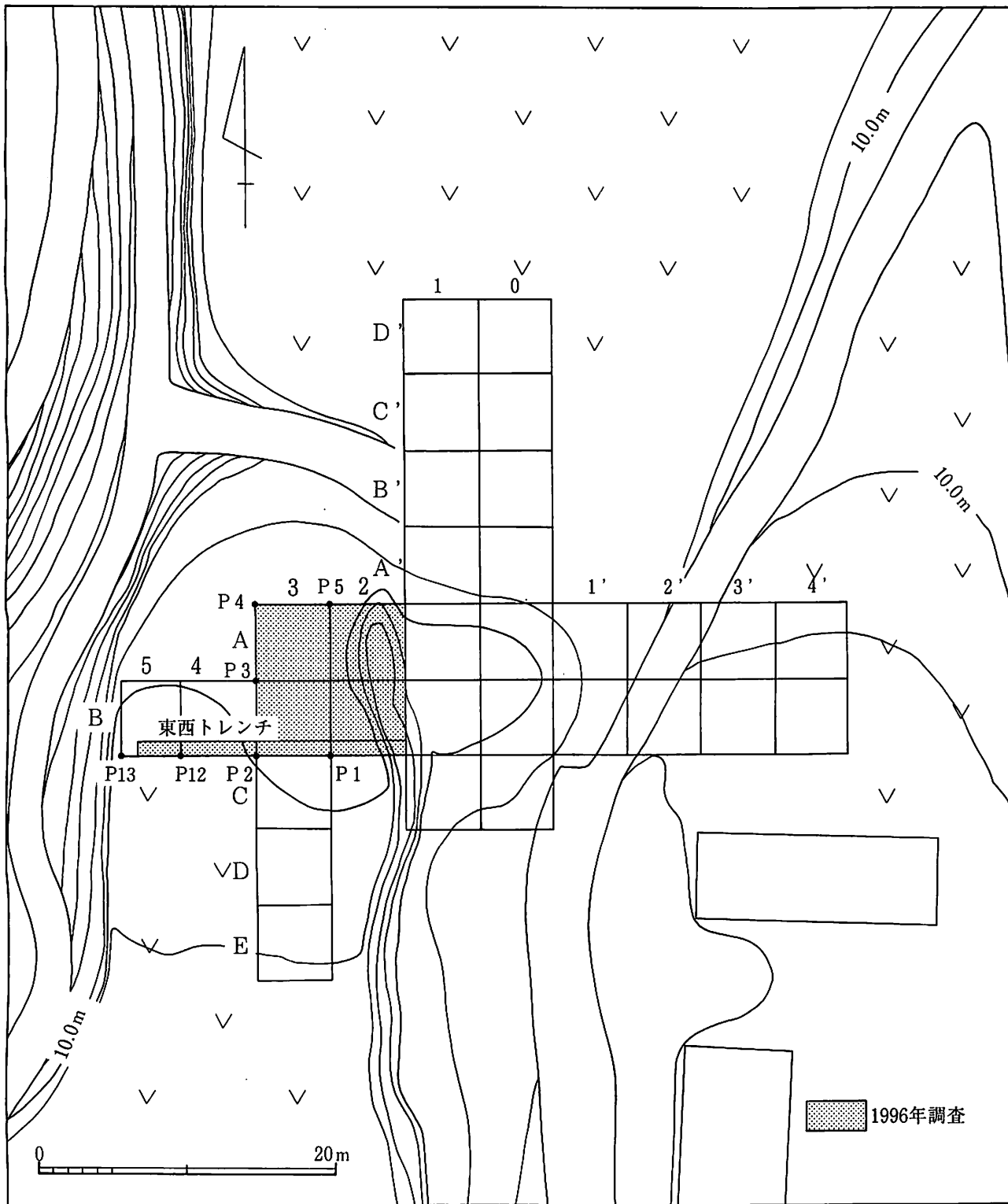
### 1. 調査に至るまでの経過と過去の調査

笠利町東海岸に南北に広がる砂丘に先史時代の遺物が含まれることは、すでに1960年代から知られていた。近年になって笠利町教育委員会が本格的な分布調査をおこない、その結果砂丘の北側を用見崎遺跡、南側を用長浜遺跡と呼び分けることになった<sup>(1)</sup>。

- 第1次調査** 現在遺跡は長島商事かごしま熱帯植物園笠利分園の敷地内にあるが、遺跡を含めた砂丘の一部を開発することになり、1994年12月11日から22日まで、笠利町教育委員会が事前の発掘調査をおこなった<sup>(1)</sup>。その結果、古墳時代から古代に相当する兼久式期の建物跡が2棟と大量のヤコウガイの集積が確認され、これまで不明だったこの時期の文化像が具体的にわかりはじめた。南島研究をテーマにもつ我々考古学研究室では、本遺跡の重要性に注目して用見崎遺跡を実習発掘地候補に選定したところ、幸い長島商事と笠利町教育委員会の理解と協力を得られることになり、1995年7月11日から21日までの期間で、第2次発掘調査を実施した<sup>(2)</sup>。調査では第1次調査で指摘された、溝状凹地を含めた遺跡の性格を明らかにすることを目的の一つに挙げた。その結果、第1次調査区西側に兼久式期の文化層がのびていることを確認し、さらにこの文化層が東から西に傾斜しながら堆積し、a～eの薄層に細分できることを確認した。また溝状凹地が兼久式期まで溯り、さらに当時の人々がこれを境として東西で生活空間の使い分けをしていたことがわかった。山田康弘・原田範昭両氏は、遺物の出土状況から、調査区が食物残滓や生活用具の廃棄場所であること、さらに調査区の一部に屋外炉の存在することを指摘している。しかし第2次調査では、文化層上面の掘り下げにとどまり遺跡の性格を具体的に検討するには至らなかった。

### 2. 調査の目的と経過

- 調査過程** 第3次調査は1996年7月11日から22日まで実施した。今回我々は、前回の調査で指摘された廃棄場所としての性格を、自然遺物の堆積状況からより具体的に検討していくこと、溝状凹地および遺跡と砂丘がどのような順序で形成されたかを、層序から探ることを目的とした。発掘区は前回とほぼ同様であるが、前回の第3トレンチを東に2.5m拡張し、さらに第1トレンチと連続させて1本のトレンチとした(第4図 東西トレンチ)。7月11日、昨年埋め戻した土砂を取り除き、12日からVI層の発掘をおこなった。作業は順調に進み、東西トレンチで白砂層の下にさらに文化層のあることがわかった。今回は用見崎遺跡の特徴である山と海の迫る立地状況を図化したいと考え、遺跡から海岸、礁斜面間でのエレベーションの作成をおこなうことにした。7月14日が大潮に当たったことから、干潮時刻にあわせて海に出て、全員でレベル移動をおこなった(第3図・図版3上)。17日は奄美大島近海を台風が通過するとの予報から、台風接近前に上下2層(VIe層・X層)のコラムサンプリングをおこない、午後から作業を中断した。20日に地元の方々への現地説明会を開き、22日に埋め戻しをして発掘を終了した。
- エレベーション**
- コラムサンプリング**
- 調査方法** 今回VI層を掘り下げるに当たり、同一レベルでの水平掘り下げ方法を採用するか、細分された層ごとの掘り下げ方法を採用か問題となった。今回の場合、細分された層を平面上で明確に認識するのは困難であり、さらに断面で確認された細分層以外の層があらわれる可能性があった。



第4図 遺跡周辺地形測量図

そこで前者の水平掘り下げ方法を採用し、一率に5 cmずつ掘り下げることにした。A-2・B-2区では最初の5 cmの掘り下げで東隅に白砂層が現れたため掘り下げを中止した。この際VI層下から現われた砂層はいわゆる白砂層ではなく、物を散漫に含んだ砂層であることが、調査の過程で明らかになった。出土遺物はそのつど記録したが、記録の困難な小型の遺物についてはふるいかけをおこなって補うことにした。A-2・A-3区北壁付近からは焼けたサンゴ礫

水平掘り下げ方法

や炭化物が出土していることから、当地点が屋外炉であった可能性を意識しながら進めた。A-3・B-3区でも1mメッシュごとに5cm単位で掘り下げを進め、土は4mmメッシュのふるいにかけて。なお、平面上で細分層の広がりが見られない場合は図面に注記して遺物との対応関係を明確にできるようにつとめた。(佐野)

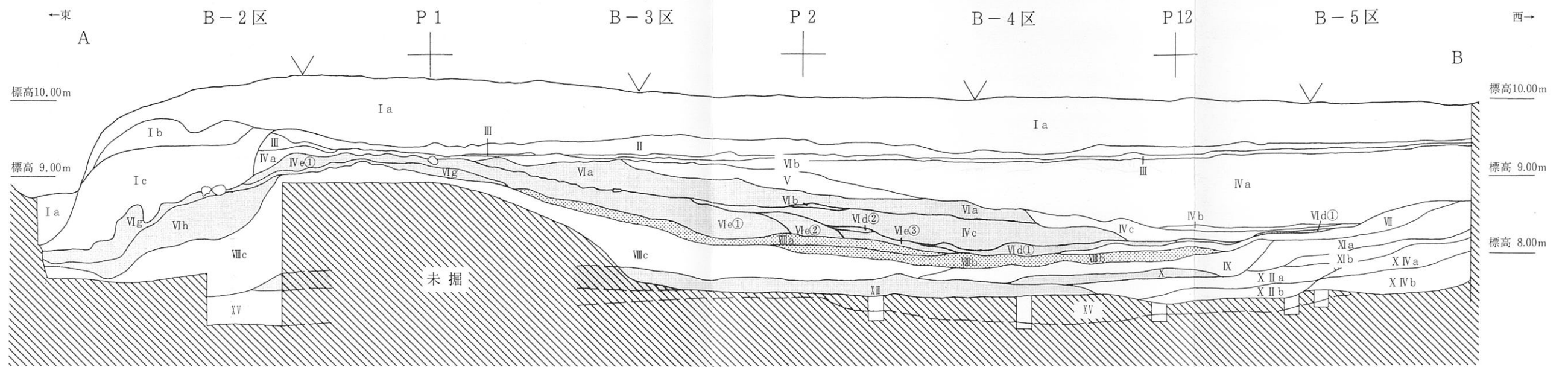
註 (1) 中山清美編『用見崎遺跡』笠利町文化財報告第20号 鹿児島県大島郡笠利町教育委員会、1995年。

(2) 山田康弘・原田範昭編『用見崎遺跡』研究室活動報告書31 熊本大学考古学研究室、1996年。

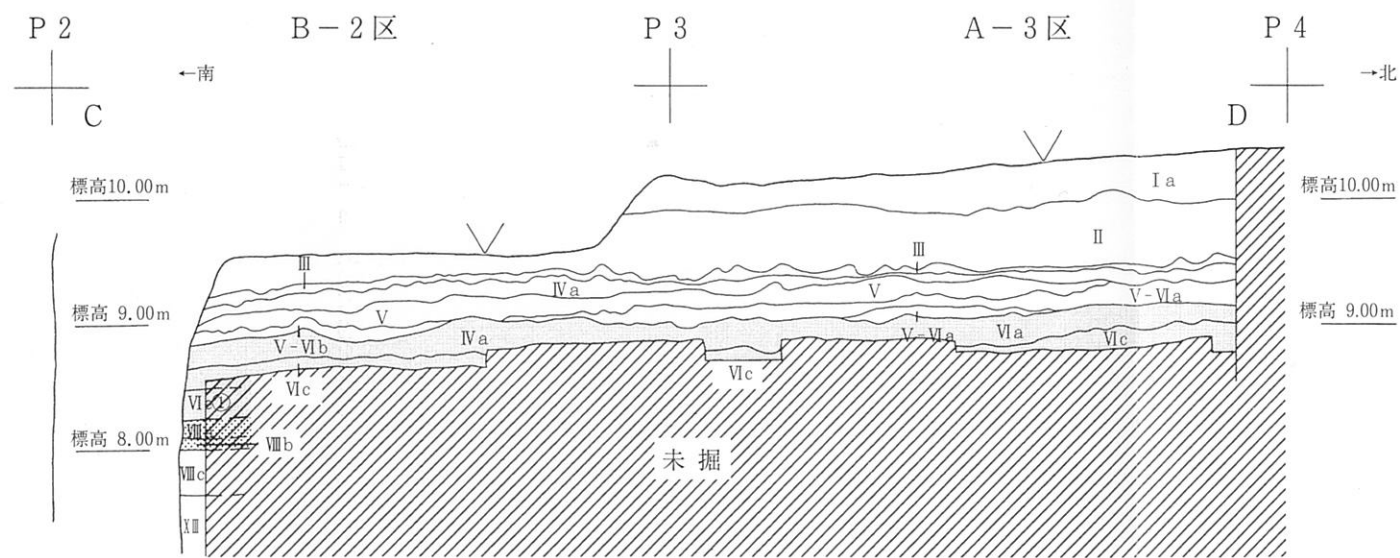
### 3. 層序 (第5図)

今回の調査では、前年の調査で設定した第3トレンチを第1トレンチまで延長し、1本の連続したトレンチにしてさらに掘り下げ、遺跡の基本層序の把握につとめた。同時に発掘区内のA-3・B-3区の西壁とA-2・3区の北壁を精査し、層序の確認をおこなった。この結果、昨年確認されたⅠ～Ⅷ層にあらたにⅨ～ⅩⅤ層の7層を加え、また包含層であるⅥ層の細分層にあらたに5層を加えることになった。以下、各層序について説明する。Ⅰ層からⅢ層については前回に準ずるので記述は要点にとどめる。なお、第1トレンチと第3トレンチを連結して東西トレンチと呼び改めることにした。

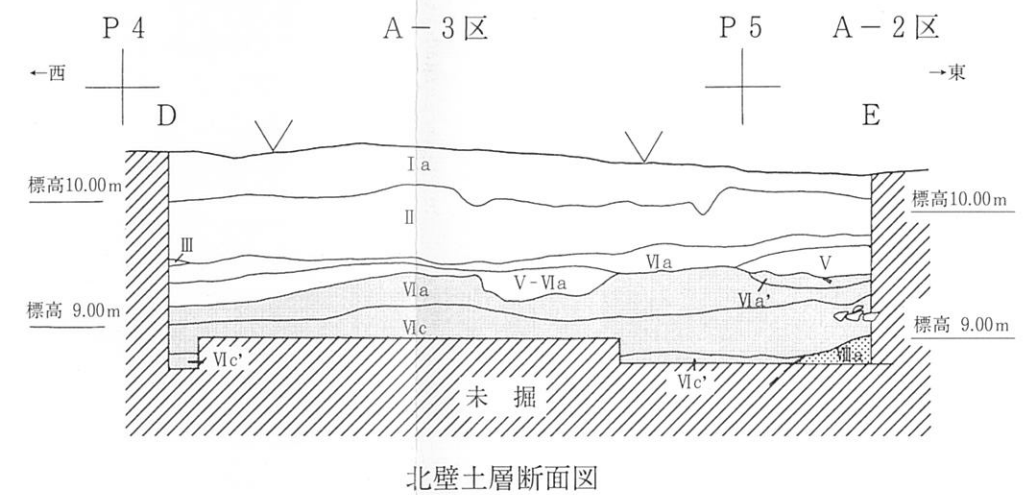
- I層 I層：攪乱土層。表土をⅠa層とし、溝状凹地内に二次堆積した層をⅠb・c層とする。Ⅰa層はにぶい黄褐色砂層(10YR6/3)。
- II層 II層：水田耕作土層。にぶい黄橙色(10YR6/3)。
- III層 III層：水田耕作土層。明黄褐色(10YR6/6)。水田内の下部堆積土。
- IV層 IV層：前は単層としていたが、色・土質・包含物からa・b・c・dの4層に細分した。  
IVa層：前のIV層にほぼ相当する。水田床土層。にぶい黄褐色(10YR4/3)。水田面造成のため西側では谷部を埋めて厚く堆積する。部分的にⅢ層の影響でマンガンが少量沈着する。  
IVb層：黒褐色土層(7.5YR4/2)。水田床土層。  
IVc層：暗褐色砂層(10YR6/3)。水田床土層。炭・貝粉を含む。山側では角礫が増える。  
IVd層：にぶい褐色砂層(7.5YR5/4)。攪乱層。やや軟質で、割れた貝片が若干見られる。北壁で確認された。IV層からV-VI層への漸移層。
- V層 V層：褐色シルト層(10YR4/3)。水田造成時の客土層。粘性が強く、砂利や貝粉を含む。
- V-VI層 V-VI層：西壁・北壁で確認された。色と貝粉の多寡からa・bの2層に細分できる。  
V-VIa層：にぶい褐色(7.5YR5/3)。固くしまり貝粉を多く含む。  
V-VIb層：灰褐色(7.5YR4/2)。固くしまり貝粉を含む。
- VI層 VI層：遺物包含層。基本的には前回にしたがったが、今回壁面の精査によって細分層の数が  
包含層 増加し、ほかに若干変更した部分がある<sup>(1)</sup>。Ⅵe層も色と土質、包含物から、Ⅵe①から③に細分した。  
Ⅵa層：褐色シルト層(7.5YR4/4)。やや粘性があり、貝粉を多く含む。  
Ⅵa'層：暗褐色砂層(7.5YR3/4)。軟質で貝粉を若干含む。土器片を含む。北壁Ⅵa層中E付近で確認された。  
Ⅵb層：暗褐色シルト層(7.5YR3/4)。炭化物を多く含む。



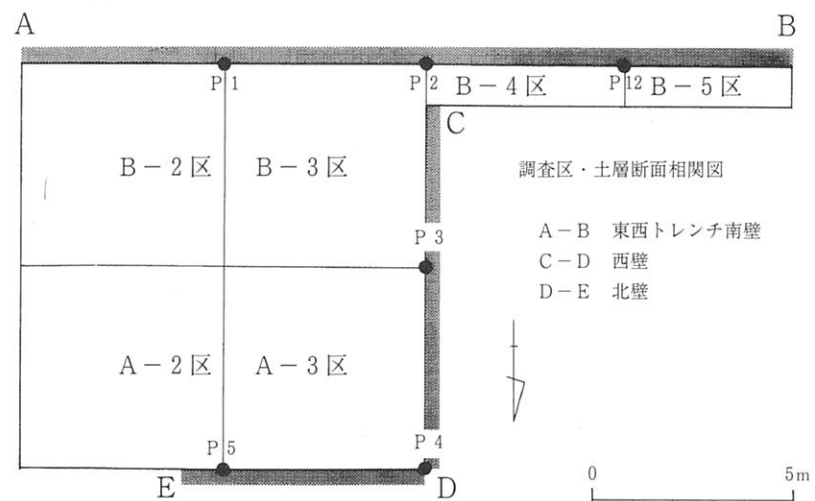
東西トレンチ南壁土層断面図



西壁土層断面図



北壁土層断面図



第5図 土層断面図

- |        |               |       |                |
|--------|---------------|-------|----------------|
| I層     | にぶい黄褐色砂層      | VId②層 | 灰褐色土混じりの砂層     |
| II層    | にぶい黄橙色上層      | VId①層 | 灰褐色砂層          |
| III層   | 明黄色褐色土層       | VId②層 | にぶい褐色土混じりの砂層   |
| IVa層   | にぶい黄褐色土層      | VId③層 | 黄褐色砂層          |
| IVb層   | 黒褐色土層         | VII層  | にぶい黄褐色砂層       |
| IVc層   | 暗褐色砂層         | VIIa層 | にぶい褐色砂層        |
| IVd層   | にぶい褐色砂層       | VIIb層 | にぶい褐色砂層        |
| V層     | 褐色シルト層        | VIIc層 | にぶい黄褐色砂層       |
| V-VIa層 | にぶい褐色砂層       | IX層   | にぶい黄褐色砂層       |
| V-VIb層 | 灰褐色砂層         | X層    | 褐灰色小礫混じりの砂層    |
| VIa層   | 褐色シルト層        | XIa層  | にぶい褐色粘質土層      |
| VIa'層  | 暗褐色砂層         | XIb層  | にぶい褐色粘質土層      |
| VIb層   | 暗褐色シルト層       | XIIa層 | にぶい黄褐色砂層       |
| VIc層   | 灰褐色砂層         | XIIb層 | にぶい黄褐色砂層       |
| 西・北壁   | 黒褐色砂層         | XIII層 | 灰褐色砂層          |
| VIc'層  | 北壁東側 にぶい黄褐色砂層 | XIVa層 | 明褐色粘土混じりの角礫層   |
| 西側     | 褐色砂層          | XIVb層 | 灰褐色粘土・砂混じりの角礫層 |
| VId①層  | 黒色土混じりの砂層     | XIV層  | にぶい黄褐色砂層       |

- VI c 層：灰褐色砂層 (7.5YR4/2)。わずかに粘土を含む。貝粉を含む。  
西壁、北壁は若干東西トレンチ南壁と様相が異なる。貝粉の含有量と土質、層位関係から同一層と認定した。黒褐色砂層 (7.5YR3/2)。貝粉を含む。また今回北壁 E 付近に、真黒に焼けたサンゴ礫 (8 cm 程度) 数点が重なり合って検出された。
- VI c' 層：VI c 層から白砂層への漸移層。北壁で確認された。壁の東側と西側で若干様相が異なる。貝が密につきまり、炭化物を含む。東側はにぶい橙色砂層 (7.5YR6/4)。西側は褐色砂層 (7.5YR4/4)。
- VI d 層：粒度のそろったシルトや砂の層が幾重にも重なる水性堆積層。色と包含物から 2 層に細分できる。
- VI d ①層：黒色土混じりの砂層 (7.5YR2/1)。割れた貝、炭片、土器片を密に含む。
- VI d ②層：灰褐色土混じりの砂層 (7.5YR5/2)。貝粉、割れた貝片、炭片を含む。良くしまる。P 2 付近にレンズ状に堆積する。
- VI e 層：前回是一片の遺物包含層としていたが、色・土質と包含物の多寡と有無から三つに細分できることがわかった。
- VI e ①層：灰褐色砂層 (7.5YR5/2)。多量の貝粉、割れた貝、木炭・土器片を密に含む。
- VI e ②層：にぶい褐色土混じりの砂層 (7.5YR5/3)。貝粉、割れた貝片、木炭片を含む。
- VI e ③層：黄褐色砂層 (10YR5/8)。遺物は発見できなかった。
- VII 層：にぶい黄褐色砂層 (10YR5/3)。山からの流入土層。西側では角礫が多い。 VII 層
- VIII 層：黄色の白砂層。前回はいわゆる白砂層として理解し無遺物層とみなしていたが、今回 VIII 層  
これに遺物がきわめて散漫に含まれていることがわかった。前回は遺跡の基層として 白砂層  
いたが、今回その下位に包含層の存在を確認した。色と包含物から三つに細分した。
- VIII a 層：にぶい橙色砂層 (7.5YR6/4)。P 2 から西側で貝、炭片、土器片を含む。
- VIII b 層：にぶい褐色砂層 (7.5Y R5/3)。黄褐色砂が混入する。貝、木炭、土器片、小礫を含む。
- VIII c 層：にぶい黄橙色砂層 (10YR7/4)。貝、炭化物を含む。
- IX 層：にぶい黄褐色砂層 (10YR5/4)。貝粉、木炭片を含む。西側は角礫が多い。山側からの IX 層  
流入土と混和したためと考えられる。
- X 層：褐灰色小礫混じりの砂層 (7.5YR4/1)。遺物包含層。貝、炭片、土器片を含む。西側隅 X 層  
に炭化物を含む。 包含層
- XI 層：山側からの流入土層。色と土質から a・b の 2 層に細分した。 XI 層
- XI a 層：にぶい褐色粘質土層 (7.5YR5/3)。山側から流入した角礫が多く、サンゴも含む。
- XI b 層：にぶい褐色粘質土層 (7.5YR5/4)。同 a 層よりやや粘性は弱い。
- XII 層：色と包含物から a・b の 2 層に細分した。 XII 層
- XII a 層：にぶい黄橙色砂層 (10YR6/4)。炭片、枝サンゴおよび全体に小礫を含む。小礫は  
西側で多くなる。
- XII b 層：にぶい黄橙色砂層 (10YR7/2)。炭片、枝サンゴ、小礫を多く含む。
- XIII 層：灰褐色砂層 (7.5Y R 4/ 2)。今回の調査における最下の遺物包含層である。木炭片、小礫、 XIII 層  
角礫、スコリア<sup>(2)</sup>を含む。トドロキガイ製有孔製品出土。 包含層
- XIV 層：山側からの流入土層。色と土質、包含物により 2 層に細分した。 XIV 層



XV a 層：明褐色粘土混じりの角礫層（7.5YR5/6）。一部に木炭片を含む。

XV b 層：灰褐色粘土・砂混じりの角礫層（7.5YR6/1）。

XV層 ⅩⅤ層：にぶい黄橙色（10YR7/3）。いわゆる白砂層である。遺物は発見されなかった。今回の調査における最下層である。

推積過程 以上の土層観察の結果から各層の堆積過程を想定すると以下のようになる。

砂層ⅩⅤ層の上に山側からの流入土層ⅩⅣ層が堆積する。これと同時期あるいは後に、海側から遺物包含層ⅩⅢ層が堆積する。その後枝サンゴや炭片・小礫を含んで砂層ⅩⅡ層が、ⅩⅢ層とⅩⅣ層の間を埋めるように堆積する。次に山側から流入土層ⅩⅠ層が堆積し、前後して遺物包含層Ⅹ層が堆積する。続いて砂層Ⅹ層が海側から堆積する。黄色の白砂層Ⅷ層の堆積後、山側からの流入土層Ⅶ層が堆積する。その後上方に遺物包含層Ⅵ層が数回にわたって堆積する。続いて水田造成に伴う整地土・客土・耕作土層Ⅱ層～Ⅴ層が、西に向かって傾斜する地形を平坦に造成する。調査区西壁・北壁も、調査区南側と基本的に同様の堆積をするが、東西トレンチ南壁でみられなかった層も確認できた。西壁では包含層Ⅵ a 層上にⅤ-Ⅵ層が平面上では断続的に堆積する。北壁では、包含層Ⅵ c 層と白砂層Ⅷ a 層との間に漸移層Ⅵ c' 層が比較的明確に確認できた。層位に関して今回明らかになったことをまとめると、以下のようになる。

開始時期 ①Ⅵ層のさらに下に、白砂層を挟んで遺物包含層（Ⅹ・ⅩⅢ層）を確認した。これにより遺跡の開始時期が前回考えられていたよりも古くなることが判明した。

生活面 ②遺物包含層Ⅵ層が、溝状凹地側から山側に向かって傾斜した堆積状況を示しているのに対し、最下の遺物包含層ⅩⅢ層はほぼ水平に堆積している。つまり、本遺跡には白砂層（Ⅷ層）を挟んで少なくとも二時期の、微地形の異なる生活面が認められるのである。

生活期間 ③部分的に厚い（最も厚い場所で2.1m）白砂層を挟むとはいえ、遺物包含層は基本的に連続して堆積している。調査区での生活は一定期間にわたって連続しておこなわれていたといえる。

溝状凹地 ④砂層Ⅷ層と包含層Ⅵ層の堆積状況からみて、白砂層（Ⅷ層）堆積後の上層期において、溝状凹地形が形成されていた。

地形 ⑤調査区周辺の地形は、山側からの流入土と海側からの堆積土が交互に堆積を繰り返して形成されてきたものである。

下層包含層 遺跡は白砂層を境に、大きく上層包含層期と下層包含層期に分けられる。西に傾斜する本調査区は食物残滓等の廃棄場であり、おそらくこれに対応するのが第1次調査で検出された建物跡などの遺構であろう。上層期、その空間利用は溝状凹地を挟んだものであった。下層期において包含層は平坦に堆積し、現在までのところⅩⅢ層は溝状凹地付近で収束するようにみえる。上層期の人々は溝状凹地を境界にした機能的な空間の使い分けをしていたようだが、下層ではどうだったのだろうか。今回の成果をふまえた下層包含層の具体的内容と、広がりやの把握が今後に残された課題であろう。 (尾上)

課題

註（1）昨年度の報告書で示した土層断面図（第4図）と本年のものに若干の差異があるのは、昨年度の断面が砂壁の崩落により部分的に10～30cm欠失したため、本年新たに壁面を削り直し、それに続けて下層の土層断面図を作成したことによる。このためⅥ層中に認められた薄層は若干数が増加することになった。また北壁でも新たな層が認められ、全体として層の細分化が進んだ。ただ、第1次調査において示された層序の枠組みはそのまま継承している。

(2) 鹿児島県立博物館成尾英仁氏のご教示による。同氏によると、同様のスコリアは奄美大島の砂層中にしばしばみられるという。硫黄島島の噴火に原因するものではないか、とされる。

#### 4. 遺物出土状況 (第6図)

第6図はVI層における土器・石器・貝製品・貝類・獣骨・魚骨の出土状況で、標高約8.8m～9.2mの間において、その傾斜に沿って平面的に捉えた遺物分布図である。遺物の分布は、東側のA-2・B-2区において密であり、西側ほどまばらになる。

VI層は東側から西側へ、北側から南側へ向かって傾斜している。さらにVI層の細分層については断面の観察と平面で計測した標高から、VI a層・VI c層が調査区東側で北側から南側へ向かって約3.5度、調査区南側でVI a層がP1とP2の中間付近から西側へ向かって約6度傾斜している。VI e層はB-2区からB-3区にかけてに約13度傾斜している。また、A-3区において遺物検出中に、東側から約1m、約1.5m、約2.5mの幅でそれぞれVI e層、VI c層、VI a層であることが確認できた。以上のことからA-2・B-2区とA-3区東側がVI e層、A-3区中央付近がVI c層、これら以外がVI a層と判断できる。

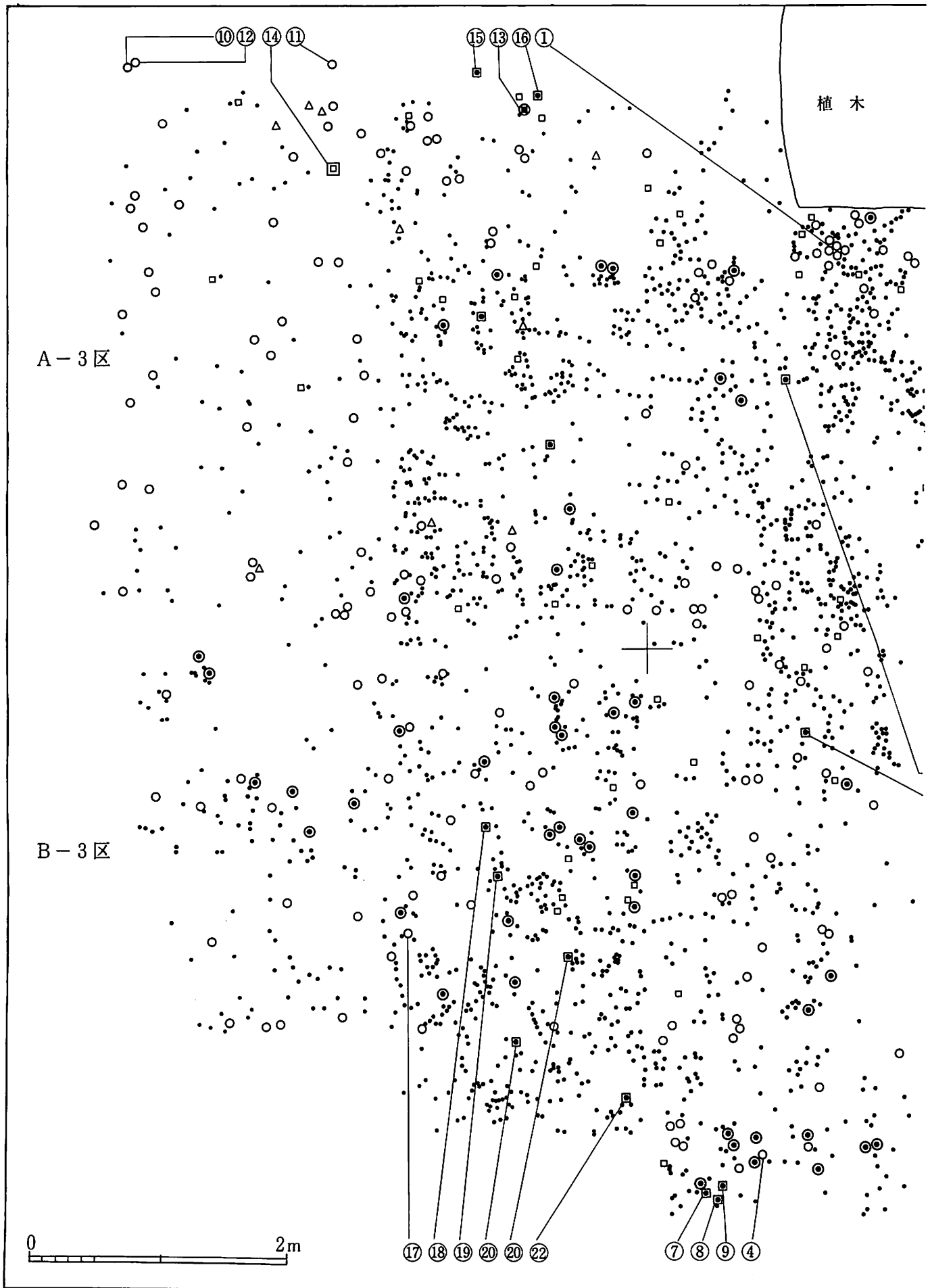
A-2区では北側で土器片7点がまとまって出土した(図版2上)。それらは壺口縁部・甕口縁部、胴部、底部で(第6図①、以下同様)、接合できた資料は第7図22の例にとどまる。東側溝状凹地縁辺では凸帯に刻み目の入った甕胴部を検出した(②)。土器の集中している約1m南ではヤコウガイの体層を用いた環状製品を認めた(③)。貝類などの自然遺物は多量である。溝状凹地縁辺ではタカラガイが集中し、西側にはアマオブネ、サンゴ礫が多い。これらに火を受けた等の痕跡はみられなかった。溝状凹地縁辺で遺物が少ないのは、本来包含されていた遺物が溝状凹地の肩の崩落により、溝状凹地内に落ち込んだためと考えられる。このことはB-2区でも同様である。

B-2区では壺口縁部がヤコウガイやシラナミとともに出土した(④ 図版2下)。溝状凹地縁辺のVI e層よりイモガイの殻頂部を利用した小玉を検出した(⑤)。北側でマガキガイ製小玉を認めた(⑥)。また、南西隅ではウミギクガイ科の有孔製品が3点近接して出土した(⑦～⑨ 図版2中)。他の区に比べて完形のヤコウガイが多い。

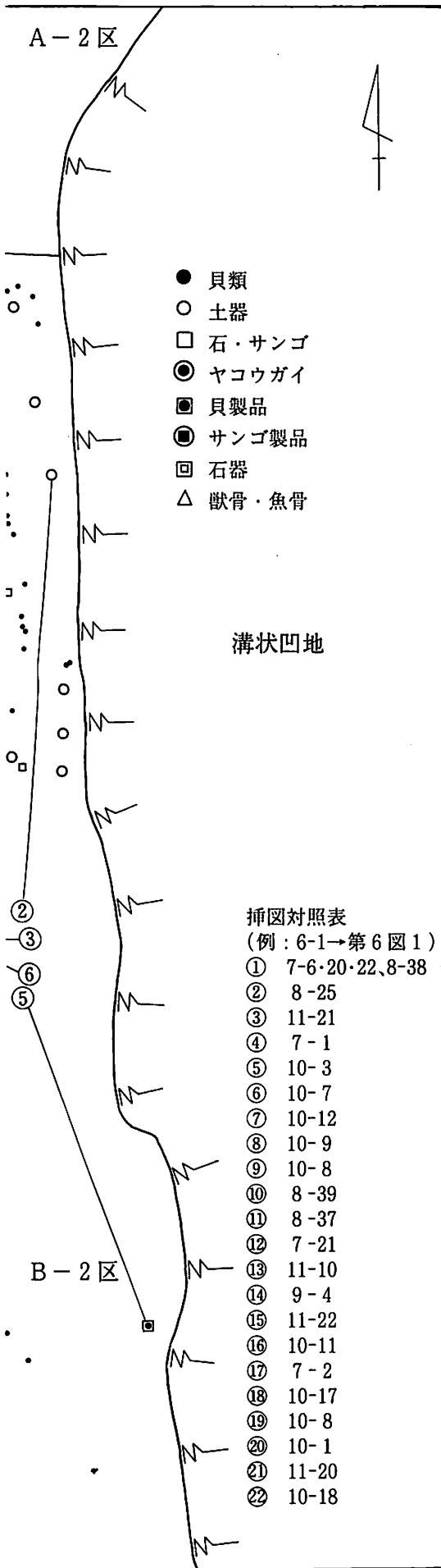
A-3区でも土器はまばらで、かつ小片が多い(⑩・⑪)。北西側で甕底部が出土し(⑫)、北東隅では有孔サンゴ製品が見られた(⑬)。また、煤の付着したサンゴ製の石皿が出土し(⑭)、その周囲には獣骨・魚骨・炭化物が検出された。北側で環状ヤコウガイ製品(⑮)、ウミギクガイ製有孔製品(⑯)を検出した。環状ヤコウガイ製品は炭化物が集中している地点からの出土である。また、サンゴ礫が多く見られた。

B-3区では甕口縁部、胴部破片が出土した(⑰)。東側でヤコウガイの体層を使用した匙状製品(⑱)、ヤコウガイ製匙状製品(⑲)、イモガイ製小玉(⑳)、環状ヤコウガイ製品(㉑)、ウミギクガイ製有孔製品(㉒)、煤の付着したサンゴ礫が多く出土している。イモガイ製小玉は多量の貝粉中より検出された。ヤコウガイの破片の出土量が他区に比べて多い。

調査区南側の東西トレンチにおいては、前節で述べたようにVI層より下層に遺物包含層が複数確認できた。トレンチ内のX層で土器が出土し、XII層でトドロキガイ製品が出土した。土器はいずれも兼久式土器の範疇に入るものである。



第6図 遺物出土状況



今回は遺物包含層であるVI層のうちVI a層から 兼久式土器  
VI d層とVI e層の上半部を調査した。全体に貝類  
が多く、特にA-2・B-2区とA-3・B-3  
区の東側に集中していた。

本遺跡の遺物包含層は貝類などの食物残滓、土 生活用具  
器・魚網錘などの生活用具が堆積して形成された  
ものである。土器は小片が多く、集中して出土し  
た土器片にも接合できた資料はほとんどない。  
石器や貝製品も破損した状態で検出された。よっ  
てこの出土状態は土器や石器、貝製品本来の使用 使用状況  
状況を示すものではないと考えられる。

包含層中の貝類はほとんどが割れている。こと 割れた貝  
にレイシやタカラガイ、アマオブネなどの巻貝の  
ほとんどが殻口部を欠いていた。また獣骨・魚骨  
・炭化物とともに検出されており、調理時に火を受  
けたと考えていいだろう。

貝類の分布は貝種ごとにゆるやかな傾向がみら  
れ、ある程度のまとまりがみられる。このまと  
まりは、遺物包含層内の細分層にほぼ対応している。

以上のことから、本遺跡の遺物包含層は、連続 廃棄行為  
した廃棄行為による堆積の結果だと考えられ、第 屋外炉  
2次調査で指摘されていた屋外炉の可能性は低く  
なった。破損した生活用具が、貝類などの食糧残 食糧残滓  
滓とともにまとめて廃棄されていたことがわかる。  
貝種ごとのまとまりが遺物包含層の細分層に対  
応していることから、小規模な廃棄が幾度もおこ  
なわれていたと考えられる。廃棄は溝状凹地の頂部 溝状凹地  
からおこなわれた可能性が強く、廃棄物のまと  
まりは山側へ向かう傾斜に沿ってやや移動している。  
しかし遺物のまとまりは大きく崩れることなく、  
ある程度廃棄された状態が保たれていると判断し  
うる。したがって本遺跡は、溝状凹地を境に西側  
は廃棄場、東側は建物を使用し、何らかの作業を 廃棄場  
おこなっていた人々の生活の場であったと考えら  
れる。  
(若杉)

### 三 出土遺物

#### 1. 土器 (図版4)

兼久式土器 今回の発掘で出土した土器は、東西トレンチと廃土から出土したもの以外はすべてVI層中のものである。これらは形態的特徴から、後述する一片を除いてすべて兼久式土器と判断しうる。器形は甕と壺の2種類で、口縁部片30点のうち甕が22点、壺が2点、不明6点であり、甕の割合が高い。以下、それぞれの器形について述べる。

甕 (第7図2~5・7~20、第8図25~39・41~43 以下括弧内は図の土器番号を示す)  
分類方法は昨年報告書にしたがった。

1類土器：文様が貼り付け凸帯と沈線により構成されているもの。

2類土器：文様が貼り付け凸帯だけで構成されているもの。

3類土器：文様が沈線だけで構成されているもの。

4類土器：無文のもの。

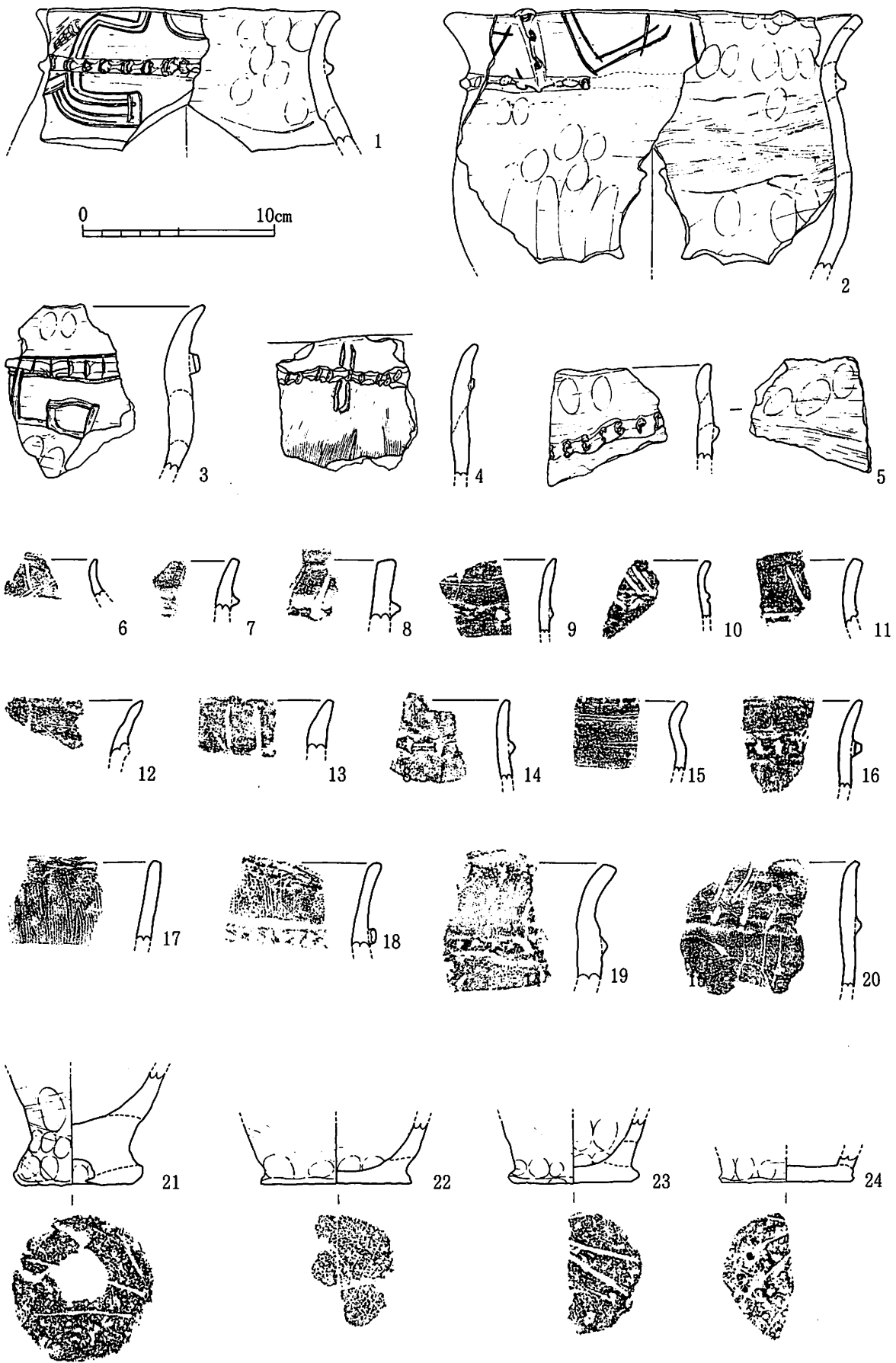
1類 1類土器(2~4・10・19・20・43)凸帯はすべて刻み目を有する。この中には、沈線が凸帯の上下にあるもの(1a類)、沈線が凸帯の上部にあるもの(1b類)、凸帯が横位のほかに縦位または斜位にめぐるもの(1c類)がある。ただ、1b類に分類できるものは今回出土しなかった。

1a類 1a類(3・4・10・20・43)3は口縁部が外反し、胴部にかけて若干膨らみをもっている。凸帯の上下に平行する深い沈線がある。全体的にナデ調整が施されているが外器面は使用により荒れており、煤が付着している。内器面には横ナデによる調整と指圧痕を認める。胎土には1~5mmの砂粒を多く含む。4は口縁がやや外反している。内外器面にはナデ調整が施され、外器面下方にはハケ調整がみられる。凸帯の幅は一様でなく、刻み目は下方向から施されている。凸帯の上下にみられる沈線は凸帯を貼り付けた後に施文されたものである。

1c類 1c類(2・19)2は甕で唯一口径が復元できた例で、口縁はやや外反し、胴部は若干膨らみをもつ。縦位の凸帯は竹管状の工具で刺突されている。内外器面ともに粘土の接合のため規則的に押さえられた指圧痕があり、その後全体的にナデが施されている。内器面にはこのほか、横方向のケズリ状の調整がみられる。胴部の下方には煤が付着している。19には横位の凸帯下部に沈線がある。凸帯の刻み目は草茎様の工具による押圧である。内器面には指圧痕が顕著に認められる。外器面には煤が付着している。

2類 2類土器(14・16)この中には、凸帯に刻み目を施すもの(2a類)、施さないもの(2b類)がある。ただ、今回の発掘で2b類は出土しなかった。14・16ともに、ヘラ状工具で刻んだような刻み目が施されている。

その他 その他、土器片が小さいため、分類できなかったものがある。これらを貼り付け凸帯上の刻み目の違いによって挙げていく。竹管状の施文具で刺突したもの(5・9・18・30・31・37)のうち、5は口縁から胴部にかけてほぼ直線的な傾きをもち、凸帯が斜位につく。内外器面ともに指圧の後、粗いナデ調整がなされている。ヘラ状工具で刻んだもの(26~28・32・33・35・38・39)、草茎様のもので押圧したもの(25・41)があるほか、凸帯を沈線で切ったもの(8)がある。



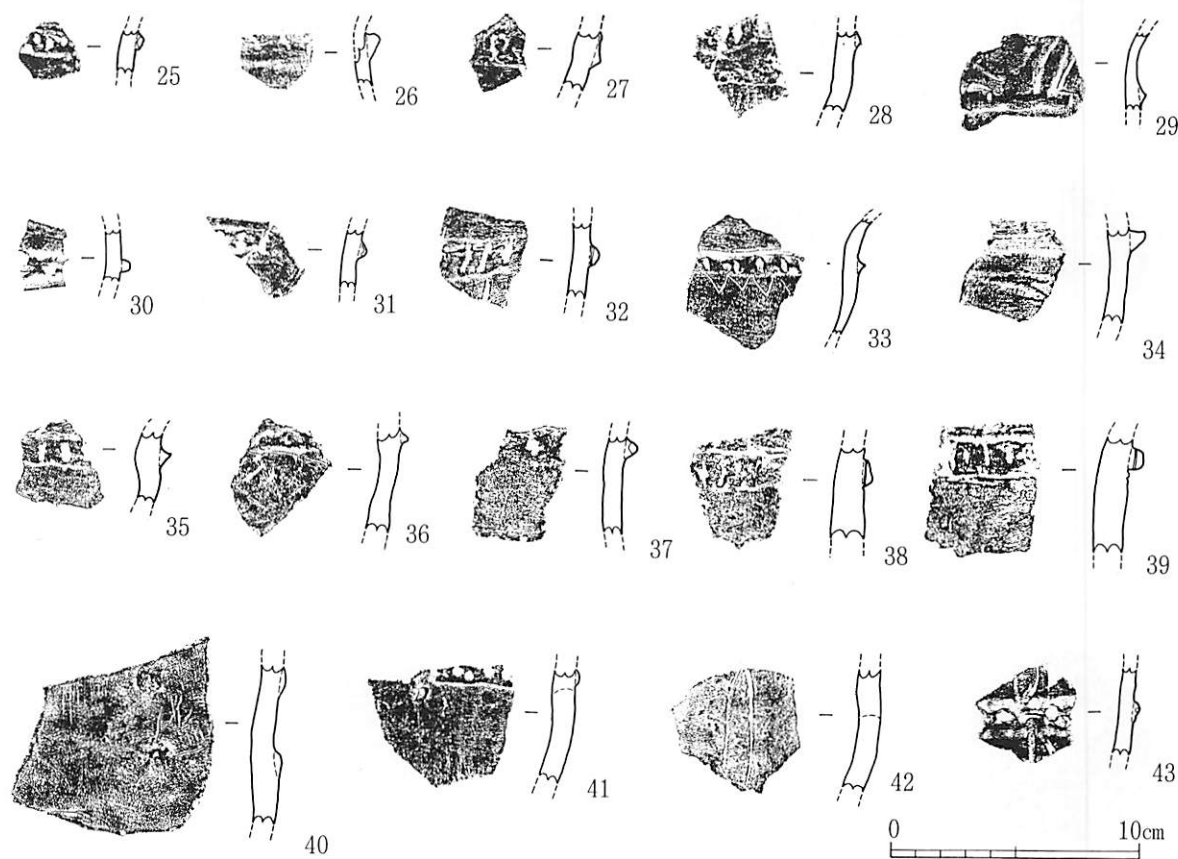
第7图 出土土器实测图 (1)

壺 (第7図1・6、第8図40) 壺は甕よりも緻密な胎土を用いており、混入物も細かい。6では比較的浅い沈線を施した後、横位と斜位の凸帯を貼り付け、竹管状の施文具により刺突している。口縁部は若干歪んでいる。外器面は均一で入念なナデ調整が施されている。内器面はナデ調整と指圧痕が認められ、粘土継ぎ目の後が顕著である。40では粘土紐を縦位に貼り付けた痕跡が認められる。外器面の一部に煤が付着している。内器面は残存状態が悪く、ハケによる調整がわずかに確認できる。

底部片 底部片(第7図21~24)今回出土した底部片はすべて底部に葉痕を有し、内外器面ともに入念なナデ調整と指圧痕を認める。21は胴部の重みで器形が歪んでいる。22・23はくびれ平底で、24はくびれをもたない平底である。底の厚さは厚いもの、薄いものがあり不均一である。

有文土器 以上のほか、従来の兼久式土器に見られないタイプが一片ある。15は口唇部にほぼ等間隔の刻み目を有している。口縁部はやや外反し、胎土は緻密である。この型式の土器は沖縄本島本部町兼久原貝塚より出土した有文土器の一部に似ている<sup>(1)</sup>。兼久原貝塚では貝札や開元通宝が出土しており、遺物は本遺跡に共通する。両遺跡は時期的にも近く、相互に無関係ではないと考えられるが、類例の増加を待って考えたい。今回出土した土器は上述の15以外、用見崎遺跡においてこれまで出土したものと同様の特徴をもっている。また、壺よりも甕の割合が高いのは、兼久式土器の出土するほかの遺跡に共通する。(藤江)

註(1) 岸本義彦編『兼久原貝塚発掘調査報告』本部町文化財報告書第1集 本部町教育委員会、1977年、第7図1~23。



第8図 出土土器実測図 (2)

図内番号	器種	部位	胎土	焼成	色調	調整	出土区	
第7図	1	壺	口縁	緻密	良好	赤褐色	D/A D	B 2 (6-4)
	2	甕	口縁	砂粒	良好	暗赤灰色	A D/A D C	B 3 (6-17)
	3	甕	口縁	砂粒	良好	橙色	A D/A D	A 3
	4	甕	口縁	砂粒	良好	明赤褐色	B D/D	B 3
	5	甕	口縁	緻密	良好	にぶい橙色	A D/A D	廃土
	6	壺	口縁	緻密	良好	灰赤色	D/D	A 2 (6-1)
	7	甕	口縁	砂粒	良好	黒褐色	D/E	A 3
	8	甕	口縁	砂粒	良好	赤色	D/D	A 3
	9	甕	口縁	緻密	良好	明赤褐色	B D/D	廃土
	10	甕	口縁	砂粒	良好	暗赤褐色	E/D C	A 3
	11	甕	口縁	砂粒	良好	暗赤褐色	D/D	B 2
	12	甕	口縁	砂粒	良好	暗赤色	D/A D	Tr
	13	甕	口縁	緻密	不良	橙色	D/A D	A 3
	14	甕	口縁	緻密	良好	橙色	B D/A D	廃土
	15	甕	口縁	緻密	良好	にぶい赤褐色	D/A D	Tr
	16	甕	口縁	緻密	良好	灰褐色	B D/A D	A 3
	17	甕	口縁	砂粒	良好	褐灰色	A B/A B D	廃土
	18	甕	口縁	緻密	良好	黒褐色	A B D/A B	A 3
	19	甕	口縁	砂粒	良好	にぶい赤褐色	D/A D	B 3
	20	甕	口縁	緻密	良好	赤褐色	D/A D	A 2 (6-1)
	21		底部	砂粒	良好	明赤褐色	A/A	A 3 (6-12)
	22		底部	緻密	良好	にぶい赤褐色	A D/A D	A 2 (6-1)
	23		底部	緻密	良好	明赤褐色	A D/A	Tr
	24		底部	砂粒	良好	暗赤灰色	A D/A D	A 3
第8図	25	甕	胴部	砂粒	良好	にぶい赤褐色	E/E	B 3 (6-2)
	26	甕	胴部	砂粒	良好	赤色	D/E	A 3
	27	甕	胴部	砂粒	良好	赤褐色	D/E	B 3
	28	甕	胴部	砂粒	良好	明赤褐色	D/A D	B 2
	29	甕	胴部	緻密	不良	橙色	D/A D	B 3
	30	甕	胴部	緻密	良好	灰褐色	D/E	B 3
	31	甕	胴部	緻密	不良	明褐色	D/E	A 3
	32	甕	胴部	砂粒	良好	灰褐色	D/D	A 3
	33	甕	胴部	砂粒	良好	暗褐色	A D/A D	A 3
	34	甕	胴部	緻密	良好	赤色	D/A D	A 3
	35	甕	胴部	砂粒	良好	暗赤褐色	D/A D	B 3
	36	甕	胴部	砂粒	良好	赤褐色	E/B	B 3
	37	甕	胴部	砂粒	良好	黒褐色	D/B D	Tr (6-11)
	38	甕	胴部	砂粒	良好	赤褐色	E/D	A 3 (6-1)
	39	甕	胴部	砂粒	良好	暗赤褐色	A D/A D	A 3 (6-10)
	40	壺	胴部	緻密	良好	にぶい赤褐色	B D/B	A 3
	41	甕	胴部	砂粒	良好	暗赤灰色	B D/A B D	B 3
	42	甕	胴部	砂粒	良好	暗赤色	D/B D	A 2
	43	甕	胴部	砂粒	良好	にぶい赤褐色	D/A D	B 2

第1表 出土土器観察表

(1) 調整；外器面／内器面，A～Eは調整方法

A：指押さえ B：ハケ調整 C：ケズリ様施文 D：ナデ調整 E：不明瞭

(2) 胎土；砂粒：砂粒を含む 緻密：緻密（混入物あり）

(3) 出土区のTrは東西トレンチを示す。

(4) 出土区欄の（ ）内の番号は 第6図遺物出土状況の番号に対応（例；6-1→第6図1）



## 2. 石器 (図版5上・中)

石器はクガニイシ形石器・石皿・磨石・敲石などが12点出土している。そのほとんどは破片であり、全体の形状を把握できるものは少ない。

クガニイシ  
形石器

クガニイシ形石器 (第9図1、以下同様) 粗粒玄武岩製。全体を大きく欠損しているが、幅の広い方を下に置いた場合、その上端に幅1cm前後の帯状の平坦面が作り出された入念な加工品である。石器の断面は凸型に整えられている。表面には全体に加工・使用痕が認められる。破損した面の周縁は擦れて丸みを帯びており、帯状平坦面に接する部分は激しく摩滅している。これらはすべて、破損した後も同様に使用し続けるための加工とみることができ。下端面は均一でゆるやかな曲面をなし、全体にかなり摩耗しているが、上方に向かって摩滅の程度は軽くなる。底の曲面の部分で食物を砕いたとすれば、その形状から上部に手を添えて前後左右に揺らして使用したことが推測される。東西トレンチを機械で掘った際の廃土中より採集。残存重量1940g。

石皿

石皿 (2) サンゴ製で表面には凹みをもち、また、表面と側面には煤が付着している。石製ではないが、遺物の機能上本項で同様に扱うことにする。中央の凹みはサンゴ本来のものであるが、これを利用して食物を潰すなどの作業をおこなったのであろう。調査区内には磨石・円礫が数点みられ、これらとの有機的関連が考えられる。火に関わる使用が考えられる。A-3グリッドVI a層出土。長さ35cm、幅23.6cm、厚さ9.1cm、重量5030g。

磨石

磨石 (3・4) 3は玄武岩の自然円礫を使用している。研磨面や摩滅の集中する面がみられる。他に敲打によって平坦になった面があり、磨石のほか敲石としても使用されていたことがわかる。クガニイシ形石器と同様、廃土中より採集。残存重量320g。4は粗粒砂岩の自然円礫を使用している。全体の大半を欠損している。残存する一面は研磨面であり、滑らかで光沢をもっている。また、他面は摩滅痕が集中し、ざらついた面をなす。このことから、同一個体の磨石に少なくとも磨る機能とたたき潰す機能のあったことがわかる。A-2グリッド出土。残存重量140g。

敲石

敲石 (5) 玄武岩の自然円礫を使用している。平面形・断面形ともに楕円形に近い。下端には複数の剥離した面があり、刃部を形成していた可能性がある。下端部は一様に摩滅しており、敲打などの使用を思わせる。長さ10.5cm、幅6.5cm、厚さ3cm、重量325g。クガニイシ形石器と同様、廃土中より採集。

石材

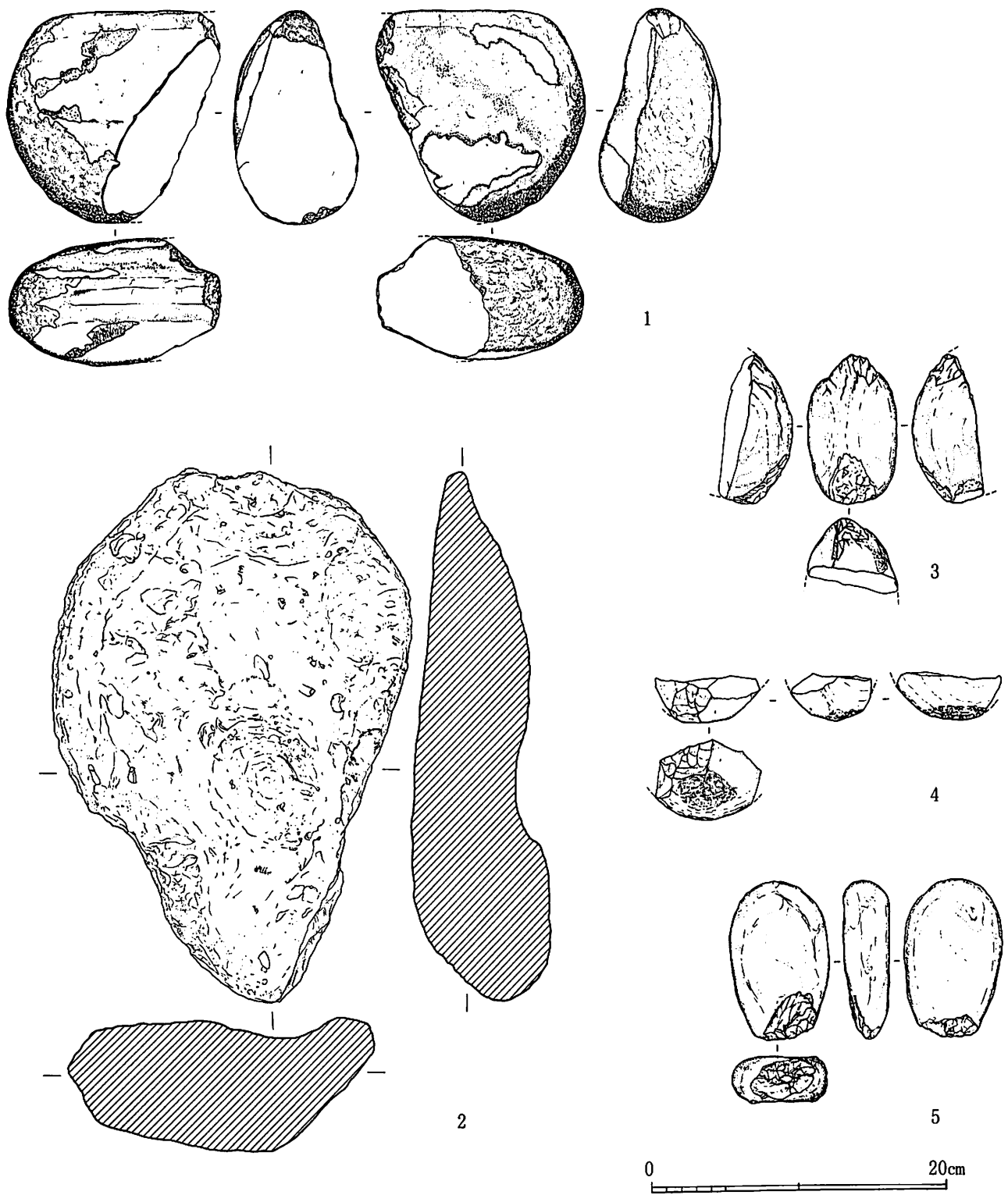
今回出土した石器の石材は砂岩・玄武岩・安山岩である。砂岩・玄武岩は笠利半島で産出する (第2図)。安山岩は奄美大島の地質図からは確認できないが、長浜金久I遺跡から安山岩製の敲石・凹石が出土している。

兼久式土器  
共伴石器

第2表は奄美大島で兼久式土器と共伴する石器を集めたものである。これらには共通して、クガニイシ形石器・磨石・敲石が伴っている。前時代まで多くみられる石斧などの刃器はみられない。長浜金久I遺跡で、兼久式土器に鉄器が共伴していることが確認されていることからみて、兼久式期の石器に刃器の少ないことは、鉄器の使用と関係しているのではないだろうか。ところで今回出土した石器は、そのほとんどが上述のように磨る・敲く・つぶすための調理具であるにもかかわらず、大きく破損している。その破損痕は、これらの作業の中にかなり激しい打撃を伴うものが含まれていたことを示しているようである。 (西山)

鉄器の共伴

使用痕



第9図 出土石器実測図

遺跡名	所在地	共伴石器
泉川遺跡	笠利町万屋字長浜	石皿 敲石
長浜金久I遺跡	笠利町万屋字長浜	クガニイシ形石器 敲石 凹石
あやまる第2貝塚	笠利町須野字大道	石製品(台形)
用見崎遺跡	笠利町用字見崎	クガニイシ形石器 石皿 磨石 敲石

第2表 兼久式土器共伴石器出土遺跡一覧表 (奄美大島)

### 3. 貝製品

貝製品は総計23点出土した。貝製玉8点、有孔貝製品8点、有孔サンゴ製品1点、環状ヤコウガイ製品3点、匙状貝製品2点、その他1点。有孔サンゴ製品もこの項に含めて報告する。

#### 貝製玉

貝製玉（第10図1～7 図版6中A）1～6は小型イモガイの殻頂部を利用しており、5を除いていずれも上面に研磨による平坦面をつくりだしている。2は側面および裏面に、紐を通したと思われる跡を残している。3・4では上面に一方向にそろった研磨痕をとどめている。5には加工の痕跡が見られず、全体に摩耗が進んでいる。6は平坦面に複数の研磨面をもつ。7はマガキガイの殻頂部を用いた玉で、全体を入念に研磨している。これらの貝製玉は、各部分の摩耗の状態から、海辺に打ち上った貝を素材に、部分的に研磨を加えて製品化したものといえる。ただし中には5のように加工の痕跡が認められないものもある。

#### 有孔貝製品

有孔貝製品（第10図8・9・11～16 図版5下）13・14を除き、ウミギクガイ科の貝が用いられている。すべて全体的に摩耗が進み、研磨面は見られない。8は全体の風化が激しく、特に腹縁部や主歯付近の摩滅が著しい。重量6.0g。9は孔の内縁にさほど摩滅は認められないが、主歯付近を欠損する。重量6.6g。11の重量は7.6g、12の重量は16.4gである。13はリュウキュウサルボウである。重量13.6g。15は孔の内縁のみ他の部分と比べ摩耗の度合いが低いことから、全体がある程度摩耗した後に、孔が穿たれたものと判断した。重量10.4g。16では腹縁部の摩耗が著しいのに比べて、孔の内縁および主歯は他の部分と比べて摩耗の度合いが低い。重量20.8g。以上の有孔貝製品は、共通して貝殻の内側から穿孔され、全体によく摩耗している。これらの大きさと重さを比較してみると、径3.5～4cm・重量6～8gのグループと、径4～6cm・重量10～16gのグループに分けることができる。以上のことから、これらは海辺で選択的に拾い集められた貝に穿孔した漁網錘とみなすことができる。そうであれば、大きさと重さにおける二つのグループは、両者に対応する網の違いを反映しているといえないだろうか。

#### 有孔貝製品の分類

#### トドロキガイ製品

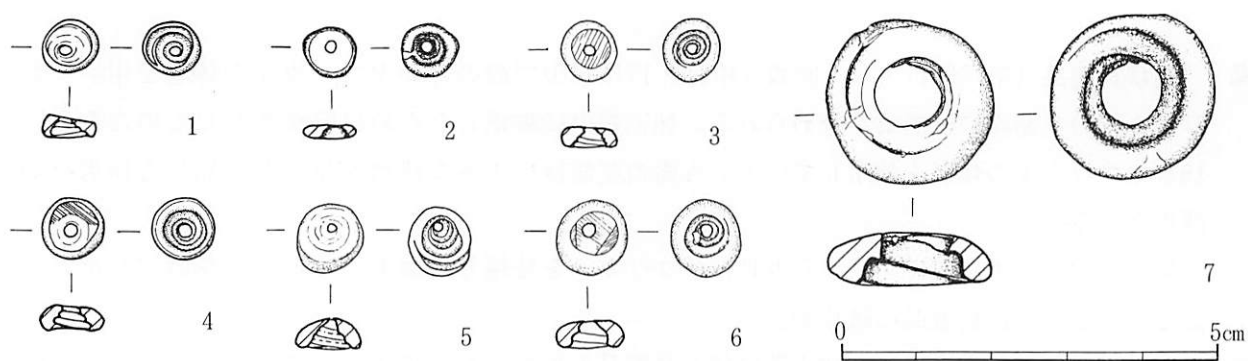
14は東西トレンチⅧ層から出土しており、素材はトドロキガイ<sup>(1)</sup>である（図版6中E）。全体的になめらかでツヤがあり、驚くほど鮮やかな赤褐色をしている。孔は人工的に内側から打ち抜かれているが、特に入念な加工はされていない。

#### 有孔サンゴ製品

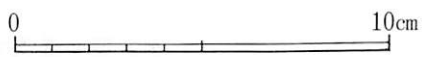
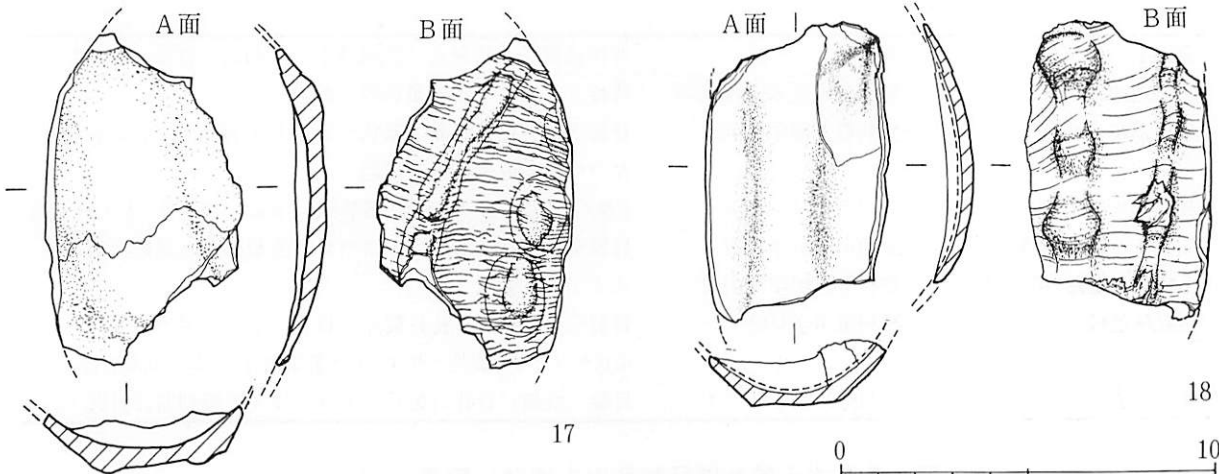
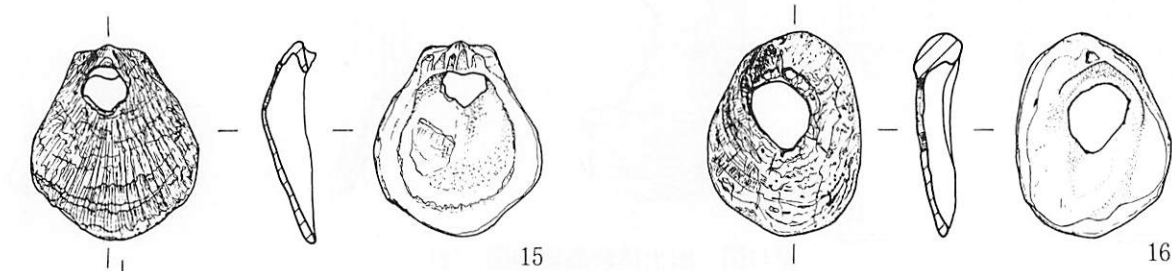
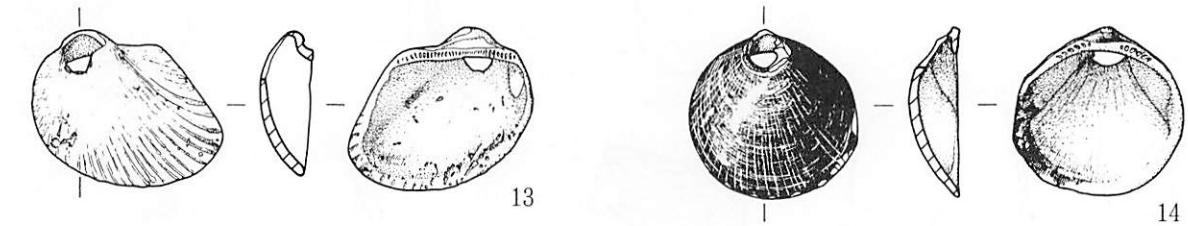
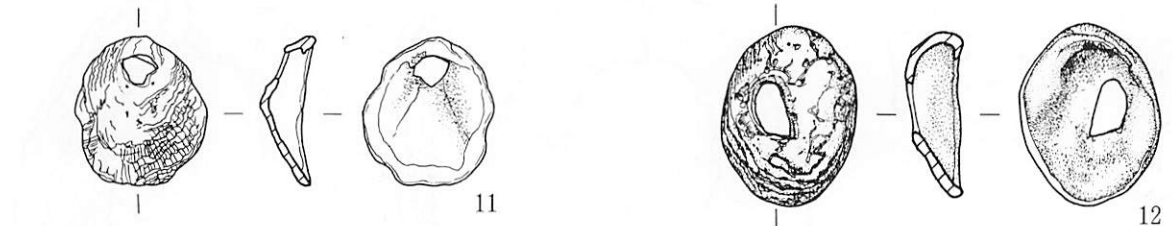
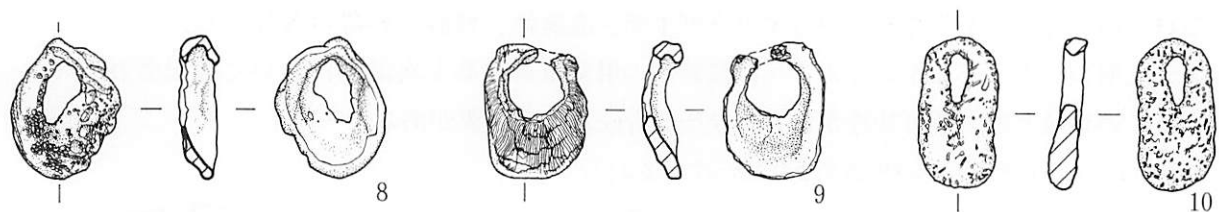
有孔サンゴ製品（第10図10 図版6中B）表面全体が著しく摩滅して、なめらかになっている。重量7.6g。重さと形状よりみて、漁網錘の可能性が高い。

#### 環状ヤコウガイ製品

環状ヤコウガイ製品（第11図20～22 図版6上）いずれもヤコウガイの体層を用いている。本来は環状をなしていたものであろう。20は全体の約3分の1を欠損する。周縁や孔では加工面が一様に摩耗しており、表面全体も均一に擦れている。残存重量40.6g。21では全面がよく擦れており、特に周縁や肋では摩耗が激しい。孔の内縁も擦れている。残存重量12.4g。22の周縁は打ち欠かれた後粗く研磨されている。孔の内縁は摩滅し、やや丸みを帯びる。残存重量26.6g。これらはいずれも同様の大きさをなし、一様に摩滅した痕跡がみられ、特に入念な加工を施すものではない。昨年度の出土例もこれらと同様の特徴をもっていた。マツノト遺跡では、環状ヤコウガイ製品が十数個重なって発見されている。以上を総合してみると、これらを漁網錘とみなすことができるだろう。なお、3点の環状ヤコウガイ製品の完形の重量を復元すると、30～60gになる。これらが漁網錘であれば、先に漁網錘とみなした有孔貝製品との間に、さらなる網の違いを想定することができる。



(1~7は実大)



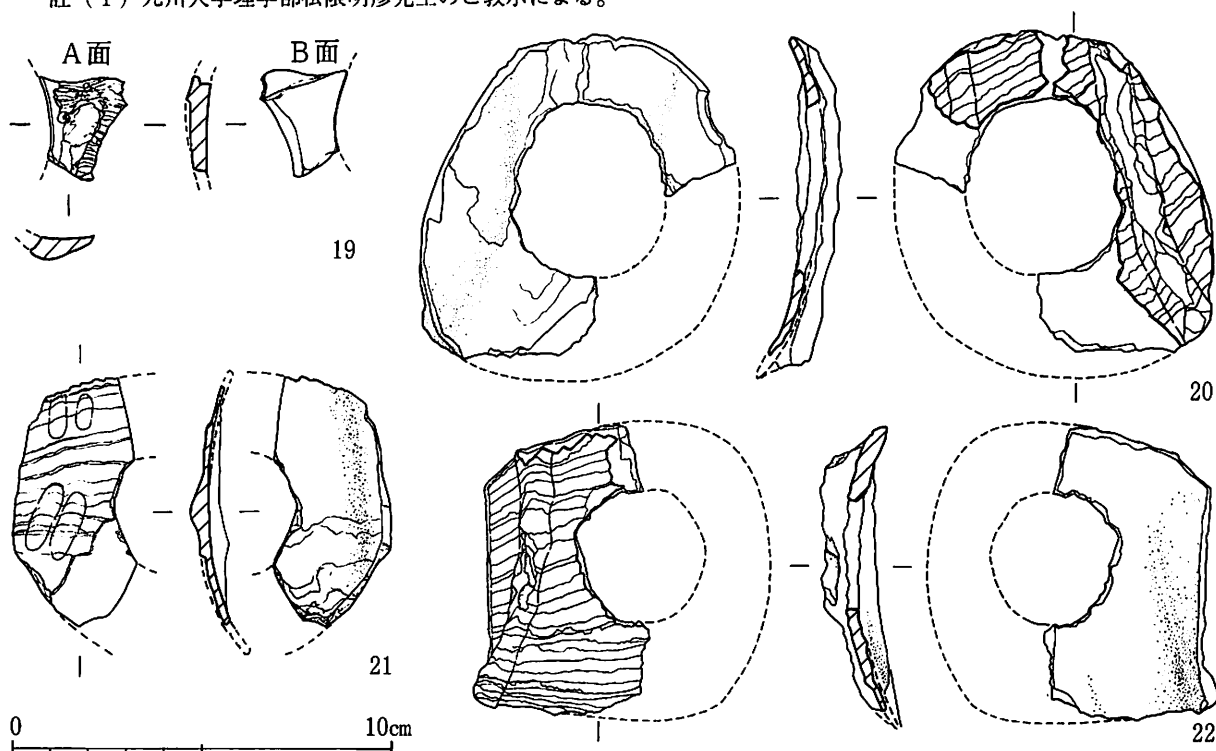
第10図 出土貝製品実測図 (1)

**匙状貝製品** 匙状貝製品（第10図17・18 図版6中D）17は小型で殻の薄いヤコウガイの体層を用いており、A面の左側縁に研磨痕が認められる。加工途中で破損したために廃棄されたものだろう。18もヤコウガイの体層を使用している。A面の左側縁に丁寧な研磨が施され、肋にも研磨痕が認められる。

**貝製品破片** 貝製品破片（第11図19 図版6中B）ヤコウガイを使用しており、A面の左側縁に研磨痕が認められる。匙状貝製品の破片か。

**兼久式期の貝製品** 第3表は、奄美大島の兼久式土器に伴う貝製品を集めたものである。これをみると、この時期貝製品が装身具、漁網錘、利器、容器などに共通して使用されていることがわかる。使用する貝の中でも特に多用されるのはヤコウガイで、漁網錘、利器、容器の各種にわたっている。兼久式期のこのようなヤコウガイへの傾斜は、用見崎遺跡第1次調査において検出されたヤコウガイの集積と関わる可能性があり、今後とも注目する必要があるだろう。 （上田）

註（1）九州大学理学部松隈明彦先生のご教示による。



第11図 出土貝製品実測図（2）

遺跡名	所在地	共伴貝製品（装身具／漁網錘か？／利器／容器／その他）
手広遺跡	竜郷町赤尾木字牧・小泊	貝輪／ヤコウガイ蓋製利器／貝匙
泉川遺跡	笠利町万屋字長浜	貝製玉／有孔貝製品 環状ヤコウガイ製品／二枚貝製利器 ヤコウガイ蓋製利器／貝匙
長浜兼久第Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ遺跡	笠利町万屋字長浜	貝輪／有孔貝製品／ヤコウガイ蓋製利器／貝匙 貝製容器 ホラガイ製品
あやまる第2遺跡	笠利町須野字大道	貝製玉／有孔貝製品／ヤコウガイ蓋製利器／貝匙／貝札
下山田Ⅲ遺跡（東地区）	笠利町万屋字下山田	スイジガイ製品
用見崎遺跡	笠利町用字見崎	貝製玉 貝輪／有孔貝製品／貝札 トドロキガイ製品
サウチ遺跡	笠利町喜瀬字サウチ	環状ヤコウガイ製品／ヤコウガイ蓋製利器／貝匙 貝製容器 貝輪 垂飾／有孔貝製品／ヤコウガイ蓋製利器／貝匙

第3表 兼久式土器共伴貝製品出土遺跡一覧表（奄美大島）

#### 4. 自然遺物 (図版6下)

コラムサン  
プリング

今回の調査では、出土した自然遺物をすべて記録することにつとめた。また第3トレンチの遺物集中箇所を選択し、コラムサンプリングを実施した。(コラムサンプリングの結果は別項を参照)。本章ではピックアップ法と現場での記録から得られた知見について記すこととする。

今回の調査で出土した自然遺物は貝類、サンゴ類、魚骨・獣骨、炭化物である。貝類はヤコウガイ・アマオブネ・タカラガイなど24科38種におよぶ。魚骨・獣骨にはブダイの下顎骨、ウニの棘・殻などがある。サンゴ類は煤の付着の有無で分類できる。自然遺物は調査区の全域から出土した。これら自然遺物をそのままとり、分布状況や砂質に留意して現場でグルーピングをした(第12図)。調査区から出土した自然遺物全般については第4表に記した。またB-3区からヌムリテイス付着二枚貝片<sup>(1)</sup>が2点出土している。

ピックアッ  
プ法

グルーピン  
グ

ヤコウガイは完形・破片あわせて調査区全体で76点出土している(第13図)。うちB-2・B-3区に57点(破片を含む)が分布し、特にB-2区のNo.9(第12図に対応、以下同様)において完形のヤコウガイが集中している。ここからは被熱の認められる1点と、ヤドカリの生息を示す、殻の下面に摩耗をのこすヤコウガイが出土している。B-3区のNo.15でもヤコウガイの集積が認められるが、蓋や破片が含まれ、アマオブネ、タカラガイ等ヤコウガイ以外の貝類も多い。また今回は調査区全域からヤコウガイが出土しているが、B-2区以外では破片が多く、No.9のヤコウガイと同列に考察することはできない。

ヤコウガイ

A-2区の東側、中央の溝状凹地に沿ったNo.1、2、3ではタカラガイの集積を検出した(第14図)。タカラガイは全体で226点出土し、殻口部破損が83点(36.7%)認められた。今回出土した自然遺物はアマオブネ、タカラガイ、マガキガイ、リュウキュウヒバリが多いが、A-2区南東側にタカラガイが濃密に分布し、南西方向にかけて次第に密度が低くなっている。溝状凹地付近に意図的に廃棄されたのであろう。A-2区の東側はタカラガイの廃棄場として利用されていた可能性がある。

廃棄場

アマオブネは調査区全体で392点出土している(第15図)。このうち、殻口部破損は26点(6.6%)あり、ヤドカリの生息を示す殻の下面の摩耗は14点(3.5%)に認められた。リュウキュウヒバリ(第16図)は全体で126点出土し、腹縁部・殻頂部破損が58点(46%)認められた。

サンゴ

サンゴは調査区全体で38点出土している(第18図)。特にA-2区のNo.10、11、12にサンゴが集中している。No.10では一部に煤の付着の認められる石皿が出土しており、No.11の南側で割れたアマオブネやリュウキュウヒバリが分布している。また付近には魚骨・獣骨が集中していることから、No.11の周辺は食物残渣を廃棄した箇所と推定できる。No.15は煤の付着の認められるサンゴ3点とヤコウガイがまとまって出土し、北東から東側にかけては炭化物が多く出土している。またNo.7、8、13、15の周辺は被熱痕のある遺物が顕著に出土していることから、周辺で火を使用したか、あるいは炉跡周辺のものを一括してNo.15周辺に廃棄したのだろう。なお、昨年の調査でも今回の調査のNo.8にあたる箇所から被熱が認められるサンゴが出土しており、No.15の周辺での火の使用を推定できる。

分布傾向

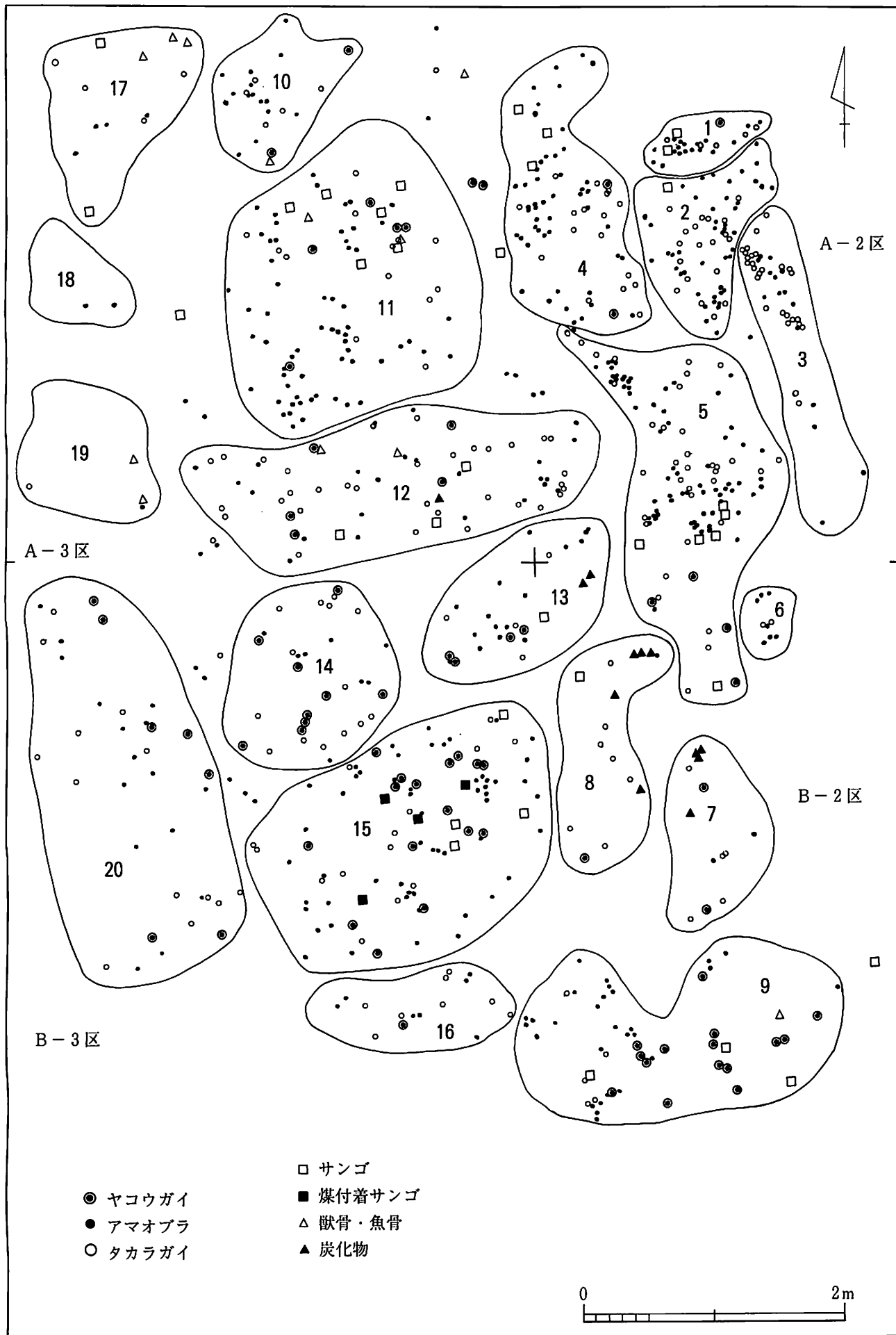
自然遺物の分布状況は調査区の北側と南側で傾向が異なる。北側では溝状凹地付近にタカラガイやリュウキュウヒバリが多く、北西部には獣骨が分布している。南側では、煤の付着したサンゴや炭化物が中央に集中し、ヤコウガイが二つの大きなまとまりをつくっている。このよ

うな自然遺物の分布傾向が包含層内の細分層の広がりによく一致する。すなわちVI e層の溝状凹地北側付近にアマオブネ、タカラガイ、リュウキュウヒバリがまとまり、溝状凹地南側に付近には完形のヤコウガイが集中している。VI c層の北側には獣骨・魚骨とヤコウガイの破片が集中していた。VI a層の南側では、煤が付着したサンゴ、ヤコウガイが集中し、北側にはアマオブネがまとまっている。ほかの遺物出土状況とともに、自然遺物の分布状況も、この地点での二次的な分布状況を示している。(山内)

註(1) ヌムリテイスは有孔虫の一種であり、砂の中で生息している。二枚貝の種は不明であるが、生息域は砂表面であり、ヌムリテイスとは生息域が重複しない。したがって二枚貝が食料として捕獲され、廃棄された後、遺跡の砂層に存在していたヌムリテイスの死骸が土壌堆積による圧縮作用を受けて、二枚貝片にとりこまれたのであろう(熊本大学教育学部田中均先生のご教示による)。

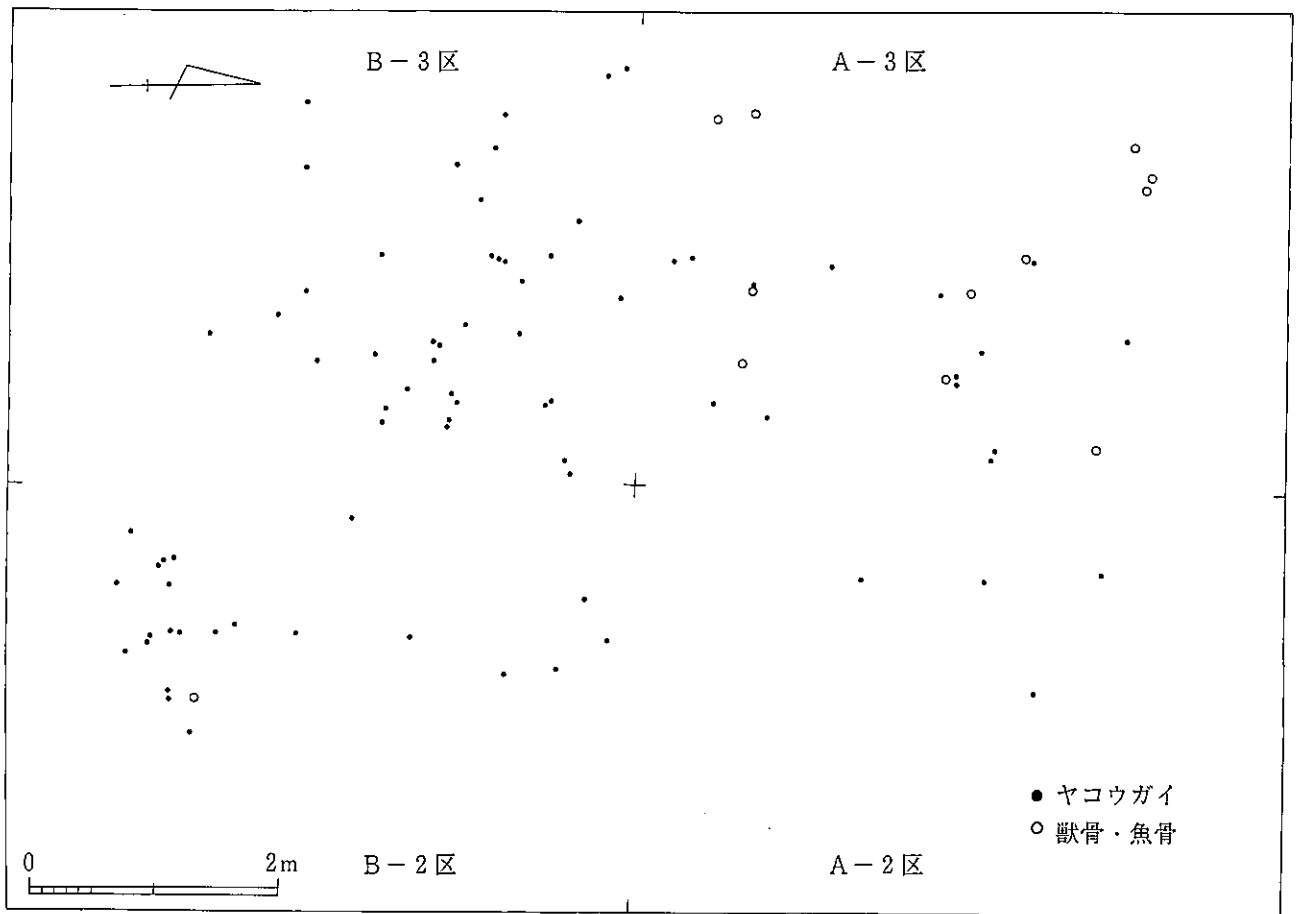
No.	
1	アマオブネ15、タカラガイ5、ヤコウガイ1、サンゴ2、リュウキュウヒバリ11、リュウキュウマスオ1、フジツガイ科1、イモガイ3、コウダカカラマツ3、イトマキボラ1
2	アマオブネ46、タカラガイ19、リュウキュウヒバリ21、サンゴ1、マガキガイ9、レイシ3、イモガイ4、オキニシ1、リュウキュウマスオ1、ウズラガイ1、コウダカカラマツ2、シラナミ1、フジツボ1、イモガイ2
3	アマオブネ15、マガキガイ7、タカラガイ27、リュウキュウヒバリ12、レイシ4、フジツボ3、コウダカカラマツ3、フジツボ1、イモガイ1
4	アマオブネ8、タカラガイ17、ヤコウガイ3、サンゴ4、マガキガイ10、リュウキュウヒバリ37、リュウキュウマスオ2、レイシ22、コウダカカラマツ4、イモガイ5、フジツボ5、シャコガイ1、チョウセンサザエ3、ウズラガイ1、オニノツノガイ1、
5	アマオブネ67、タカラガイ34、ヤコウガイ5(破片1)、サンゴ5、マガキガイ13、リュウキュウヒバリ37、コウダカカラマツ4、シラナミ4、オオツタノハ1、レイシ34、マイマイ1、オキニシ7、ウズラガイ1、フジツボ3、ニシキウズ2、リュウキュウマスオ2、サラサバティ2、オニノツノガイ4、スイジガイ2、ホラガイ1、小型イモガイ2、チョウセンサザエの蓋2、フジツガイ2、イモガイ1、ゴホウラ1、ヘビガイ1、オオベッコウガサ1、ミツカドボラ1
6	アマオブネ7、タカラガイ2、リュウキュウヒバリ5、レイシ4、オキニシ1、サラサバティ1、マイマイ2、コウダカカラマツ1、シラナミ2、オオツタノハ1、フジツボ2、シャコガイ片1
7	アマオブネ48、タカラガイ17、ヤコウガイ3(破片1)、サンゴ5、マガキガイ13、リュウキュウヒバリ37、チョウセンサザエ1、レイシ10、オキニシ4、ウズラガイ1、シラナミ1、フジツガイ1、ニシキウズ1、シャコガイ2
8	アマオブネ1、タカラガイ7、ヤコウガイの蓋1、サンゴ1、炭化物5、マガキガイ14、レイシ10、チョウセンサザエ5、オキニシ3、リュウキュウマスオ1、フジツボ1、コウダカカラマツ2、シャコガイ3、ホシダカラ1、サラサバティ2、イトマキボラ3、オオベッコウガサ1、ウズラガイ4、ハナヒラダカラ1、フジツガイ科1
9	アマオブネ28、タカラガイ5、サンゴ3、ヤコウガイ15(破片3・蓋8)、獣骨1、マガキガイ6、リュウキュウヒバリ8、オキニシ7、レイシ13、サラサバティ5、チョウセンサザエ4、小型イモガイ1、ホシダカラ1、イトマキボラ4、シラナミ4、オニノツノガイ2、フジツガイ科1、フジツボ2、マイマイ1、コウダカカラマツ2、オオベッコウガサ1、リュウキュウマスオ2、ウズラガイ2
10	アマオブネ15、タカラガイ5、ヤコウガイ2、マガキガイ3、リュウキュウヒバリ2、オオベッコウガサ1、イトマキボラ1、オニノツノガイ1、ウズラガイ1、チョウセンサザエ1、コウダカカラマツ1、レイシ3
11	アマオブネ62、タカラガイ13、ヤコウガイ5、サンゴ5、ブダイの咽頭骨1、獣骨1、魚骨1、マガキガイ14、リュウキュウヒバリ12、マイマイ1、リュウキュウマスオ6、シラナミ7、コウダカカラマツ25、レイシ33、イシダタミアマオブネ3、ベッコウガサ2、ギンタカハマ2、イトマキボラ2、イモガイ5、ミミズガイ1、オオベッコウガサ1、サラサバティ1、ウミギクガイ科1
12	アマオブネ24、タカラガイ34、ヤコウガイ5(蓋2)、サンゴ3、魚骨2、炭化物1、コウダカカラマツ2、シラナミ3、レイシ1、ボラ1、フジツボ1、チョウセンサザエ2(蓋1)、ウズラガイ1、オオベッコウガサ1、クモガイ1、オニノコブシ2、マダライモ1、スイジガイ2、ヘビガイ1
13	アマオブネ16、タカラガイ4、ヤコウガイ4(破片2)、炭化物2、マガキガイ8、リュウキュウヒバリ6、チョウセンサザエ4、コウダカカラマツ3、レイシ1、イモガイ1、リュウキュウマスオ1、マイマイ1、オオベッコウガサ1、オニノツノガイ1、シラナミ1、ウミギクガイ科1
14	アマオブネ8、タカラガイ14、ヤコウガイ9(蓋2・破片2)、マガキガイ3、リュウキュウヒバリ7、ボラ1、レイシ4、シャコガイ3、オニノツノガイ1、ウズラガイ2、コオニコブシ1、チョウセンサザエ1、スイジガイ1
15	アマオブネ54、タカラガイ14、ヤコウガイ16(蓋2・破片2)、サンゴ8(被熱が認められるもの4)、マガキガイ19、リュウキュウヒバリ14、シャコガイ1、イトマキボラ2、イモガイ2、フジツガイ科3、コオニコブシ2、レイシ16、シラナミ2、フジツボ3、コウダカカラマツ2、小型イモガイ1、ヘビガイ1、リュウキュウマスオ1、ウズラガイ1、オニノツノガイ1、オオベッコウガサ1
16	アマオブネ7、タカラガイ8、ヤコウガイ1、マガキガイ10、リュウキュウマスオ1、ウズラガイ2、シャコガイ1、レイシ1
17	アマオブネ4、タカラガイ3、サンゴ2、獣骨3(被熱が認められるもの1)、マガキガイ1、コウダカカラマツ1、レイシ2、マイマイ1
18	アマオブネ2、マガキガイ4、マイマイ2、フジツガイ1、不明1
19	アマオブネ1、タカラガイ1、マガキガイ8、レイシ9、シラナミ1、イトマキボラ1、コウダカカラマツ1、ブダイの下顎骨1、獣骨1、チョウセンサザエの蓋1、ボラ1、リュウキュウヒバリ4、イトマキボラ1、リュウキュウマスオ2、マイマイ2、オキニシ1
20	アマオブネ16、タカラガイ13、ヤコウガイ7(蓋1)、マガキガイ4、シラナミ1、リュウキュウヒバリ3、レイシ5、フジツボ2、フジツガイ科3、ヌムリテイス付着二枚貝片2、コウダカカラマツ1、イモガイ1、チョウセンサザエ1

第4表 自然遺物一覧表(第12図に対応)

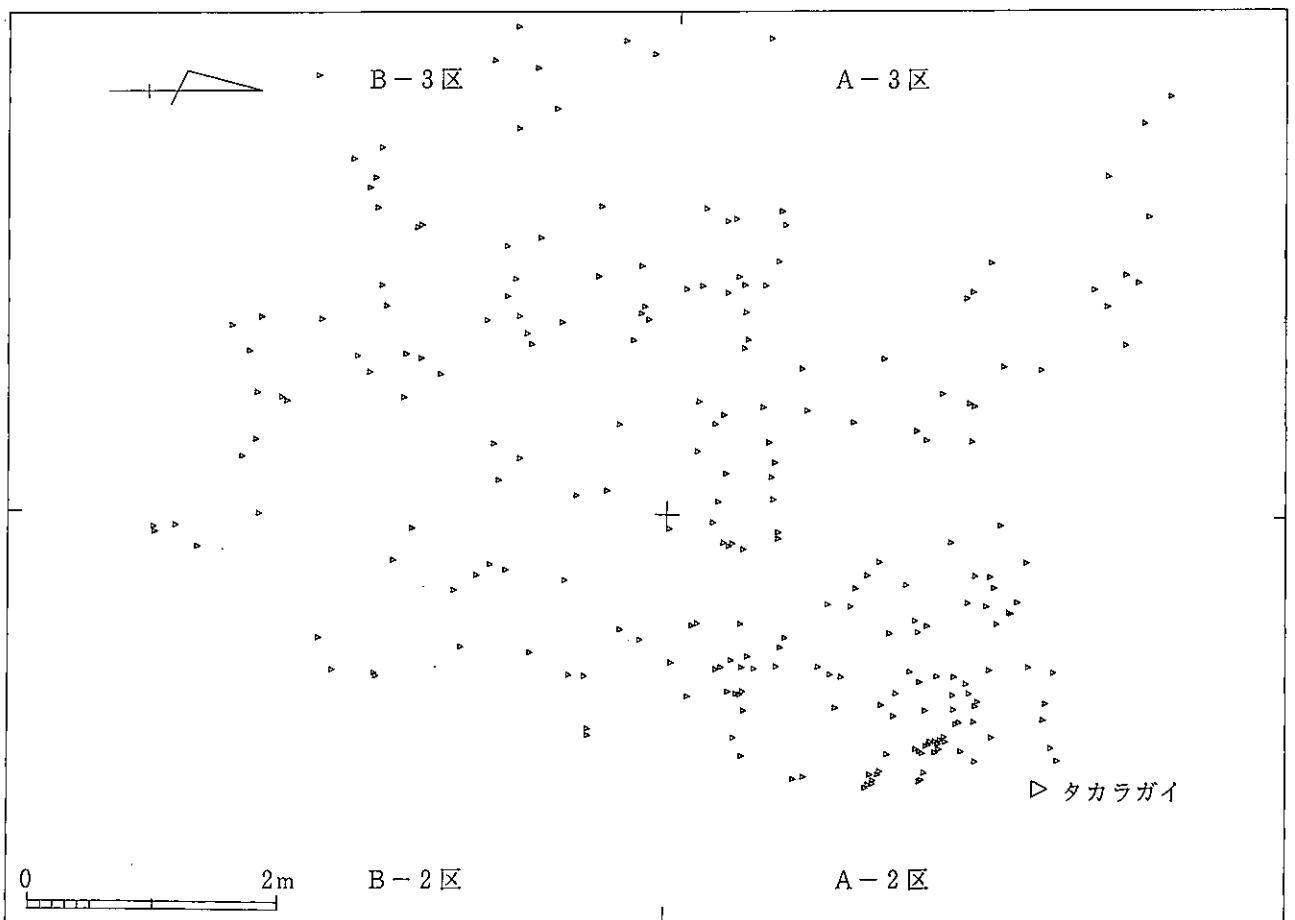


第12図 自然遺物出土状況

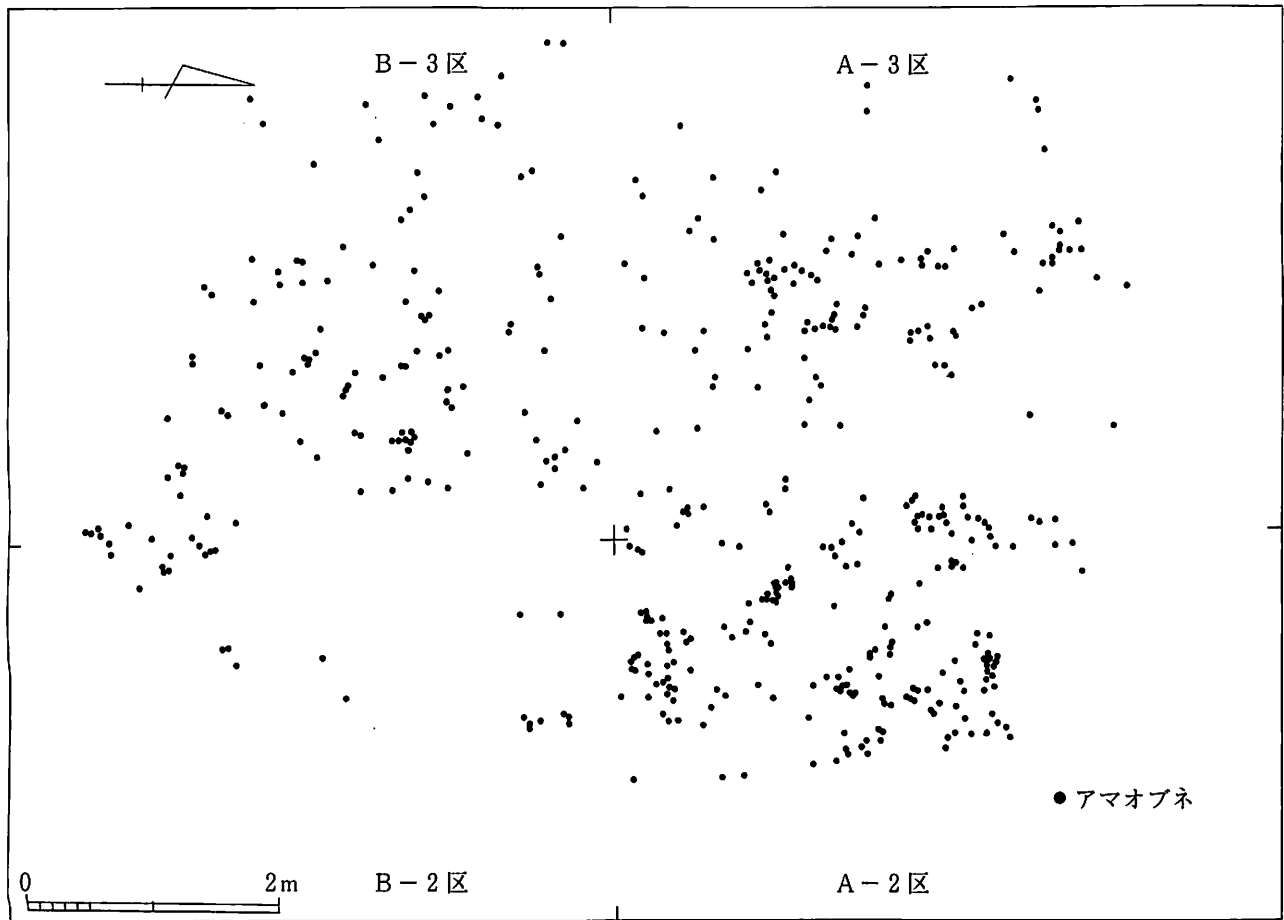




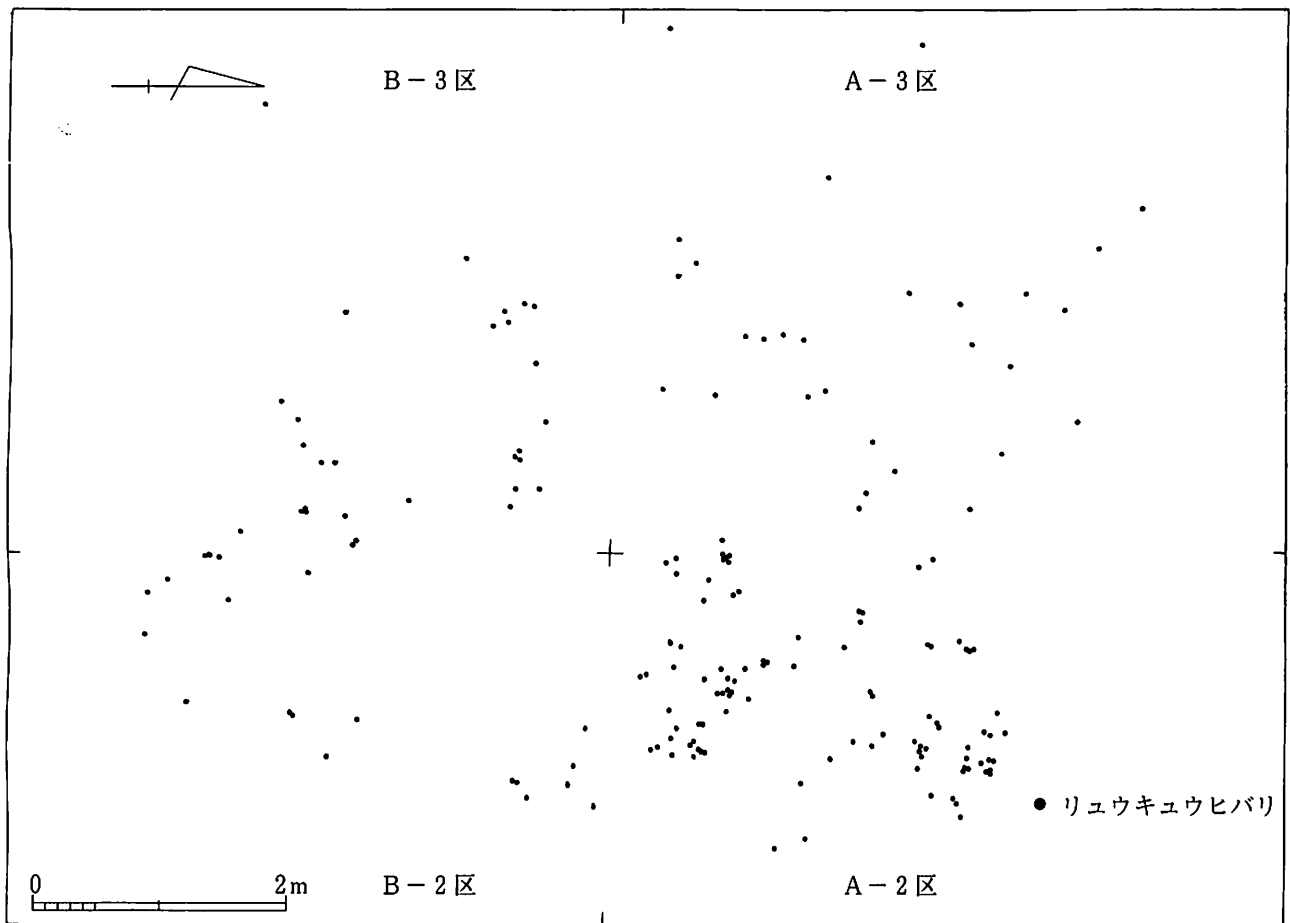
第13図 ヤコウガイ、獣骨・魚骨分布図



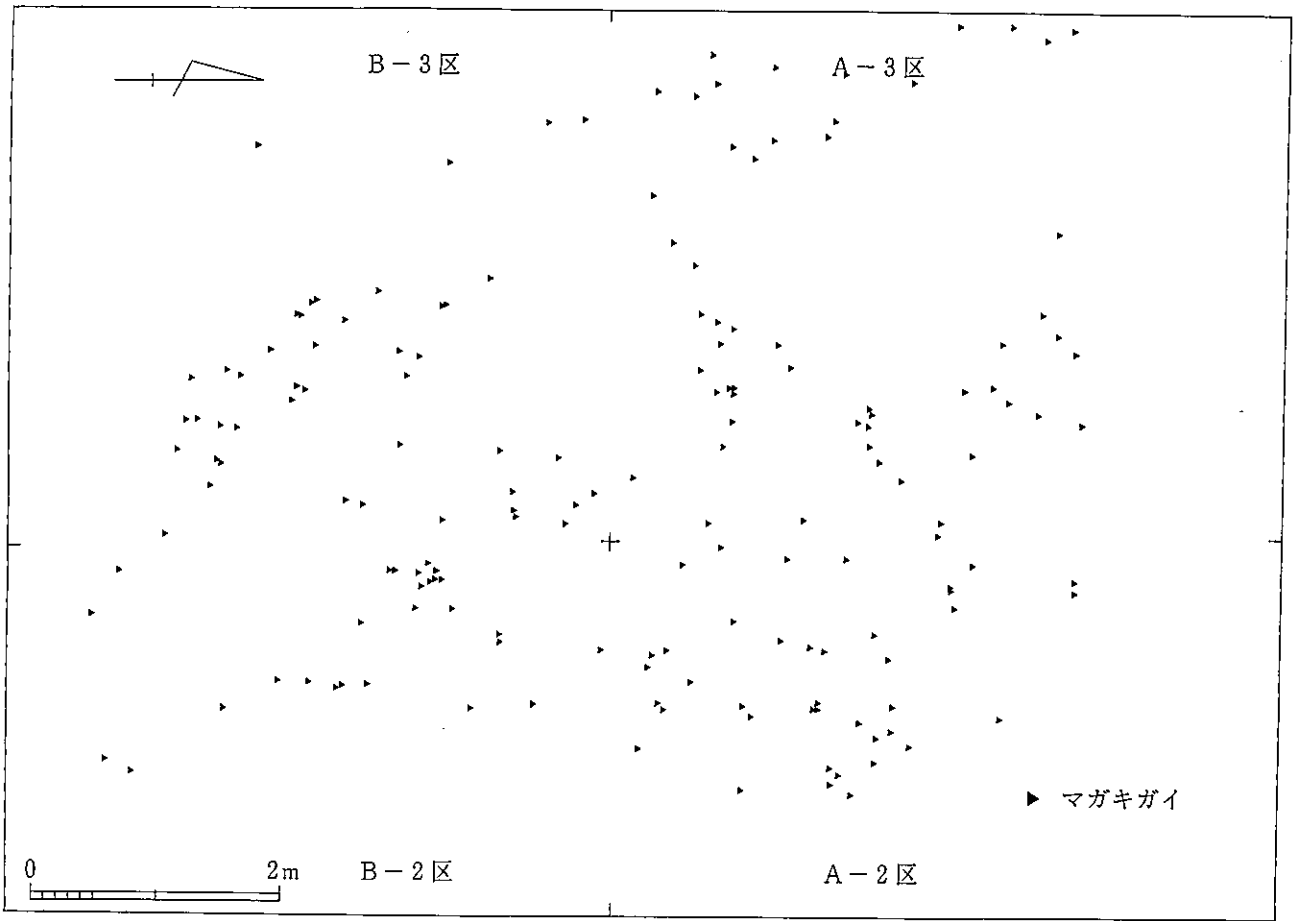
第14図 タカラガイの分布図



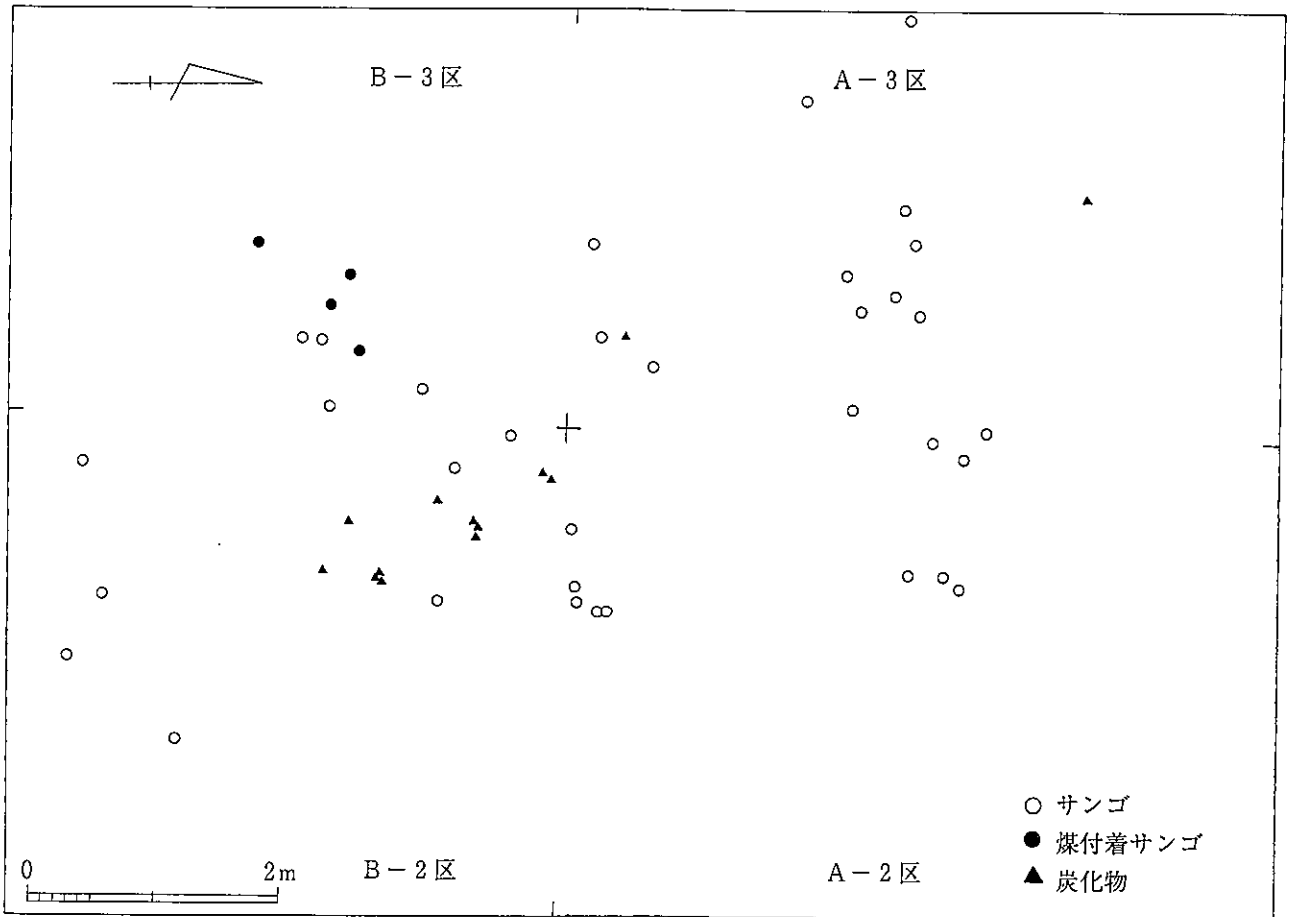
第15図 アマオブネ分布図



第16図 リュウキュウヒバリ分布図



第17図 マガキガイ分布図



第18図 サンゴ・炭化物分布図

## 四 まとめ

今回の調査は、前回報告書の中で指摘された遺跡の廃棄場所としての性格の検討、遺跡と砂丘の形成を層序から探ることを目的としておこなった。さらに当初Ⅷ層上面を調査区全面にわたって検出することも目標として挙げていたが、日程の都合上達成できなかった。しかし、以下のような成果を挙げる事ができた。

調査では土器、石器、貝製品、多量の貝類を検出した。前回の調査でも指摘されているが、貝類や破損した土器・石器・貝製品は、溝状凹地を挟んで東側に検出された建物を使用した人々が廃棄したものであろう。

溝状凹地  
廃棄

東西トレンチを掘り下げた結果、遺物包含層Ⅹ・Ⅺ層をⅥ層より下層に確認した。これにより遺跡の開始時期が古くなる事が判明した。Ⅹ層・Ⅺ層中に含まれる土器も、兼久式土器の範疇に入るものと思われる。

開始時期

最下の遺物包含層であるⅪ層は、ほぼ水平に堆積している。この層と同じく遺物包含層であるⅥ層との間には、遺物を含まない砂層（Ⅷ層）が堆積している。Ⅷ層とⅥ層の堆積状況と、Ⅵ層中の遺物が溝状凹地内に流れ込んでいることから、Ⅵ層中に包含される兼久式土器の時期には、溝状凹地が形成されていたことを明らかにできた。

Ⅵ層は、溝状凹地側から山側へ向かって傾斜して堆積しており、Ⅺ層の生活時期とは地形的条件が異なっていたことが判明した。さらに、砂層の堆積により二つの生活時期には若干の断絶があったことが窺える。しかし、この砂層は西側へいくほど薄く堆積しており、両生活時期の断絶は長期間ではなかったと考えられる。

地形的条件  
断絶

遺物包含層の土器はこれまでの調査同様、兼久式土器のみである。東西トレンチ内で出土した口唇部に刻み目をもつ土器は、沖縄本島・兼久原貝塚より出土した有文土器の一部に類似している。兼久原貝塚では、本遺跡と同様に貝札、開元通宝が出土しており、両者の共通性は注目に値する。

土器

石器は、奄美大島の兼久式期のほかの遺跡と共通して、刃器がない。このことは兼久式期より前の時期とは様相を異にする。長浜金久遺跡では兼久式土器に鉄器が共伴することから、この時期に鉄器が石器に代わって使用されはじめたと考えられる。石材には本遺跡周辺から産出する砂岩だけでなく、笠利半島南部に産出する玄武岩も使用している。砂岩は軟質で石器として利用するのに適さなかったため、硬質の玄武岩を入手したとみられる。また、入手の容易な素材としてサンゴを利用し、石皿や漁網錘を製作していたことがわかる。

刃器・石器  
鉄器  
石材

貝製品は、前回、今回の調査ともにヤコウガイを素材としたものが多い。これはこの時期の奄美大島における兼久式期のほかの遺跡と共通する。前時期と比較して、ヤコウガイの使用率が高くなっていることに注目する必要がある。

貝製品  
ヤコウガイ

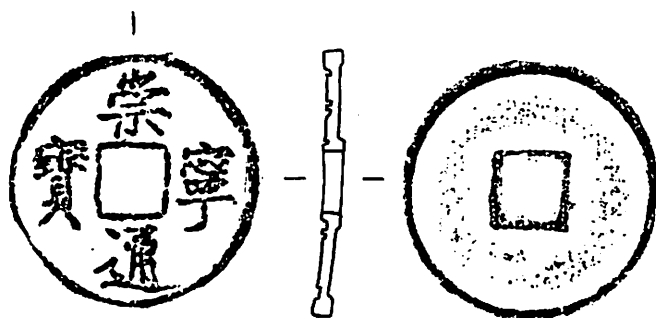
自然遺物は今回の調査で最も多く出土した。その中でも貝類の出土が多いが、焼けた獣骨もみつかり、当時の人々が食糧獲得を海の上に依存していたのではないことがわかる。また、タカラガイやレイシ、アマオブネなどの巻き貝のほとんどが殻口部を欠いていることが、現行の食べ方に対応せず、この欠損が食用のためか否か不明である。これについては、今後とも注意していきたい。

自然遺物  
食糧獲得

(若杉・尾上)

付. 崇寧通宝 (採集品)

採集状況 7月22日早朝、用集落北寄りの海岸の汀線近くにおいて、崇寧通宝を一点採集した。崇寧通宝は残存状態は良好で、顕著な摩耗は見られない。遺物を採集した5日前の17日、台風が奄美大島付近を通過しており、崇寧通宝はこれに関わって海岸に現れたものと推測される。



第19図 崇寧通宝拓影図 (実大)

崇寧通宝 崇寧通宝は、北宋崇寧年間(1102～1106年)に鑄造された錢貨で、銅錢を主体とするが鉄錢もみられる。崇寧通宝は、大きさによって小平、当五、当十の別があり、当五は小平の5倍、当十は同様に10倍の価値をもつとされる。当十錢は大型錢であり、崇寧通宝の中でも主体をなす錢である。崇寧通宝の表面に鑄出された文字は隸書、行書、楷書の別がある<sup>(1)</sup>。上記の崇寧通宝は背面無文、書体は行書である。縁部の外径は縦34.48mm、横34.49mm、縁部の内径は縦31.05mm、横30.62mm、方孔の外径は縦9.89mm、横9.67mm、方孔の内径は縦8.51mm、横8.21mm、厚さは2.41mm、重量は9.3gである。採集した錢は当十錢にあたる(第19図 図版6中C)。

当十錢 当十錢の崇寧通宝は北宋末期の銅錢で、初鑄年については1103(崇寧2)年と1104(崇寧3)年の両説がある。当十錢の崇寧通宝は、当初は正しく小平錢10枚分の価値をもっていたが、模鑄錢が横行したため当五錢になり、最終的には当三錢になった。日本での出土数は、1102(崇寧元)年に初鑄された小平錢の崇寧通宝と当十錢の崇寧通宝をあわせても少ない<sup>(2)</sup>。

出土状況 日本における当十錢の出土は第20図のとおりである。現在の出土総数は93点以上で、そのうち博多周辺からは48点(第4表17～21)、南島からは20点(同表26～33)出土し、それぞれ全体の52%、22%を占めている。博多周辺から発見される当十錢は遺構から検出されたものである。ほかの遺跡から発見される当十錢のほとんどが備蓄錢に含まれることを考えると、博多の当十錢は、中世以降における博多と大陸との盛んな貿易域を裏付けるものといえる<sup>(3)</sup>。

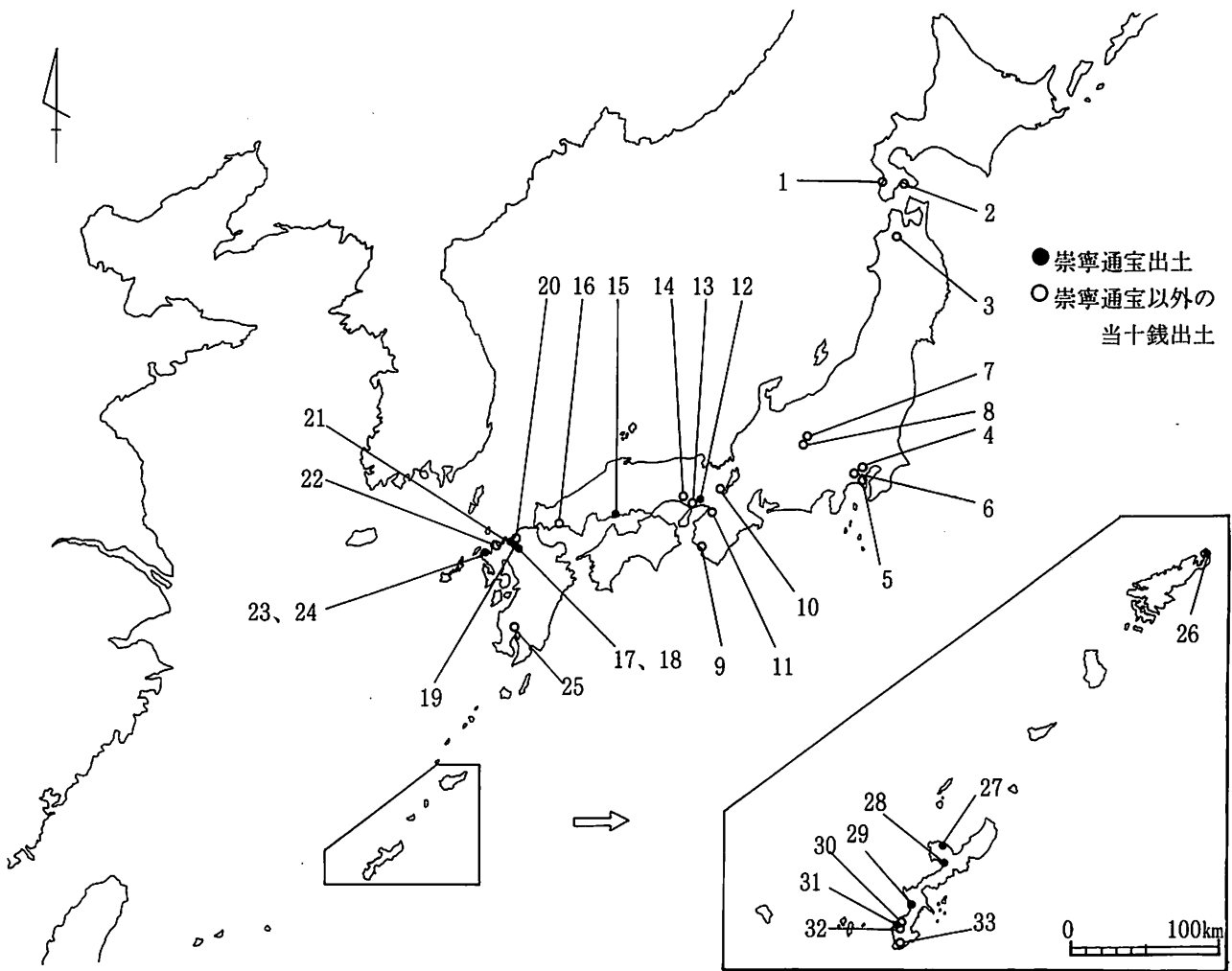
南島 ところでこの場合問題となるのは、南島の当十錢のもつ意味である。第5表によると、当十錢の出土状況には、備蓄錢、副葬品、包含層出土の三種類があり、博多のような貿易都市においては包含層からの出土が多い。南島における当十錢の出土は、本例以外すべて包含層からであり、この状況は博多に共通する。さらに、沖縄本島において当十錢と共伴する遺物は青磁、白磁などの中国の陶磁器である。したがって、南島における当十錢も、対外貿易に関わって琉球にもたらされた可能性が高いといえる。今回の崇寧通宝は採集品であるが、表面を観察する限り遠方からの漂着品ではなく、むしろ用集落にこれを本来包含していた土層があることを示唆している。崇寧通宝の当十錢は12世紀以降の奄美大島の歴史について考えさせてくれるが、現段階ではまだ1例にすぎないので今後の資料の増加に期待したい。(藤原)

課題

註(1) 朱活『古錢新典』上 三秦出版社、1991年。

(2) 永井久美男編『中世の出土錢 出土錢の調査と分類』兵庫県埋蔵錢調査会、1994年。

(3) 熊本大学助教授小畑弘己先生のご教示による。



第20図 当十銭出土遺跡分布図

No.	遺跡名	所在地	出土銭と枚数				出土状況	文献
			崇寧通宝	崇寧重宝	慶暦通宝	大観通宝 大元通宝		
1	勝山城跡	北海道檜山郡上ノ国町		2			備蓄銭	1
2	志海砦	函館市		○	1		備蓄銭	1
3	猿賀	青森県南津軽郡尾上町		○			備蓄銭	2
4	白子	埼玉県和光市			1		備蓄銭	1
5	福生19号	東京都福生市			1		備蓄銭	2
6	水道山戸々崎遺跡	神奈川県鎌倉市	1				備蓄銭	3
7	小原遺跡	長野県松本市	1				備蓄銭	1
8	吉田岩宮遺跡	塩尻市	1		1		備蓄銭	1
9	立戸岩陰遺跡	和歌山県田辺市	1				副葬品	1
10	平安京左京	京都府京都市中京区	1				副葬品	4
11	堺	大阪府堺市		1			包含層	1
12	堂坂遺跡	兵庫県宝塚市	1				備蓄銭	1
13	滝ノ奥	神戸市		1			備蓄銭	1
14	塩野	奈良県安富町		1			備蓄銭	1
15	草戸千軒町遺跡	広島県福山市	1	2			包含層	1
16	下右田遺跡	山口県防府市			1		備蓄銭	5
17	太宰府	福岡県太宰府市	6	3		3	包含層	1,6~11
18	御笠川南条坊	太宰府市	2	2			包含層	12
19	柏原K遺跡	福岡市南区	1				包含層	13
20	蒲田遺跡	福岡市東区		1			包含層	14
21	博多遺跡群	福岡市博多区	15	13			包含層	15~32
22	見借遺跡群	佐賀県唐津市		1		2	備蓄銭	33
23	榎階田遺跡	長崎県松浦市		1			備蓄銭	34
24	宮ノ下り遺跡	松浦市	1	1			備蓄銭	35
25	小山	鹿児島県鹿児島郡吉田町		1			備蓄銭	36
26	用海岸	大島郡笠利町	1				採集	
27	今帰仁城跡	沖縄県国頭郡今帰仁村	2	4			包含層	37
28	城	名護市	4	3			包含層	38
29	北谷城	中頭郡北谷町	1				包含層	39
30	浦添遺跡	浦添市		1			包含層	40
31	湧田古窯跡	那覇市	1				包含層	41
32	首里城跡	那覇市		1			包含層	42
33	伊原遺跡	糸満市		1			包含層	43

第5表 当十銭出土遺跡一覧表 (○は出土枚数不明)

## 当十銭出土遺跡地名表参考文献

- 1 永井久美男編『中世の出土銭 出土銭の調査と分類』兵庫県埋蔵銭調査会、1994年。
- 2 熊本大学助教授小畑弘己氏のご教示による。
- 3 河野真知郎「中世鎌倉銭貨考」『創立三十周年記念鶴見大学文学部論集』、1993年。
- 4 寺島孝一『平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告第14輯、1984年。
- 5 山口県教育委員会編『下右田遺跡第四次調査 概報・総括』山口県埋蔵文化財調査報告第53集、1980年。
- 6 石松好雄他編『太宰府史跡』昭和62年度発掘調査概報、1988年。
- 7 石松好雄他編『太宰府史跡』昭和63年度発掘調査概報、1989年。
- 8 石松好雄他編『太宰府史跡』平成元年度発掘調査概報、1990年。
- 9 石松好雄他編『太宰府史跡』昭和51年度発掘調査概報、1977年。
- 10 石松好雄他編『太宰府史跡』昭和52年度発掘調査概報、1978年。
- 11 石松好雄他編『太宰府史跡』昭和56年度発掘調査概報、1982年。
- 12 前川威洋他編『筑紫郡太宰府町所在御笠原南条坊遺跡』福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集 福岡県教育委員会、1978年。
- 13 山崎純男編『柏原遺跡群Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集 福岡市教育委員会、1987年。
- 14 飛鳥憲雄他編『蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集 福岡市教育委員会、1975年。
- 15 常松幹雄他編『博多Ⅶ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第147集 福岡市教育委員会、1987年。
- 16 櫻木晋一「博多遺跡群の出土銭1」『はかた』1、1992年。
- 17 亀井明徳他編『博多47』福岡市埋蔵文化財調査報告書第396集 福岡市教育委員会、1995年。
- 18 大庭康時編『博多14』福岡市埋蔵文化財調査報告書第229集 福岡市教育委員会、1990年。
- 19 大庭康時編『博多15』福岡市埋蔵文化財調査報告書第230集 福岡市教育委員会、1990年。
- 20 小畑弘己編『博多27』福岡市埋蔵文化財調査報告書第282集 福岡市教育委員会、1992年。
- 21 大庭康時編『博多48』福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集 福岡市教育委員会、1995年。
- 22 濱石哲也他編『博多31』福岡市埋蔵文化財調査報告書第286集 福岡市教育委員会、1992年。
- 23 小畑弘己他編『博多37』福岡市埋蔵文化財調査報告書第329集 福岡市教育委員会、1993年。
- 24 井澤洋一編『博多38』福岡市埋蔵文化財調査報告書第330集 福岡市教育委員会、1993年。
- 25 田中壽夫編『博多40』福岡市埋蔵文化財調査報告書第332集 福岡市教育委員会、1993年。
- 26 池崎讓二他編『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第183集 福岡市教育委員会、1988年。
- 27 大庭康時編『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集 福岡市教育委員会、1989年。
- 28 松村道博編『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第205集 福岡市教育委員会、1989年。
- 29 松村道博編『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第221集、1990年。
- 30 小畑弘己他編『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ 博多—高速鉄道関係調査(1)—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 福岡市教育委員会、1984年。
- 31 池崎讓二他編『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ 博多—高速鉄道関係調査(3)—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第156集 福岡市教育委員会、1987年。
- 32 池崎讓二編『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ 博多—高速鉄道関係調査(4)—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集、福岡市教育委員会、1988年。
- 33 中島直幸他編『見借遺跡群』唐津市文化財報告書第16集 唐津市教育委員会、1986年。
- 34 安楽勉他編『桜階田遺跡』長崎県文化財報告書第76集 長崎県教育委員会・松浦市教育委員会、1985年。
- 35 松浦市教育委員会編『宮ノ下り遺跡』松浦市文化財調査報告書5 松浦市教育委員会、1989年。
- 36 戸崎勝洋他編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅺ』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(20) 鹿児島県教育委員会、1982年。
- 37 今婦仁村教育委員会編『今婦仁城跡』今婦仁村文化財調査報告第9集 今婦仁村教育委員会、1983年。
- 38 名護市教育委員会編『名護市の遺跡2』名護市文化財調査報告書 名護市教育委員会、1982年。
- 39 山下志保編『北谷城(2)』研究室活動報告27 熊本大学文学部考古学研究室、1991年。
- 40 嵩元政秀編『沖縄県内出土の銭貨について』『南島考古』第1号 沖縄考古学会、1970年。
- 41 大城愷編『湧田窯跡Ⅰ』沖縄県文化財調査報告書第111集 沖縄県教育委員会、1993年。
- 42 当真淳一他編『首里城』沖縄県文化財調査報告書第120集 沖縄県教育委員会、1995年。
- 43 島袋洋編『伊原遺跡』沖縄県文化財調査報告書第73集 沖縄県教育委員会、1986年。

## 用見崎出土の脊椎動物遺体（予報）

早稲田大学 樋 泉 岳 二

奄美大島笠利町用見崎遺跡（兼久式土器期＝古墳時代並行期の海岸砂丘上遺跡）から出土した脊椎動物遺体の一部を分析した。今回分析したのは、コラムサンプル No.2（1995年度調査、B-4区）からの検出資料である。採取地点は砂丘の後背地で、一帯から多数の骨が出土しており「廃棄場所」と位置づけられている。コラムは10×50cmで、厚さ5 cm毎に上から①～⑤の5単位に区切られている。これらの試料を4 mm・2 mm・1 mm目の3種のフルイを通して水洗し、残留物の中から4 mmメッシュ上の全ての骨と、2 mmメッシュ上の同定可能な骨を抽出した（水洗と4 mmメッシュの抽出は黒住耐二氏によって行われた）。1 mmメッシュ上の骨は未選別である。

同定の対象としたのは、魚類の顎骨各部位・方骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・椎骨の全てとその他同定可能な骨片、魚類以外の脊椎動物ではすべての骨片である。同定の方法は現生種の骨格標本との比較によった。比較標本のコレクションやそれらの比較骨学的検討が十分でないため、同定結果の一部については将来の修正もありえるが、大枠では問題ないと思う。なお、椎骨標本の多くについては、まだ現生標本と比較していない。

同定結果を第6表に示した。骨は上層の①では微量だが下層では多く、③～⑤での包含密度は堆積物1000ccあたり 5.8～7.9 gとかなり高い値を示した。同定された骨のほとんどは魚類（真骨類）で、他にウミガメ科・イノシシがわずかに含まれる。真骨類のうち、「未同定」としたものは比較標本中に該当種もしくは近似種が見出せなかった未知の種、「目不明」は破損などの理由により目以下の査定が困難なもの、「未分析」は現生標本との比較を完了していないものを指す。ダツ目とした椎骨はおそらくダツのものと思われるが、近似種のトビウオ類との判別不安が残る。ニザダイ型とした椎骨はニザダイ科の特徴を備えるが、他にも類似の形態をもつ種類があり、さらに比較検討が必要である。未分析の楯鱗はモンガラカワハギ科のものである可能性が高い。

同定できた種類の中ではハタ科が最も多く、ダツ目、ヨコシマクロダイ？を含むフエフキダイ科、ベラ科、ブダイ科、ニザダイ科、モンガラカワハギ科も普通に見られるほか、クロダイ属？を含むタイ科、スズメダイ科もわずかに混じる。これらのうち、フエフキダイ科・タイ科はすべて大型成魚であり、ブダイ科・ニザダイ科にも大型の個体が若干混じるが、その他は体長20cm前後を中心とした小型魚（小型種または大型種の幼魚）である。いずれもサンゴ礁域の浅海で普通に見られる種類であること、特定の魚種への著しい偏りがなく多様な種類が比較的均等に含まれていること、小型魚が多いことが特色である。

こうした様相は、ブダイやフエフキダイなどの大型魚よりも、むしろサンゴ礁浅海域にごく普通に見られる雑多な小魚類の方が、食料資源として大きなウェイトを占めていた可能性を示唆する。こうした小魚類は、高度な熟練技能に頼らずとも安全確実に捕ることができるうえ、漁場も遺跡の目と鼻の先であるから、遺跡住民の主食（major food）のひとつとして日常的に漁獲・消費されていたことは十分ありそうに思える。今後は同定の精度向上を図るとともに、他地点のサンプルの分析も加え、上記の様相が用見崎遺跡に一般的なものか確認していくこと、ウミガメ・イノシシなども含めた全体的な脊椎動物相を把握することが必要である。



第6表 用見崎遺跡コラムサンプルNo.2 (B-4区) より検出された脊椎動物遺体。(左/右)

種類	部位	試料番号・分離メッシュ										合計
		①		②		③		④		⑤		
		4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	
骨重量 (g)		0.5	0.05	3.10	1.30	12.20	2.25	12.60	1.80	18.30	1.45	53.60
ダツ目 Beloniformes	腹椎				1	4	6					11
ハタ科 Serranidae	耳石						1/					1/
	主上顎骨				1/			1/		1/	1/	3/1
	前上顎骨		1/	1/	1/	1/		1/	2/	1/	1/	1/6
	歯骨			1/		1/					1/	1/1
	角骨									1/		1/
	方骨		1/		1/1	1/				1/		1/4
	前鰓蓋骨					1/						1/
	主鰓蓋骨					1/	1/					1/1
	擬鎖骨				1/				1/			1/1
	第1椎骨			1			1		1			3
	腹椎		1	4			2				4	11
ヨコシマクロダイ?	歯									1		1
Monotaxis grandoculis?												
フエフキダイ科	角骨								1/			1/
Lethrinidae	方骨		1/					1/		1/		2/1
クロダイ属?	犬歯								2		1	3
Acanthopagrus sp.?	第2 臀鰭棘									1		1
タイ科? Sparidae?	方骨									1/		1/
ベラ科 Labridae	主上顎骨										1/	1/
	前上顎骨			1/							1/	2/
	歯骨						2/1					2/1
	角骨	1/					1/					1/1
ブダイ科 Scaridae	主上顎骨								1/			1/
	前上顎骨								1/1			1/1
	口蓋骨						1/					1/
	主鰓蓋骨									1/		1/
	上咽頭骨							1/1				1/1
	下咽頭骨			1								1
	尾椎					1				1		2
スズメダイ科 Pomacentridae	歯骨										1/	1/
ニザダイ科 Acanthuridae	方骨									1/		1/
	主鰓蓋骨							1/			1/	2/
	擬鎖骨						1/			1/	1/1	2/2
	第1椎骨					1		1	1	1		3
	楯鱗				1							3
ニザダイ型	腹椎		5	1		1	3	1	7		2	20
	尾椎		6	5	10	2	3	3	1		7	34
モンガラカワハギ科 Balistidae	前上顎骨					1/	1/					2/
	歯		1				1		1		3	6
	角骨			1/							1/	1/1
	擬鎖骨							1/				1/
	腹椎						1					1
真骨類 (未同定)	主上顎骨							1/				1/
Teleostei (Unknown)	前上顎骨			2/	1/	1/						1/3
	歯骨								1/			1/
	角骨		1/			1/						1/1
	主鰓蓋骨					2	1					3
	擬鎖骨		1				1/					2
真骨類 (目不明)	犬歯							1	4			5
Teleostei (Order indet)	臼歯		1		1		1		3		1	7
	前鰓蓋骨							1/1				1/1
	椎骨	2	1		7	1			2		1	14
	椎骨破片			2	7	2	20		12		3	46
真骨類 (未分析)	椎骨			12	40	7	79	10	46	11	48	253
Teleostei (Unanalyzed)	楯鱗				7		17		14		33	71
	鱗				20	3	66		43	1	10	143
ウミガメ科 Cheloniidae	背甲破片							1		1		2
カメ目 Testudinata	指骨?									1		1
イノシシ Sus scrofa	下顎P2?							1/				1/

# 1996年の用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体

千葉県立中央博物館 黒住耐二

ここでは、昨年度に引き続き、奄美大島笠利町のサンゴ礁の砂丘上にある古墳時代から古代併行期の兼久式土器の時代の遺跡である用見崎（ようみさき）遺跡のコラムサンプルから出土した貝類遺存体について報告する。報告に先立ち、サンプルの採取と検討の機会を与えて戴いた熊本大学の甲元眞之・木下尚子両先生及び考古学研究室の皆様に御礼申し上げます。

今回のサンプルは、B-3区のVIe層の上部から下部にかけて5cmごとに区切られた5単位サンプル（コラムサンプルA）と、B-4区のX層から採取された1単位サンプルからなる。A-1とBの土壌量が他のものより多かったので、最少推定個体数の算出には、配慮が必要と考えられ、今回はこの個体数を示さなかった。各サンプルは、約1週間40℃で乾燥させたのち、水中で4、2、1mmの各メッシュで静かに洗いながら振るった。この時に微小陸産貝類等は浮くので、今回はその大部分を0.0625mm以下のメッシュのネットで採取し、一部のものは水を流すときに1mmメッシュで受けた。これらのものはフロートを記した。また昨年度のコラムサンプルでの調査結果から、2mm未満のサンプルからは破片も含めて食料残滓貝類の個体数を算出できる部位は得られないことが明らかになるので、今回は対象から除いた。

得られた貝類（甲殻類等を含む）のメッシュごとの組成を第7表から第12表に示した。食料残滓貝類に関しては、これまでに報告されているように<sup>(1)(2)</sup>、アマオブネ類やリュウキュウヒバリガイの個体数が多く、ツノレイシ等のレイシ類、ハナビラダカラ等のタカラガイ類も目立っている。ただ、現地でのピックアップ法では、マガキガイが比較的多くみられているが<sup>(3)</sup>、コラムサンプルからはほとんど出土せず、この方法では過少評価されている可能性が高い。また、昨年度は2ヶ所のコラムで組成に大きな相違が認められたが、今年度のコラム間では相違は比較的少ないようであった。

微小陸産貝類は、時間の都合上、半分のものしか同定できなかった。ただ、昨年度の結果と比較すると、個体数が著しく多かった。スナガイやホソオカチョウジガイの小幼貝が100個以上得られた単位サンプルもあり、これは回収するメッシュが細くなったためと考えられる。砂丘遺跡では充分乾燥させた土壌からフローティングによって微小陸産貝類を抽出する方法が効率的だと思われる。この組成は、コラムAではスナガイ、ホソオカチョウジガイ、キセルガイの幼貝等の開けた場所や海岸林に生息する種の個体数が著しく多く、種数は少ない傾向にあった。一方コラムBではヒメムシオイ、ミジンヤマタニシ、チビノミギセル等の森林に生息する種が多く確認され、多数の種が得られた。今回、これまでに奄美大島から報告のなかったナガヤマヤマトボも1個体ではあるが確認された。またコラムAでは、下部から上部にかけて、現在でも集中して生息するキカイノミギセルの個体数が増加しており、この種にとっての生息環境が変化したものと考えられる。これらの点についてもよも今後より詳細に検討を加えたい。

註（1）黒住耐二「貝類遺存体」中山清美編『用見崎遺跡』笠利町文化財調査報告第20号 鹿児島県大島郡笠利町教育委員会、1995年。

（2）黒住耐二「用見崎遺跡のコラムサンプルから得られた貝類遺存体（予報）」山田康弘・原田範昭編『用見崎遺跡』研究室活動報告31 熊本大学文学部考古学研究室、1996年。

（3）益永武史「自然遺物」『用見崎遺跡』同上、1996年。

第7表 用見崎遺跡のコラムサンプルから出土した貝類遺存体の組成.

コラム番号 メッシュサイズ	確認		コラムサンプルA				コラムサンプルB					
	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm
軟体動物門 Mollusca 腹足綱 Gastropoda(Marine)												
ツタノハ科												
Patellidae												
ヨメガカガイ科												
Nacellidae												
ヨメガカガイ科												
ユキノカサ科												
Loniidae												
リュリテトン科												
Turbinidae												
ニシキウズ科												
Trochidae												
アマトブネ科												
Neritidae												

二枚貝は左殻/右殻, Aは製品, Bは焼けている個体, Eは水層を受けている死殻, Hはオカヤドカリ類の宿貝, Jは幼貝, ・は破片を示す, フロートのは全体の枚の個体数である。

第8表 用見崎遺跡のコラムサンプルから出土した貝類遺体の組成 (つづき-2)

コラム番号 メッシュサイズ	アモオブ科	確認 部位	1			2			3			4			コラムサンプルB		
			4mm	2mm	フロード	4mm	2mm	フロード	4mm	2mm	フロード	4mm	2mm	フロード	4mm	2mm	フロード
	NERITIDAE	ニシキアモオブネ	N.(Amphinertia)polita	1	1	1	1	1	3(1B)	3	4	4	4	7	6	7	16
		スリツギアモオブネ	(operculum) N.(A.)rumpfii	3	1	1	1	2	5	5	2	2	1	1	1	1	
		ヒメトウガタカニモリ	Rhyncholavis oedonullii	1	7	1	1	5	2	4	5	4	1	1	1	1	
	オニツノガイ科	オニツノガイ	Cerithium(s.s.)columna							1				1		2	2
		*セキヒツカタツノアエ	C.(s.s.)munitoides													1	1
		メオニツノガイ	C.(s.s.)echinatum											1			
		オニツノガイ	C.(s.s.)modulosum						1								
		*ゴマフカニモリ	C.(Semivertagus)		2(1E)	1	1	1		1							
		*クリムシカニモリ	C.(S.)resioticus	1	1			1								1	1
		*ハナカニモリ	C.(S.)zebrus														
		*オシマカニモリ	Clypeomonus abbrevicula			1		1									
	タマキビ科	*イホタマキビ	Nodilittorina trochoides							1							
	スライショウガイ科	ムカシタモト	S.(Canarium)mutabilis	1	1	1		1									
		マガキガイ	S.(Conomurex)luhuanus	1													
		クモガイ	Lambis lambis	1										1	j		
		スズメガイ科	Antisabia foliacea	2	1	1		1			1						
		*アツキクスズメ	Sabia acuta														
		ムカデガイ科	Serpulorbis varidus	40	4	84	19	16	31	14	41	13		1		1	4
		*ヘビガイsp.	Serpulorbis sp.	6		9	1	8	8	1	2					23	3
		*タツノコヘビ?	Bivonisa dragonella?	3		1			1							3	2
	タカラガイ科	ハナビラダカラ	Cypraea(Monetaria) annulus	18		2		1									
		キイロダカラ	C.(M.)moneta			2		2	3	1	2					1	
		ハナマルユキ	C.(Ravitronea) caputserpentis	11		2											
		コモンダカラ	C.(Erosaria)	9		3											
		ホシキムタ	C.(Mystarponda)vitellus	15		2											
		ヒメホシダカラ	C.(Lyncina)lynx	4		2		3	1	4	2						







第12表 用見崎遺跡のコラムサンプルから出土した貝類遺存体の組成 (つづき-6)

コラム番号 メッシュサイズ	確認				コラムサンプルA				コラムサンプルB				
	1 4mm	2 2mm	4mm	7mm	1 4mm	2 2mm	3 4mm	4 2mm	4 4mm	4 2mm	4 4mm	2mm	7mm
オナジマイ科	Bradybaenidae	*オキナワスマイマイ *タメトモマイマイ	Acusta d. despecta Phaeohelix phaeogramma	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1
二枚貝類	Bivalvia(Marine)												
フネガイ科	Arcaidae	*エガイ *コシロガイ	Barbatia(Abarbatia)lima Acar plicatum	5/7	13/13	0/1j	0/1E	8/12	15/6	1/0	5/6	5/6	5/6
イガイ科	Mytilidae	ヤサガタミミエ リュキエウヒバリ	Ancopsis sculptilis Modiolus auriculatus	58/46	72/77	90/734 (1E)/1	0/1	99/120	102/113	52/51	3/2	3/2	3/2
ウグイスガイ科	Pteriidae	ミドリアオリ	Pinctada panassae					0/1	0/1	0/1	0/1	0/1	0/1
シモクアオリ科	Isoptomnidae	カイシアオリsp.	Isoptomn sp.										
イタボガキ科	Ostreidae	オハゴロガキ	Saccostrea mordax										
ツキガイ科	Lucinidae	*ヒメツキガイ	Epicodakia bella										
キクザルガイ科	Chamidae	キクザル	Chama japonica										
ザルガイ科	Cardiidae	カワラガイ	Fragum unedo										
シヤコガイ科	Tridacnidae	シラナミ	Tridacna maxima										
チドリマスオガイ科	Mesodesmatidae	インハマグリ	Atactodea striata										
アサジガイ科	Semelidae	*シワサメザラ	Semele obscura	1j/0									5/4
シオササミガイ科	Psammobiidae	リュキエウマサオ	Asaphis violascens										
マルステレガイ科	Veneridae	オオスノメガイ	Periglypta(s.s.) ciathrata	1j/0				1/0					
多板綱	Polyplocophor(Marine)												
ヒザラガイ科	Chitonidae	ヒザラガイ科sp.	Chitonidae spp.	6	5	4	1	2	5		2	2	2
節足動物門	Arthropoda	タイワシロジツボ	Tetraclia s. formosana	1	1	1	1	1	7				
蔓脚類	Cirripedia	ミナミクロフジツボ	Tetraclia s. formosana	1				1					
		*オオアカンフジツボ		4									
		フジツボ類(楯板)	Follicipes miella	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		カメノテ		2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
カニ類	Brachyura			2	6	1	1	3	2				7
棘皮動物門	Echinodermata	シラヒゲウニ等 ナガウニ等	Tripleneustes gratilla etc. Echinometra mathaei etc.	100 60	5 5	20 5	40 10	40 10	100 40				20 0
炭化物		carbide		80	30	30	20	2000	2400	120	3500	30	30
土壌体積(cc)		Sample Volume		3400	2300	2200	2000	2400	2400	3500	3500	3500	3500

ヒザラガイからナガウニまでは、単に出土数を示しただけで最小推定個体数を求めることはできない。ウニ類と炭化物の数値は2mmメッシュに残ったおおよその数であり、絶対数ではない。



付 篇

西 原 F 遺 跡

## 例 言

- 本付篇は熊本大学考古学研究室による熊本県阿蘇郡西原村大字河原字大野所在の西原F遺跡の発掘調査概要報告である。
- 本遺跡は熊本県文化課に大野遺跡群として届け出を行っており、本報告作成時に正式な遺跡名を決定する予定である。したがって西原F遺跡はそれまでの仮称である。
- 調査は1996年8月10日から8月18日までの合計9日間にわたっておこなわれた。
- 本付篇の執筆は藤木聡がおこなった。
- 調査および整理参加者は以下の通りである。  
甲元眞之 木下尚子 小畑弘己（以上教官）  
田中 大介（佐賀県教育委員会） 本田浩二郎 松浦一之介（以上福岡市教育委員会）  
山下宗親（熊本市教育委員会） 山田康弘（土井ヶ浜人類学ミュージアム学芸員） 山田信子  
今村佳子（大学院2年次生） 若杉竜太（大学院1年次生） 尾上博一（研究生）  
上田健太郎 濱田智美 藤江望 藤木聡（以上学部3年次生） 江島賢一 小倉卓 小路岳彦  
辻村美代子 福岡理恵 藤本圭司 藤原由博（以上学部2年次生） 遠部慎（別府大学学部3年次生）  
発掘同好会 阿蘇古代遺跡探索研究会
- 調査および整理については、以下の諸氏・機関にご協力・ご指導いただいた。（五十音順、敬称略）  
赤城奎助 秋吉淳子 稲津暢洋 岩谷史記 江本直 岡本真也 木崎康弘 木村剛 郷清高 小谷桂太郎  
末永崇 杉原敏之 高浜潔 田中康雄 西山春作 平ノ内幸治 福田正文 古森政次 松本博幸  
矢野希久代 西原村教育委員会 家畜改良事業団熊本種雄牛センター
- 出土遺物は、本報告作成終了まで熊本大学考古学研究室で、終了後は西原村教育委員会で保管する予定である。

## 付 篇 目 次

1	遺跡の位置と環境	45
2	調査の概要	45
3	西原F遺跡基本層序	45
4	出土状況	46
5	出土遺物	50
6	採集遺物	52
7	まとめ	56

## 1. 遺跡の位置と環境

遺跡の立地

西原F遺跡は熊本県阿蘇郡西原村大字河原字大野に所在し、高畑山(標高796m)から派生する幅狭な尾根上に立地する。かつてこの一帯はクヌギなどの落葉広葉樹林であったというが、現在は切り開かれて牧場の採草地として利用されている。遺跡の北側・南側には高畑山に源を発する小河川が流れ、これらは木山川となり、緑川に合流して有明海に注ぐ。

当遺跡周辺は牧場や採草地、道路の建設などに伴う削平により大きく地形が変貌している。以前からこれらの削平を受けた地点を中心に、数多くの土器・石器が採集され、一部はすでに報告されている。代表的な遺跡として西原A・B、谷頭遺跡が挙げられ、その他に総数30ヶ所の遺跡が確認されている(第22図)。旧石器時代の遺跡は14遺跡確認されており、その数は今後の踏査などにより増加するものと思われる。遺跡の立地はそのほとんどが眺望のきく丘陵先端部であり、遺跡の規模は小規模なものが多く、キャンプサイトの色彩が強い。遺跡が集中するのは標高400~670mの範囲内であり、当時の植生や動物相に関係があると思われる。縄文時代の遺跡は早期から晩期まで各時期にわたって確認されるが、西原F遺跡周辺では早期に属する遺跡が目立つ。その多くは旧石器時代遺跡と地点を同じくするという特徴が挙げられる。弥生時代以降の遺跡は2カ所と少ない。

周辺の状況

## 2. 調査の概要

西原F遺跡の立地する阿蘇外輪山南西部は、数多くの旧石器時代遺跡が発見されているにもかかわらず、これまで本格的な発掘調査がおこなわれなかった。火山灰が良好に堆積している阿蘇地域の旧石器時代石器群の様相を明らかにするため、包含層の確認を目的とする小規模な発掘調査を計画した。

調査目的

調査区は、任意の杭から派生させたA~H区をそれぞれ10のグリッド(2m×2m)に分けて設定した(第23図)。調査はC1~C5、F1・2、G1・2・4・5、H8・10のグリッドにおいておこない、調査面積は45m<sup>2</sup>である。また各グリッドの掘り下げ進度に若干の差があり、第21図に示した。層序の確認のためC1・G1グリッドにおいては深堀りをおこない、I~IX層までの層序を確認した。調査終了後、西原F遺跡北側の切り通しの土層の同定をおこなった。結果、I層中にアカホヤ火山灰(以下Ah、6400年前)、VI層中に始良丹沢火山灰(以下AT、25000年前)を含む可能性の高いことが判明した<sup>(1)</sup>。なお、遺跡の地形測量図作成は時間の都合により9月に入ってからおこなった。

調査過程

註(1) 熊本大学教授渡辺一徳先生のご教示による。なお、火山ガラスの分析を現在進行中である。

## 3. 基本層序 (第24図)

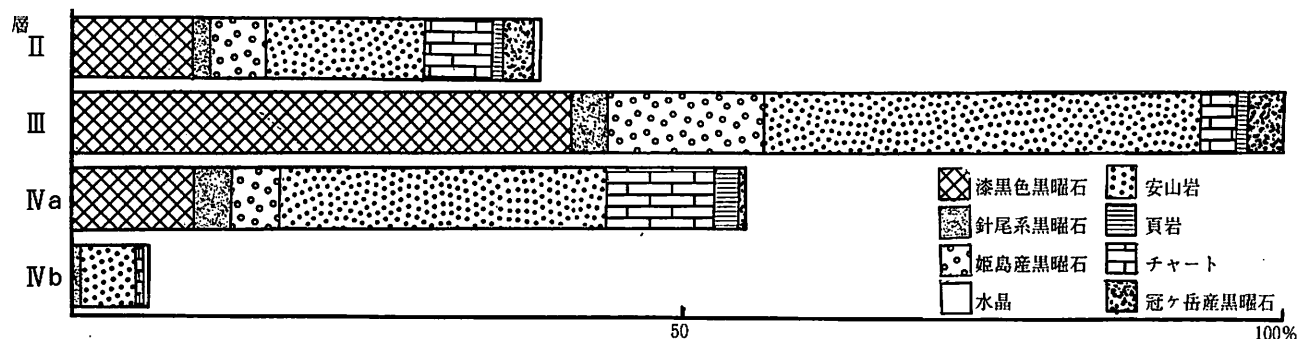
- I層：黒褐色土層(7.5YR2/2)。Ahが部分的に含まれており、土にしまりがなく粒子が細かい。縄文時代早期以降の遺物が包含されており、グリッドによっては削平されている。 I層
- II層：黒褐色土層(7.5YR3/2)。粒子は細かく、粘性がある。縄文時代早期後半の遺物が包含され、まばらに炭化物が混入する。 II層
- III層：にぶい黄褐色土層(10YR2/3)。クラック<sup>(1)</sup>がみられる。II層とIV層の漸移層であり、ほぼ遺跡全体に広がっている。10~15cmの厚さをもつ。細石刃石器群を含む。 III層

- IV a層 IV a層：褐色土層（10YR4/4）。固くしまっており、クラックが著しく発達する。土が固くしまるのは削平がⅢ層までおよんでいるためか。12～15cmの厚さをもつ。台形石器群、ナイフ形石器を含む。
- IV b層 IV b層：褐色土層（10YR4/6）。IV a層に比べて色調は明るい。IV a層とともにいわゆるソフトロームとなる。10～15cmの厚さをもつ。ナイフ形石器、台形様石器を含む。
- V層 V層：極暗褐色土層（7.5YR2/3）。固くしまっており、クラックが入る。石器が包含されるが、クラックに落ち込んだものであろう。Ⅶ層とともにいわゆるハードロームとなる。
- Ⅵ層 Ⅵ層：暗褐色土層（7.5YR3/3）。白い火山ガラス（AT）を多く含む。
- Ⅶ層 Ⅶ層：黒褐色土層（7.5YR2/2）。固くしまる。
- Ⅷ層 Ⅷ層：褐色土層（10YR4/6）。軟質の小礫（1～5mm大）を含む。20～25cmの厚さをもつ。遺物は確認されなかった。
- Ⅸ層 Ⅸ層：褐色土層（10YR4/6）。粘性がなく、粒子は粗い。厚さは不明。  
 註（1）なんらかの要因でできた土中のひび。

#### 4. 出土状況（第26図）

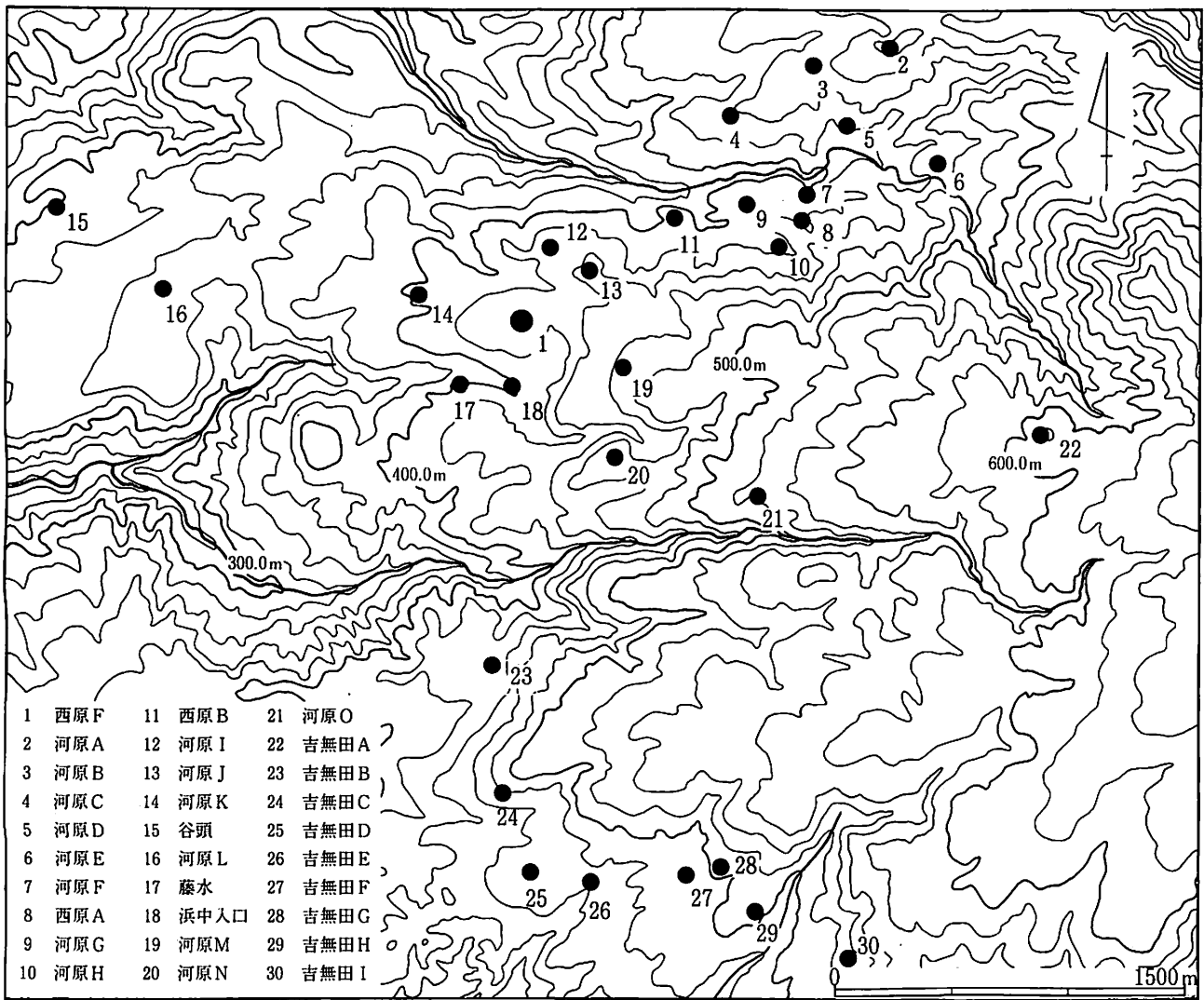
遺物の内訳 遺物は各グリッドのⅠ～Ⅴ層中から出土した。出土遺物は石器総数479点、土器総数22点である。出土位置の明確な石器は460点を数え、各グリッド・層ごとに点数・内訳を第25図に示した。なおⅣ a層及びⅤ層はクラックが著しく発達しており、遺物の原位置が保たれていない場合があった。これらの遺物は本来包含されていたと思われる層中の遺物とした。また、採集遺物は石器約600点、土器約80点である。採集石器は旧石器時代の遺物のほかは石鏃34点を除き、すべて剥片・碎片である。土器は縄文時代早期後半のものが主体であり、そのほかに黒色磨研土器などもみられる。削平以前は、該期包含層が残存していたのであろう。

出土石器のうち定形石器の占める割合は6%と低く、ほとんどが剥片・碎片で構成される。H 8グリッドⅣ b層出土の安山岩製剥片9点に接合がみられ、図示していないが、すべて切断によって調整をおこなう。代表的な出土石器としてG 4・5グリッドⅣ a層上面に台形石器群がある。この石器群は台形石器・チャート製剥片・碎片を中心に構成され、同石器群中に接合資料はみられない。また、C 1グリッドⅣ b層下部からは台形様石器・スクレイパーが出土した（図版8上）。同層まで掘り下げたH 8グリッドにおいては台形様石器などの定形石器が出土せず、Ⅳ b層下部石器群の広がりとは不明である。そのほかの出土石器としてⅢ層の細石刃、Ⅳ a層のナイフ形石器が挙げられる。

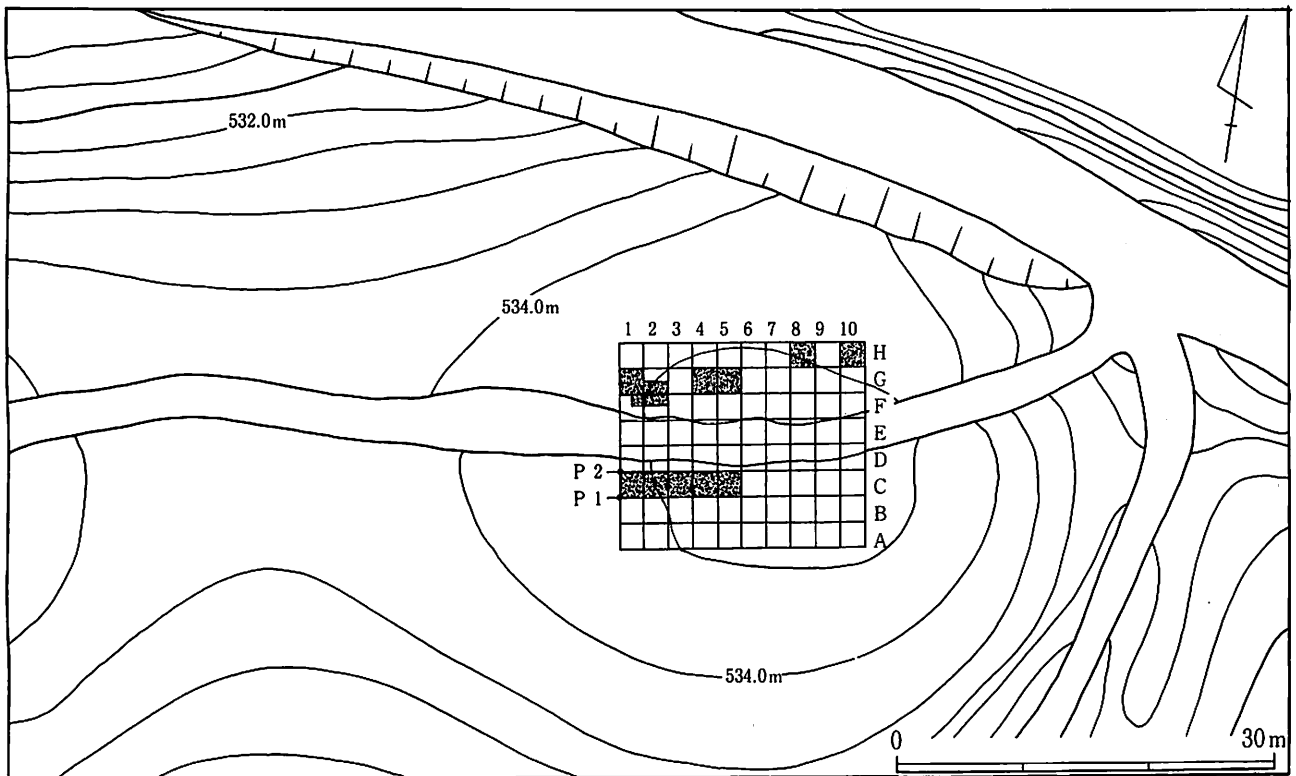


Ⅲ層出土石器総数214点を100%としてⅡ・Ⅳ a・Ⅳ b各層出土石器数の割合を横軸で表している。

第21図 出土石器石材構成図



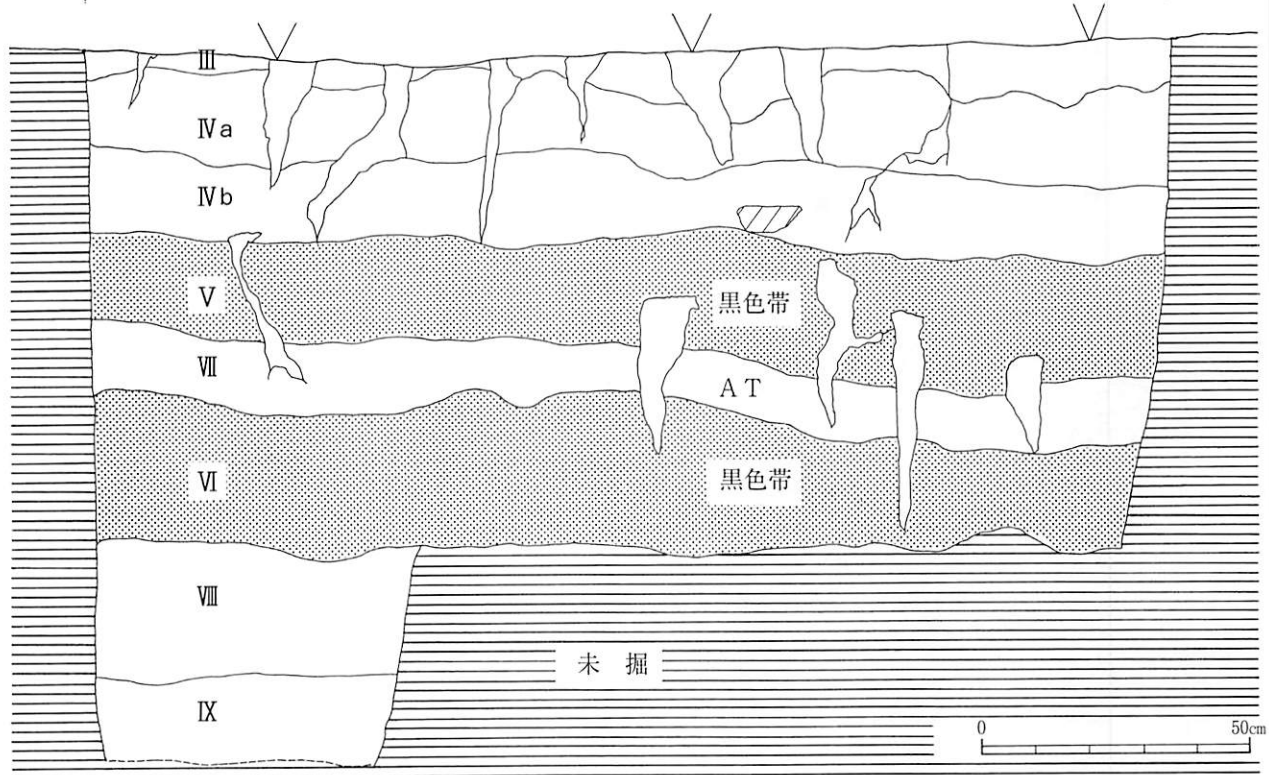
第22図 周辺遺跡分布図 (8・11・15・17・18以外は仮称)



第23図 遺跡周辺地形測量図 (網掛け部分が調査範囲)

P 2 標高534. 60m  
←南 +

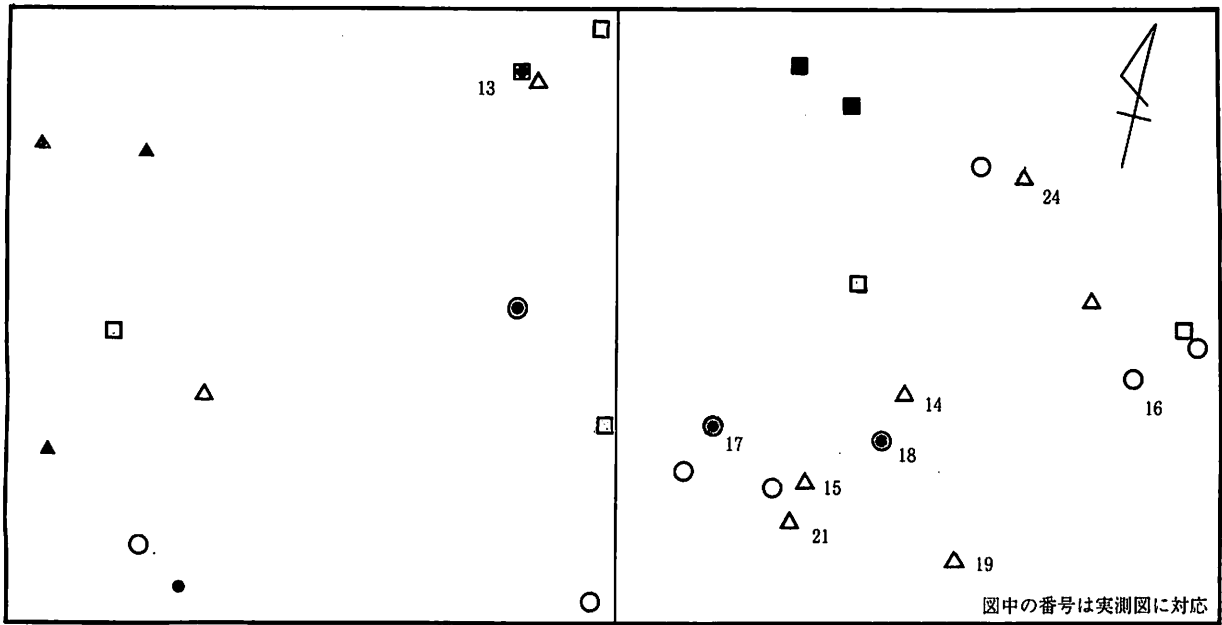
標高534. 60m P 1  
+ 北→



第24図 基本土層断面図 (C Iグリッド西壁)

	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	F 1	F 2	G 1	G 2	G 4	G 5	H 8	H 10
I								台形石器1	碎片1		剥片1		
II			削平			剥片1	剥片1 碎片2	—	碎片2 剥片2	石鉄1 細石刃2 尖頭状石器1 剥片7 碎片27	石鉄2 スクレイパー1 細石核1 剥片11 碎片18	石鉄未製品1 剥片1 碎片2	剥片3 碎片2
III	石鉄1 剥片1	—	剥片9 碎片32	細石刃2 剥片12 碎片24	細石刃5 剥片11 碎片41 原石1	剥片2 碎片3	碎片5	—	細石刃1 剥片3 碎片3	細石刃5 剥片7 碎片12 石鉄未製品1	細石刃1 碎片8	細石刃1 剥片3 碎片11	剥片5 碎片4
IVa	ナイフ形石器1 剥片14 碎片17 原石2	ナイフ形石器1 剥片5 碎片5		剥片4 碎片9	ナイフ形石器1 剥片7 碎片10			ナイフ形石器2		台形石器2 剥片4 碎片9	台形石器2 剥片9 碎片6	剥片14 碎片8	
IVb	台形石器2 剥片10 碎片3 スクレイパー1											剥片2 碎片3	
V	剥片1											剥片1	

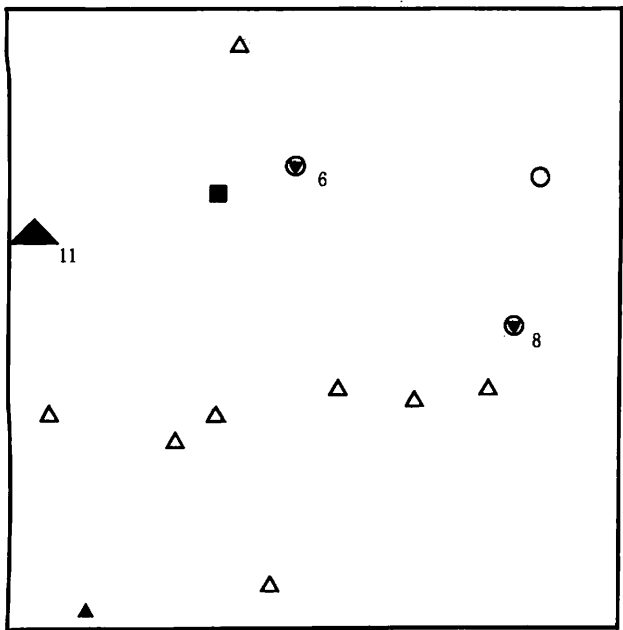
第25図 各グリッド掘り下げ進度および出土石器一覧図 (網掛け部分は未掘)



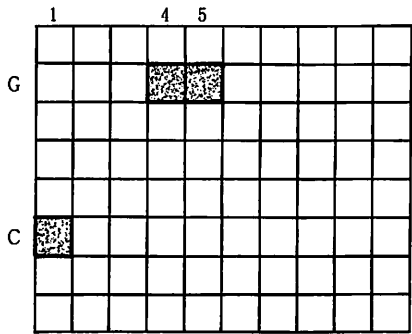
図中の番号は実測図に対応

G 4 IVa層

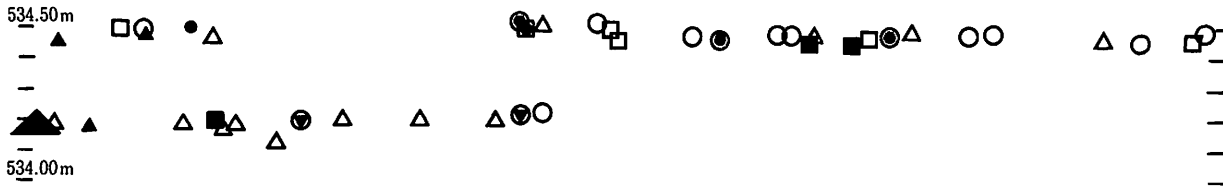
G 5 IVa層



C 1 IVb層下部



- 漆黒色黒曜石製剥片・碎片
- 針尾系黒曜石製剥片・碎片
- 安山岩製剥片・碎片
- △ チャート製剥片・碎片
- ▲ 頁岩製剥片・碎片
- 冠ヶ岳産黒曜石製剥片・碎片
- ◎ 台形石器
- ⊙ 台形礮石器
- ▲ スクレイパー



第26図 石器出土状況平面図および出土石器垂直分布図

## 5. 出土遺物（第27・28図 図版8中）

以下出土した石器を器種ごとに述べる。各石器の法量・出土位置は第13表に示した。

ナイフ形  
石器

ナイフ形石器（1～5）1は褐色に近く風化した黒曜石の縦長剥片素材である。刃部は新しく欠損しており完形ではないが、平面形は台形を呈すと思われる。調整は右側縁からの平坦剥離の後、両側縁に腹面側から緩角度のブランディングをおこなう。2は白い斑晶を含む漆黒色黒曜石の不定形剥片素材である。剥片を横位に用い、左側縁に腹面側から急角度の粗い調整を施す。右側縁は背面側からの加撃によって大きく折損するため、調整の様が不明である。先端は欠損しており、また刃部には刃こぼれがみられる。3・5は不定形剥片を素材とする。3は右側縁の基部付近に数回の調整を施すのみで、剥片の形状を大きく変えていない。安山岩を用いる。5はかなり風化し灰白色を呈する安山岩素材である。左側縁の大きな剥離は、素材となる剥片を作出する以前におこなったものである。調整は左側縁に腹面側から数回のみおこない、剥片の形状は大きく変わらない。4はやや風化した安山岩を用い、礫面を多く残す縦長剥片素材である。調整は右側縁に腹面側から緩角度のブランディングをおこなった後、腹面にブランディング面から数回の平坦剥離を施す。左側縁は礫面を残し、腹面側に平坦剥離を施す。

台形様石器

台形様石器（6・8）6は白色をした頁岩の不定形剥片素材である。左側縁に背面側から急角度の調整をおこない、左側縁はノッチ状を呈す。また右側縁先端は欠損するが、緩角度の調整を数回おこなう。8は灰黒色のチャートの不定形剥片素材である。6と同様に左側縁に背面側から急角度の調整を施す。先端には微細剥離がみられる。

剥片（7・9・10）7・9は不定形剥片、10は縦長剥片である。7は「井」の字状に節理の走る白色チャート、9・10は緑色チャートを用いる。10の左側縁は礫面であり、末端は欠損する。後者は特に出土した台形石器と同じ石材である。

スクレイパー

スクレイパー（11）シルト質頁岩を用いる。かなり風化しており、稜線が丸みを帯びるほど摩耗する。背面のほとんどは礫面であり、刃角は鈍くまた粗雑である。

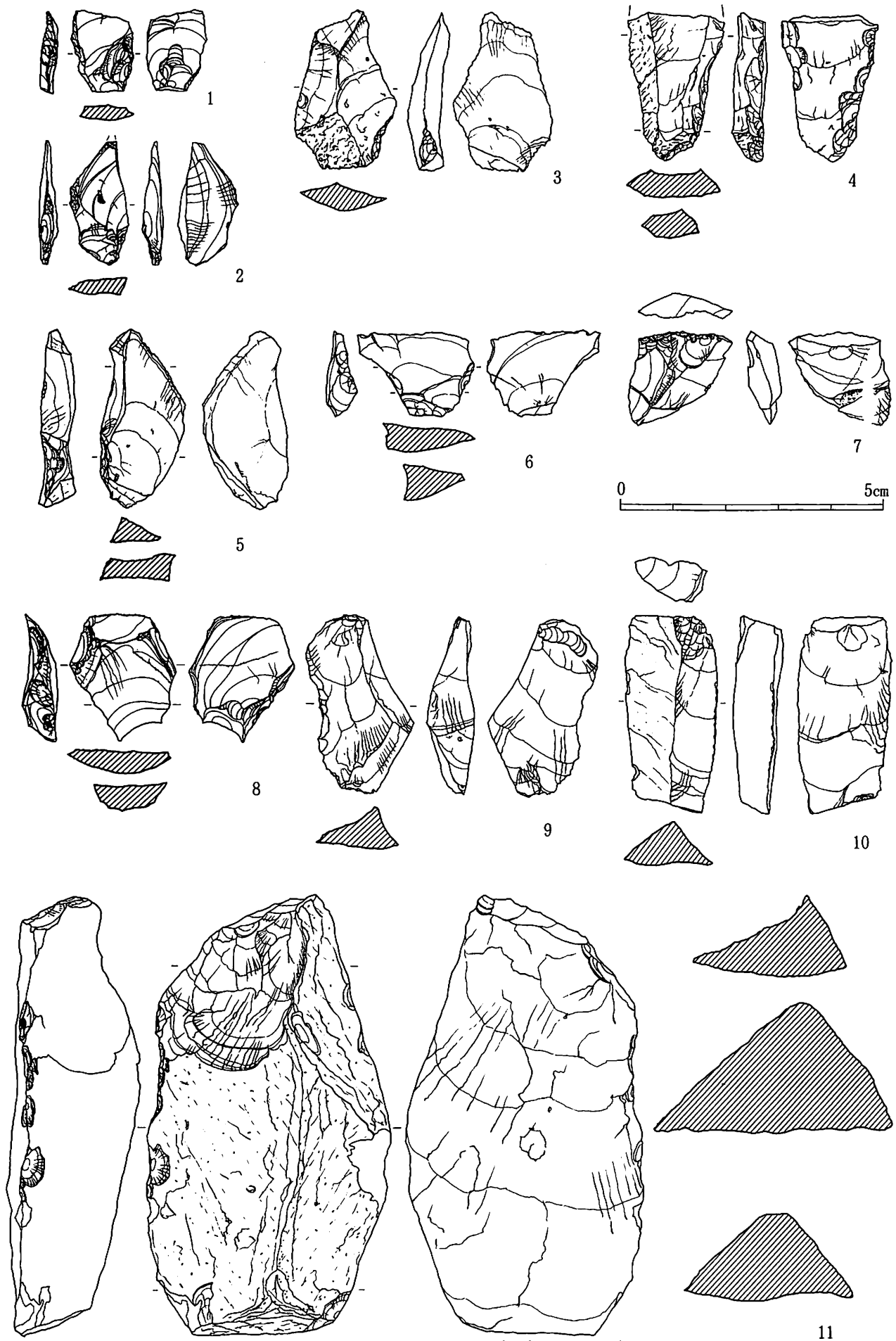
台形石器

台形石器（12・13・17・18）台形石器はすべて縦長剥片、もしくはそれに近い不定形剥片の打面と端部を除去したものをを用いる。12は漆黒色黒曜石の縦長剥片素材である。調整はまず右側縁刃部側から基部に向かい、次に左側縁刃部側から基部まで、最後に基部にブランディングを施す。第29図50と最終形態・石材ともに共通する。17は白色の不純物を含む緑色チャートの不定形剥片素材である。剥片のより打面に近い部分を用い、調整は腹面側からおこなう。基部と先端右側を欠損する。13は白色頁岩の縦長剥片素材である。側縁部にのみ腹面側からブランディングをおこない、基部は無調整である。完形。18は緑色チャートの不定形剥片素材である。調整は17同様側縁部にのみおこない基部は無調整である。先端左側を欠損する。

剥片

剥片（14～16・19～24・29・30・42・43）15・16・19～22・24はいずれも不定形で寸詰まりである。特に14～16・19～22は、17・18の台形石器と同じ石材であり、台形石器を目的とする剥片剥離の中で生じたものと思われる。接合関係はないが、おそらく2～3の母岩に分かれるであろう。23は不純物の多い緑色チャート、24は黒い節理が走る白色チャートを用いる。29・30は細石刃核の打面再生剥片である。29の右側縁にみられる調整は、前段階の剥片剥離のための打面調整である。その剥離方向に直向して最終剥離をおこなう。29・30はともに漆黒色黒曜石素材である。





第27图 出土石器实测图(1) S=2/3

43は白色チャートを用い、打面再生剥片である。42は褐色に近く風化した黒曜石を用い、側縁には礫面を残す。

**細石刃** 細石刃 (25~28・31~34) 26・34は端部、27・28は頭部と端部を折り取り、25は頭部のみ残る。32・33は完形。石材は、25~28・31・34は漆黒色黒曜石、32は斑晶を含む漆黒色黒曜石、33は冠ヶ岳産黒曜石を用いる。25は寸詰まりであり、また34は出土資料の中では際立って大型のものである。

**細石刃核** 細石刃核 (35) 腰岳産黒曜石を用いる。石核がかなり小形になるまで細石刃の剥出をおこなう。最終剥離面を観察すると、かなり小さな細石刃の剥離を試みたことがわかる。

**ブランク** ブランク (36) 冠ヶ岳産の黒曜石である。数回の剥離がみられるものの、遺跡に持ち込まれたまま細石刃作出はおこなっていない。

**石鏃** 石鏃 (38・39) 38は石鏃表面が剥落したもので、その平面形は不明。調整は左右から丁寧におこなう。39の平面形はV字形を呈す。左脚の欠損は新しい。38・39ともに漆黒色黒曜石を素材とする。

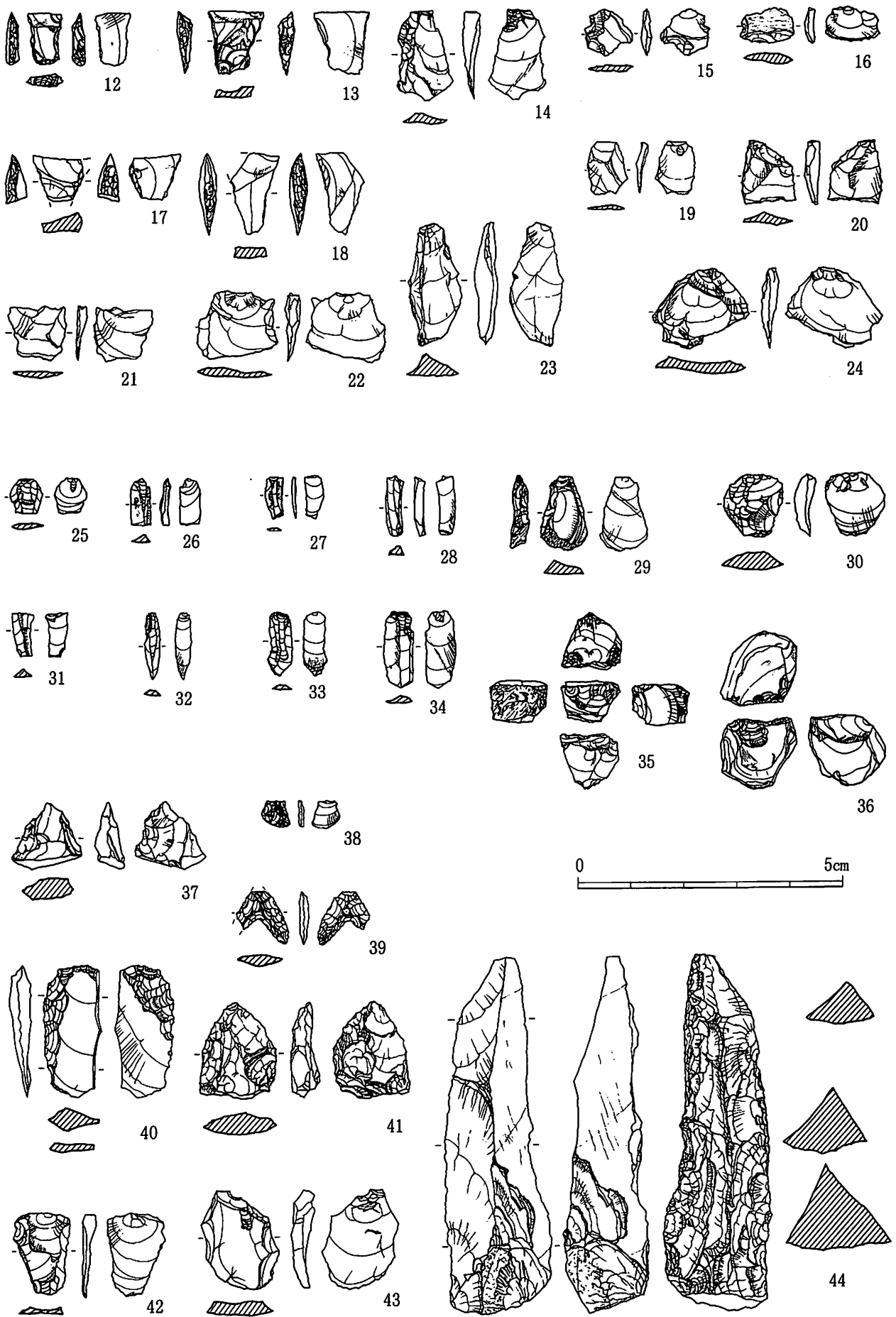
**石鏃未製品** 石鏃未製品 (37・41) 37は白色に風化した安山岩を用いた厚手の剥片素材である。左右両側縁から平坦剥離を試みており、初期の段階で素材下端部が折損したため廃棄したのであろう。41は安山岩を用いる。あまり風化は進んでいない。基部側は階段状剥離を起こしており、素材の厚みを減じれなかった結果、37と同様廃棄されたのであろう。

**スクレイパー** スクレイパー (40) 針尾系黒曜石の不定形剥片素材である。右側縁を切断することで石器の形状を縦長にしており、また刃部には交互剥離を施す。

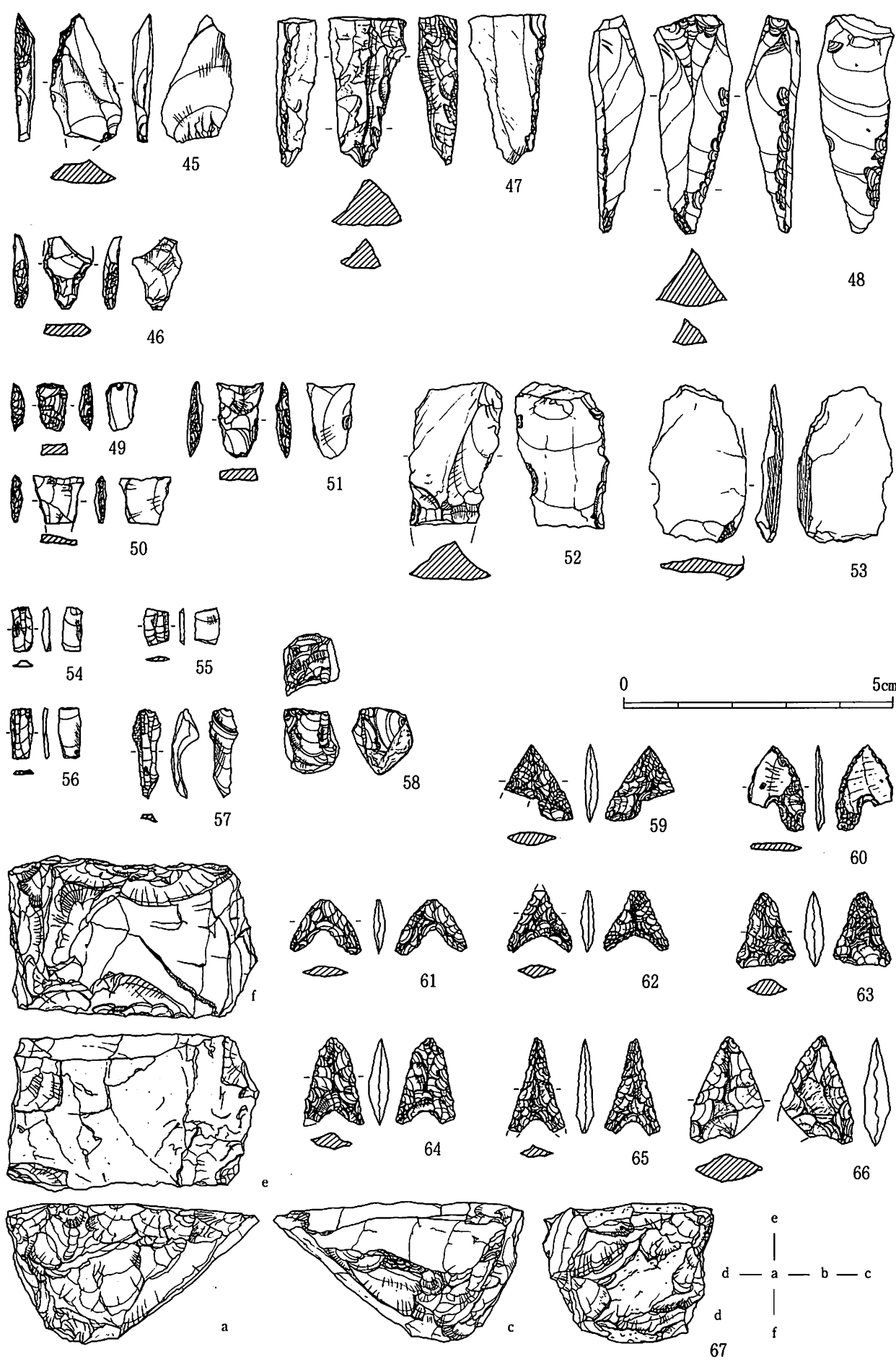
**尖頭状石器** 尖頭状石器 (44) サヌカイトを用いる。素材となった剥片の形状は、背面の剥離面の観察から縦長剥片と思われるが、腹面全面に調整がおよぶため断定はできない。この調整は中央に稜が入るような平坦剥離となる。調整の結果、先端に向かって徐々に細くなるが、先端には礫面をわずかに残している。断口はいずれも三角形に近いものとなる。完形。

## 6. 採集遺物 (第29図 図版8下)

**採集遺物** 45・46はナイフ形石器である。45は褐色の頁岩素材で二側縁加工、46は安山岩素材で基部を舌状に加工している。47は白色の頁岩素材の三稜尖頭器で、先端を欠損する。48は使用痕を有する石刃で漆黒色黒曜石素材である。かなり風化が進み、褐色を呈す。49~51は台形石器である。49は漆黒色黒曜石素材であり、平面形が第28図12に類似する。50・51は緑色チャート素材で出土した台形石器と形態・素材ともに類似する。67は、50・51と同一の緑色チャート素材の石核である。礫面をかなり残しており、またヒンジフラクチャーが著しい点など、剥片剥離の困難さが窺われる。それが原因となって、剥片剥離の途中で廃棄されたのであろう。52は白色頁岩素材の縦長剥片、53は磨製石斧である。53は刃部付近のみの資料であり全体の形状は不明。54~57は細石刃、58は冠ヶ岳産黒曜石素材の細石刃核で、かなり小さな細石刃剥離をおこなう。59~66は石鏃である。59はいわゆる鋏形鏃であり、白色チャートを素材とする。



第28图 出土石器实测图(1) S=2/3



第29图 采集石器实测图(3) S=2/3

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	グリット	層	レベル	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	グリット	層	レベル
1	ナイフ形石器	2.3	1.7	0.5	1.6	A	C5	IVa	534.49	35	細石刃核	1.2	1.7	1.6	2.9	A	G5	II	534.53
2	ナイフ形石器	3.8	1.7	0.6	2.3	A	C1	IVa	534.28	36	ブランク	1.8	2.1	2.1	9.2	J	H8	III	534.31
3	ナイフ形石器	3.9	2.8	1.0	8.1	D	G1	IVa	534.38	37	石鏃未製品	1.8	2.0	0.5	2.1	D	G4	III	534.45
4	ナイフ形石器	3.2	2.7	0.8	10.6	D	G1	IVa	534.34	38	石鏃	0.7	0.8	0.1	0.1	A	C1	III	534.47
5	ナイフ形石器	4.9	1.9	1.0	7.7	D	C2	IVa	534.49	39	石鏃	1.5	1.4	0.2	0.4	A	G5	II	534.53
6	台形椽石器	2.4	3.3	0.9	4.6	E	C1	IVb	534.18	40	スクレイパー	3.6	1.6	0.6	2.7	C	G5	II	534.53
7	剥片	2.6	2.6	0.9	4.8	II	C1	IVa	534.17	41	石鏃未製品	2.6	2.0	0.8	3.8	D	H8	II	534.42
8	台形椽石器	3.5	3.0	1.0	8.4	I	C1	IVb	534.18	42	剥片	2.2	1.6	0.4	0.9	A	C3	III	534.54
9	剥片	4.9	3.1	1.4	11.2	G	H10	-	-	43	剥片	2.8	2.1	0.6	2.4	II	C4	IVa	534.50
10	剥片	5.4	2.5	1.2	16.8	G	F1	II	534.47	44	尖頭状石器	9.9	3.1	2.4	52.5	D	G4	I	534.64
11	スクレイパー	12.3	6.4	3.5	257	F	C1	IVb	534.14	45	ナイフ形石器	3.5	2.0	0.5	3.2	K	表採	-	-
12	台形石器	1.4	1.0	3.5	0.4	A	G1	I	534.44	46	ナイフ形石器	2.0	1.4	0.3	0.9	D	表採	-	-
13	台形石器	1.7	1.5	0.5	1.0	E	G4	IVa	534.44	47	三稜尖頭器	4.1	2.1	1.1	7.9	H	表採	-	-
14	剥片	2.5	1.6	0.6	1.1	G	G5	IVa	534.44	48	側頭状石核	6.1	2.0	1.5	11.6	A	表採	-	-
15	剥片	1.3	1.4	0.3	0.3	G	G5	IVa	534.48	49	台形石器	1.3	0.8	0.4	0.4	A	表採	-	-
16	剥片	1.0	1.6	0.2	0.5	G	G5	IVa	534.44	50	台形石器	1.3	1.4	0.3	0.4	G	表採	-	-
17	台形石器	1.3	1.4	0.6	0.9	G	G5	IVa	34.47	51	台形石器	2.0	1.3	0.4	1.0	G	表採	-	-
18	台形石器	2.3	1.4	0.5	1.1	G	G5	IVa	34.47	52	剥片	3.9	2.5	1.0	10.2	E	表採	-	-
19	剥片	1.4	1.1	0.1	0.3	G	G5	IVa	534.46	53	磨製石斧	4.2	2.6	0.7	7.4	D	表採	-	-
20	剥片	1.8	1.5	0.4	1.0	G	H10	III	534.24	54	細石刃	1.2	0.5	0.2	0.1	A	表採	-	-
21	剥片	1.6	1.4	0.3	0.3	G	G5	IVa	534.47	55	細石刃	1.0	0.6	0.1	0.1	A	表採	-	-
22	剥片	1.9	2.2	0.4	1.3	G	F2	II	534.46	56	細石刃	1.4	0.6	0.1	0.1	A	表採	-	-
23	剥片	3.4	1.4	0.7	2.3	G	H8	IVa	534.25	57	細石刃	2.5	0.8	0.7	0.6	A	表採	-	-
24	剥片	2.2	2.7	0.4	1.7	H	G5	IVa	534.53	58	細石刃核	1.8	1.5	1.6	4.8	J	表採	-	-
25	細石刃	0.9	0.9	0.2	0.1	J	C5	III	534.64	59	石鏃	2.0	2.0	0.4	0.9	H	表採	-	-
26	細石刃	1.3	0.6	0.2	0.1	A	H8	III	534.42	60	石鏃	2.3	1.5	0.2	0.8	D	表採	-	-
27	細石刃	1.2	0.4	0.1	0.1	A	G4	III	534.54	61	石鏃	1.5	2.0	0.3	0.5	B	表採	-	-
28	細石刃	1.7	0.5	0.2	0.3	A	C4	III	534.42	62	石鏃	1.6	1.8	0.4	0.6	C	表採	-	-
29	剥片	2.0	1.3	0.5	1.0	A	C5	III	534.56	63	石鏃	2.1	1.7	0.6	1.2	D	表採	-	-
30	剥片	1.8	1.7	0.4	1.1	A	C4	III	534.60	64	石鏃	2.4	1.6	0.5	1.3	C	表採	-	-
31	細石刃	1.2	0.6	0.2	0.1	A	C5	III	534.65	65	石鏃	2.6	2.1	0.5	0.9	D	表採	-	-
32	細石刃	1.8	0.4	0.1	0.1	A	C4	III	534.55	66	石鏃	2.8	2.1	0.8	3.0	D	表採	-	-
33	細石刃	1.7	0.6	0.1	0.2	J	G4	III	534.65	67	石核	3.8	6.9	4.2	135	G	表採	-	-
34	細石刃	2.2	0.8	0.2	0.3	A	G2	III	534.66										

第13表 出土石器観察表

(1) 石材; A: 漆黒色黒曜石 B: 姫島産黒曜石 C: 針尾系黒曜石 D: 安山岩 E: 白色頁岩  
 F: シルト質頁岩 G: 緑色チャート H: 白色チャート I: 灰黒色チャート  
 J: 冠ヶ岳産黒曜石

ただし、同一石材は必ずしも同一母岩を表さない。

(2) 単位は長さ、幅、厚さはcm、重さはg、レベルはmである。

(3) 番号は実測図中の番号に対応する。

## 7. まとめ

**調査の成果** 西原F遺跡の旧石器時代石器群は大きく三つに分けられる。IV b層のナイフ形石器を主体とする石器群、IV a層上面に見られる台形石器群、III層中の細石刃を主体とする石器群である。また、II層中や地表面には縄文時代早期以降の遺物が数多くみられた。

**百花台型台形石器類似資料** 本遺跡の旧石器時代石器群を最も特徴づけるのが、百花台型台形石器に類似する台形石器群(以下、百花台型台形石器類似資料<sup>(1)</sup>、第28図12~24・第29図49~51・67)である。石核・剥片・碎片・台形石器がみられ、①石核・剥片に礫面を残す場合が多く、②石器素材とするのが明らかに困難な小型剥片・碎片が出土し、それらを単独で遺跡に持ち込んだとは考えられないことから、原石を遺跡内に持ち込み剥片剥離をおこなったと言える。

**石材構成** 出土した石器の石材構成は、第21図に示した。各期にわたって安山岩が最も利用され、また在地産石材のチャートや頁岩、冠ヶ岳産黒曜石の利用率も高い。石器種ごとに石材の利用状況をみると、遠隔地産漆黒色黒曜石が細石刃石器群の素材として比較的多く、また在地産石材のチャート・頁岩がIV a層中の台形石器群の素材として用いられている。このように、目的とする石器に対応して在地・遠隔地産といった利用石材の変化がわかる。

**今後の課題** 今回の調査は小規模であり調査面積は45m<sup>2</sup>と狭く、またグリッドによって掘り下げ進度に差があるため、本遺跡の全様は明らかでない。したがって百花台型台形石器類似資料群などの分布範囲は、今後の調査によってさらに広がる可能性がある。西原F遺跡周辺には西原A・B遺跡をはじめとする旧石器時代遺跡が密集し、多くの石器が採集されている。それらには西原F遺跡出土石器に似た資料がいくつかみられるものの、百花台型台形石器類似資料はほとんどなく、また細石刃は西原F遺跡出土資料に較べて大型であるなど、異なった様相もみてとれる。これらの関係は、今後の調査により明らかになっていくであろう。

註(1)「小形の台形石器はよく百花台型台形石器と混同される」という指摘がある。本遺跡出土の台形石器は平面形が百花台型台形石器に類似するものの、素材の使い方などに差異がみられることから、これらを百花台型台形石器類似資料と呼称することにした。

(参考文献)

江本直「伊野遺跡」同編『熊本県旧石器時代調査報告書』熊本県文化財調査報告第81集 熊本県教育委員会、1986年。

木崎康弘「遺跡と遺物」『肥後考古』第5号 肥後考古学会、1985年。

坂田邦弘「九州の黒曜石」『史学論叢』13号 別府大学史学研究会、1982年。

田川隆・副島和明・伴耕一朗編『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第92集 長崎県教育委員会、1988年。

中川和哉「原の辻型台形石器に関する若干の考察」松藤和人編『百花台東遺跡 雲仙・普賢岳北麓の後期旧石器時代遺跡の調査』同志社大学文学部考古学調査報告第8冊、1994年。